

鹿兒島県史料

旧記雑録後編

三

題
字

鎌田 要人
鹿兒島県知事

例 言

一 本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）〔後編「舊記雜錄」を底本とし、卷三十六から卷五十八までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜錄後編 三」〕として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は、文禄五年から慶長九年までの九年間である。

一 底本に欠脱した一部の文書・記録・記事を、鹿児島県立図書館所蔵本から採録増補した。

一 底本に省略されている連歌や起請文の神文部分は、東京大学史料編纂所所蔵の「島津氏世録正統系図」「島津家重書」などより補充し、補充部分は▽△で示した。

一 収載された文書について、原文書や影写本がある場合にはそれにより修正したが、いちいちそのか所は示さなかつた。

一 文書・記録・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一 文書・記録・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一 卷末に文書目録をかかげた。

一 刊行にあたって文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、「」（墨書）、『』

(朱書)で囲んだ。

ロ 合点は、頭または右肩に「\」(墨)、「/」(朱)で示した。

ハ 文書の年月日・差出・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

ニ 書状の封じ目は、底本にあわせて「/」や「/」を併用した。

ホ 花押は(花押)とし、適宜に人名を傍注した。また底本に「在御判」とある場合でも、原文書や「島津氏世録 正統系図」などに花押があれば、(花押)と改めた。

ヘ 端裏書・付紙などは、「」で囲み、右肩にその旨を注記した。

ト 文書・記録・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一 原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は□を以て示し、解説困難な字は■又は■にして(ヨメズ)と注を付した。

一 原文の抹消は、その文字の左側に「と」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一 頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連か所の文末にまとめた。

一 人名・地名には適宜に傍注を付したが、原注と区別するために()で囲んだ。

一 原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一 欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一 漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意をそこなわないものは、一部当用漢字新字体を使用した。

一 異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、一部底本の用字に従い、併用したものもある。

一 変体仮名などは、現行の平仮名に改めた。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳(陣) 蜜(密) 諏方(訪) 麿(鹿兒) 飛彈(驛) 太輔(大) 狼籍(藉) 百性(姓)
玄番(蕃) 愛岩(宕) 覚語(悟) 案堵(安)

旧記雜録後編三 目次

例言……………一
目次……………四

卷三六	文祿	五（一五九六）年	正月——六月（義久公・義弘公・家久公）	……………一
卷三七	慶長	元（一五九六）年	七月——二月（義久公・義弘公・家久公）	……………三〇
卷三八	慶長	二（一五九七）年	正月——五月（義久公・義弘公・家久公）	……………六八
卷三九	慶長	二（一五九七）年	六月——八月（義久公・義弘公・家久公）	……………一〇四
卷四〇	慶長	二（一五九七）年	九月——二月（義久公・義弘公・家久公）	……………一三六
卷四一	慶長	三（一五九八）年	正月——六月（義久公・義弘公・家久公）	……………一七五
卷四二	慶長	三（一五九八）年	七月——一〇月（義久公・義弘公・家久公）	……………二一九
卷四三	慶長	三（一五九八）年	十一月——二月（義久公・義弘公・家久公）	……………二七〇
卷四四	慶長	四（一五九九）年	正月——四月（義久公・義弘公・家久公）	……………三四五
卷四五	慶長	四（一五九九）年	五月——七月（義久公・義弘公・家久公）	……………三七九
卷四六	慶長	四（一五九九）年	八月——九月（義久公・義弘公・家久公）	……………四一七
卷四七	慶長	四（一五九九）年	一〇月——二月（義久公・義弘公・家久公）	……………四四九
卷四八	慶長	五（一六〇〇）年	正月——三月（義久公・義弘公・家久公）	……………四九四

卷四九	慶長	五(一六〇〇)年	四月——八月	(義久公・義弘公・家久公)	五三〇
卷五〇	慶長	五(一六〇〇)年	九月——十一月	(義久公・義弘公・家久公)	五七二
卷五一	慶長	五(一六〇〇)年		(義弘公)	六二一
卷五二	慶長	五(一六〇〇)年		(義弘公)	六八四
卷五三	慶長	五(一六〇〇)年	冬——同六(一六〇一)年	春(義久公・義弘公・家久公)	七一九
卷五四	慶長	六(一六〇一)年	四月——二月	(義久公・義弘公・家久公)	七五七
卷五五	慶長	七(一六〇二)年	正月——八月	(義久公・義弘公・家久公)	八〇一
卷五六	慶長	七(一六〇二)年	九月——二月	(義久公・義弘公・家久公)	八四四
卷五七	慶長	八(一六〇三)年		(義久公・義弘公・家久公)	八七四
卷五八	慶長	九(一六〇四)年		(義久公・義弘公・家久公)	九二四
文書目録					九六五

(表紙)

義久公
義弘公
家久公
文祿五年自正月
即慶長元年
至六月

後編 舊記雜錄 卷三十六

(原寸縦二四・三センチ 横一六・七センチ)

1 「北郷掃部助久村時久譜中 四男

文祿五年春、龍伯公賜采地二千石于肝屬小原、移住濱之市而奉仕、
久治家傳曰、久村爲質在伏見者五年、時伏見御城物恩、久村走登城一番、乃達秀吉公之台聽、爲其賞頂戴、采地二千石、御朱印、達、龍伯公高聽、依之賜小原二千石云々、

2 「二番箱家久公六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

御札拜見仕候、内々其地之事承度折節、御使札畏入候、先以其方何事無御座候由玆重候、其表御仕置之儀、御意之趣上井甚五郎委細申渡候間、具不申入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長元年正月十日 三成(花押)

嶋津又八郎殿(家久)
御返報

嶋津又八郎殿
實報
石治少
三成

3 「義弘公御譜中」

慶長元年丙申正月、發於金屋市中、〔筑前也〕同月十三日、上著于攝州大坂岸矣、是亦茲歲、大明勅使有來朝于朝鮮國之告、故徵諸侯集騎馬、備冊使之見聞、爲欲異國之美談也、

4 「新納旅庵譜中」

文祿四年之冬、依殿下之徵、義久主十二月廿一日、發於帖佐經陸地、逾年於筑前州秋月金屋市中、慶長元年丙申正月十三日、著船大坂、此時從朝鮮國來大明遊擊將軍請和諧、爲渠之遊覽、欲催人衆揃騎馬備異國口舌、然而此事徒止矣、未知何故也、

5 伊集院下野入道殿

今度國本就改易、諸侍知行支配等之儀、一切無案内之条、

始末之首尾萬端不審之至候、雖然 龍伯様 武庫様以御

在國被仰付候間、定各之儀宜可被加 御意候、若不可然

御沙汰雖在之、連々不願身上之安危、奉公之忠節無比類

儀、片時も無忘却候条、縱 御兩殿雖不被成御同心、頻

申調、別而知行可宛行候条、於進退之儀者、無氣遣弥可

被抽忠貞候、仍證狀如件、

文祿五年正月十四日 (家久) 忠恒(花押)

伊集院下野入道殿 (久松)

「此御書、抱節譜中ニ在リ」

6 「御文庫四拾八番箱義久公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

改年之御慶多幸々々、仍旧冬十一月拾六日并拾二月七日

之兩通、慥相届令披見候、先以其表無爲之由承、満足に

候、赤國入之儀者、當年者差延由候条、爲心得候、兼又

聖門様へ手本奉頼候へ共、未出來候、如何様後便之時可

令進入候、將又玆敷唐筆之扇子式本 到來、令祝着候、自

是とうふくぢッ今度令進入候、猶委曲者上并甚へ申含候、

恐々謹言、

「朱力キ」「慶長元年」正月十五日

(義久) 龍伯(花押)

又八郎殿

7 「永吉邑主藏」

其表長々在番辛勞、不被及是非候、仍小袖一被下候、猶

毛利豊前守・平野新八郎可申候也、

「朱力キ」「慶長元年」正月十六日

○「御朱印」

嶋津又八郎とのへ

8 文祿五年丙申

正月十八日、巢山伴五

朝鮮にて戦死

二月三日、長岑伊豫入道宗珍 北郷一雲の臣にて、主を慕ひ殉死す。

9 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其元より之狀、節々付狀ニ被書之候、自今以後

ハ直書ニ可被相認候、先日も此由申越候キ、未相届

候哉、今度も存松へ宛書にて候、かやうに候へは取

紛事候間、爲心得候、

其元辛勞之段、自是察存計候、就夫川東善左衛門尉被差

越候間、爰元之様子可申達候、拙者之意分者、上并甚五

郎へ具相含候条關筆候、恐々謹言、

「朱力キ」「慶長元年」正月廿日

龍伯(花押)

又八郎殿

10 『永吉邑主藏』

加増目錄

薩州鹿籠之内別府村 高百六拾石六斗九升 真蓋之門

惣合五百斛 高三百三拾九石三斗一升 庄内末吉 深川村之内

大閣様以御誼、分國檢地之儀依被仰付、諸侍知行就改易本領相離、殊打上之田數無足之条、可爲迷惑候、雖然知行方之儀、龍伯様 武庫様へ得御内談候間、各之儀別而入念可然可申付候条、聊不可有機遣之狀如件、

文祿五年

正月廿日

忠恒御判

源七郎殿

(張紙)

「此源七郎宛ト喜入攝津守宛へ家久公御譜中ニナシ」

11 「家久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

大閣様以 御誼、分國檢地之儀依被 仰付、諸侍知行就改易、代々相繼之領地相離、殊打上之田數無足之条、可爲迷惑候、雖然知行方之儀、内々 竜伯様 武庫様江得御内談候間、各之儀別而入念可然可申付候、聊不可及機遣候、若本領之望於在之者、以時節安堵不可有相違之狀

如件、

文祿五年

正月廿日

忠恒(花押)

入來院又六殿

12 『喜入氏藏書』

大閣様以 御誼、分國檢地之儀依被 仰付、諸侍知行就改易、代々相繼之領地相離、殊打上之田數無足之条、可爲迷惑候、雖然知行方之儀、内々 竜伯様 武庫様江得御内談候間、各之儀別而入念可然可申付候、聊不可及機遣候、若本領之望於在之者、以時節安堵不可有相違之狀如件、

文祿五年

正月廿日

忠恒

喜入攝津守殿 (忠統)

13 『新納氏藏書』

今度國本就改易、諸侍知行方支配等之儀、一切無案内之条、諸事不審至候、雖然 龍伯様 武庫様へ得御内談候間、連々顯心底之眞実、奉公一筋儀、無忘却候条、別而入念知行可宛行候間、此旨亦可抽忠節候狀如件、

文祿五年

正月廿二日

忠恒(花押)

新納五郎右衛門尉殿

14 『年代記』

一丙申 慶長元年、京・小坂七震動、家モ崩、人モ數万人死、七月六日、御家門歸洛、從志布志出船、

15 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以京都何も無何事候、定而武庫御事も、此比ハ被成上着候之覽と存事候、隨而ハ圖書頭を初、各へ長陣辛勞之段、可有御傳達候、就者有方之儀、當家景中之事、一人にて連々度之心底にて候之処ニ、當時者其分に候之条、此跡ニハ違候て、別而被致奉公候、其故ニ候之欵、兼日遺恨に被申候衆三四人之事、此比ハ遮而悪口無之由申候、世上存分之様ニ罷成候、謂候欵、又さのミ申候てハ、後日我爲いかゝと被存候欵、用捨の躰にて候、右に申候ことく、奉公無矣儀被仕候之間、其趣に打任せ候て召仕候、併拙者累年の心底相違無之候、かやうニ申候とて、色にあら

ハされ候てハ可惡候、爲御存知候、此よし圖・抱・雲・紀へハ密々にて可被仰聞候、以上、

今度有馬次右衛門尉を以、八ヶ条被仰越候、具令承知候、仍右条々内、浮地之分量并家景中諸侍之帳之儀承候、我等尔々不存候之間、幸侃へ申出、相調可進候へ共、左様ニ候てハ、何之便ニ相聞候之欵と、不審可多之候之条、先々令用捨候、此兩条ハ直幸侃へ被仰付被召寄候て、可爲專一候、其餘之条々尤ニ候、巨細者次右衛門尉渡海之刻可申候、兼又平田太郎左衛門尉可差渡之由、先札にて申入候ツ、雖然彼者申子細候て、其方へも京都へも未罷上候之間、不首尾之躰候、爲御存知候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
「慶長元年」正月廿三日

竜伯(花押)

又八郎殿

16 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々圖書頭 源七郎 喜攝 種子左 比紀 抱節
鎌雲 伊弥九 本治兵 光明院、其外神徳院・在陣
之人衆、めい／＼辛勞之由申度候、急便候条、具にも不申候、以上、

今年之御慶千々万々、不可有盡期候、此等之御悦、以

使札可申覚悟に候へ共、好便候条、先令啓候、

一我等事、旧冬極月十九日、帖佐罷出、陸地を參候之条、

やうく去十七日、大坂迄上着候、當年者惣別諸大名

衆、御目見得之儀相延、來式月朔日各出仕可在之由候

而、我等儀も于今、御目見得無之、大坂ニ堪忍候、石

治少弥御念比之儀、無別条候事、

一大閣様當年者於大坂被成御越年、いまニ大坂ニ被成御

座候之事、

一其表番手之儀、誠御辛勞之至、中々書中不得申候、我

等もいまた、御目見得無之ニ付て、御知人中へも不致

參會候之条、諸事承付儀も無之候、於様子者、少攝へ

可知儀候之条、萬々可有入魂儀、不及申候事、

一國元之儀、我等出國時分迄者、支配已下未究候キ、

竜伯様被成御在國、幸侃在之儀候間、定此比者支配之

始末、大方可究と存候、今度者先近年諸侍公役へ打替

を被遣候て、加増之儀共へ、重而之儀たるへきよし候

つる事、

一當年者貴所ため祈念可入之由候条、於高野求聞持修行

之儀共申付、令祈念候、其外御祈念之儀、不存由断候、

於其元も其御格護肝要ニ候、就中森喜右衛門尉勘候占

進之候、爲御心得候事、

一伏見へ御座候御女房衆、何もく御勇健之由候、可御

心安候事、

一貴所の山かへりのおほ鷹、一段の羽飛にて候之由候、

かむなむせうも水鳥三とらせ候由、法元申候事、

一内々承候薰之藥種調候て、御家門様へ上置候、定此

比者被成御調合候て、其地へ可被食越と存候間、急度

以飛脚可申候条、不能一二候、恐々謹言、

〔朱力キ〕正月廿六日 義弘(花押)

又八郎殿

17 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

以先書、色紙未出來之由雖申候、其後精を入致懇望候故、

只今、聖門様が御持せ候間、令進入候、猶委曲川善左衛

門尉可申候、恐々謹言、

〔朱力キ〕正月廿八日 竜伯(花押)

又八郎殿

18 「圖書頭忠長譜中」

文祿五年丙申即慶長元年也、賜舊領・新恩之地、目錄曰、

東郷

高七千貳百拾四石一升八合一夕六才

伊集院之内

竹山村

高三百五石八斗三升五合三夕

河邊之内

田部田村

高千四百八十五石九斗二升六合五夕

同

長田村

高七百廿六石四斗四合五夕

同

平山村之内

高廿石三斗一升三夕四才

日州諸縣飯野内

前田村之内

高貳百四拾七石四斗五合二夕

惣合老万石 此内七千百石加増

右加増之儀、當時依被致老者役、令宛行候訖、自今以後

倍可被遂奉公事、可爲專要者也、

文祿五年

二月三日

龍伯(花押)

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

尚以拙者申付候内ニハ、百石におよぶ加増無之かと

存候、拾石之内外之加増ハ可有之候、此比も幸侃前

より加増之儀被申候へ共、貴所歸朝被相待、可然之

由申出し候、兼又其地へ在之衆へ加増之御約束、さ

のミ過分にハ、如何御用捨肝要ニ候、其故者、うき

地三四万ニハたらしかと存事候、爲御心得候、

正月廿三日之御狀、今日到來、先以其地替儀無之由、

令祝着候、

一今度之配當之儀、京都御下知を以仕候処、さてハ諸侍

何も述懐之躰、其色外ニ出候之由、笑止之至候、就其

其元にて配當有度之段承候、拙者ためにハ満足候、乍

去此度之配當之儀ハ右に申候ことく、從京都幸侃へ被

仰付召仕候間、其方へさし越候て諸變於有之ハ、必定

京都へ悪可被成申候之条、即刻此方之ためニ罷成間敷

候、然間此節ハ不任其儀候、貴所餘長陣にて候之間、

拙者可相替覚悟にて、京都へ得御内儀候、御返事次第

可致渡海候之条、可爲歸朝候、其刻何篇被仰付可目出

候、今少可被成御待事、

一當家事、今分にてハ難相續之由承候、左様にも可有之
欵、併武庫上洛以前にも、當國之始未令熟談候之条、
さのミ御心遣入間敷欵、先當時ハ京儀之補、肝要ニ存
候事、

候事、

一其地へ在之各へ、加増之約束共被成候哉、尤ニ候、先
々圖書頭へハ七千石餘加増申付候、其外之衆へも、次
第〳〵ニ貴所一味を以可申出候、弥別而可致奉公之様
ニ可被仰聞事、

一武庫御側へ罷居候人衆へハ、伊勢弥九郎へ式百石被下
候、其外之衆へも或百石、或式百石可被下由候て、さ
ん用を以、田數肱枕へ御渡し候之由、幸侃被申事候、
爲御存知候事、

一替衆之儀承候、はや〳〵申付候間、涯分急候て可指渡
候、聊無油断候、餘者後便之時可申通候、恐々謹言、

〔朱かき〕
〔慶長元年〕二月六日

竜伯(花押)

又八郎殿

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

當春之御慶重疊、不可有盡期候、先度好便候而用一札

候、定可相届候、

一扱も〳〵長陣之御辛勞、いくたひ申ても、中々難述筆
舌儀共ニ候、遊撃渡海之由、於事实者、定引陳之儀程
有間敷候、萬々目出度候、

一我等事、去月十七日大坂ニ上着候、

一大閣様、去年霜月已來被成御煩候へ共、此比者被成
御快氣候、誠以千秋萬歳候、

一當年者、諸大名衆 御目見得相延、來十日各出仕可在
之由候之条、我々儀も大坂ニ堪忍候、 御目見得相濟
候者、追付伏見へ可罷上と存候、

一見來候間、御着物一重・帶式筋・筆式拾對・杉原上中
參拾帖・しりかい三懸進之候、まことに御音信之驗迄
に候、諸吉猶永日中倍可申通候、恐々謹言、

〔朱かき〕
〔慶長元年〕二月八日

義弘(花押)

又八郎殿

〔義久公御譜中〕

〔正文在春田主馬〕

薩州市來湯田村之内

高三石

中河 又十郎

高 三石

たいらの「朱カキ」

孫六「春田主馬親ヤ
ト押札ニ有之」

高 三石

一之宮大宮司
左近允

先年川内へ御指出之節、御輿をかき候、其爲感恩領知被下者也、

文祿五

二月八日

伊集院右衛門入
幸侃(忠棟)
(花押)

23
〔全御譜中〕

薩州市來湯田村之内

高五斛

先年川内へ御指出之節、御輿をかき候、其感恩領知被下者也、
(為脱カ)

文ノ五

二月八日

伊集院右衛門入道
幸侃(花押)

春口土佐守殿

24
『雜抄』

〔本文書ハ二三号文書ト同文ニノキ省略ス〕

〔外中馬十郎左衛門殿・市來豊前入道殿ト同案有之候へ共略ス、員數日付等有差〕

25
『永吉領主藏』

就被差遣淺野彈正、被仰出候、

一 船相揃次第可被成御渡海候条、高麗有之舟共儀者不及申、面々在所へも申遣此時候間、舟數有之様入精可有馳走候、於名護屋可被爲受取候、一艘も多程可爲手柄候、然ハ一手と組とを仕、慥成奉行相副、彈正相加奉行、名護屋へ可差越事、

一 各兵粮事、多貯候程可爲手柄候、左候とて、兵粮無之候を所持候様申成、下々迷惑させ候者相届間敷候、然者何迄之兵粮有之通指日限、人數も各如在ニて有間敷候条、當分軍役程無之候ても不苦候間、有次第相改一札を出、兵粮手寄ニて可受取事、

一 猶以船到來次第被成御渡海、御仕置爲可被仰付候間、弥以不可有油断候、委細淺野彈正少弼可申候也、
〔慶長元年〕

二月九日 御朱印

嶋津又七郎とのへ

26
〔正文在文庫〕

就被差遣淺野彈正少弼、被仰出候、

一 舟相揃次第可被成御渡海候条、高麗有之船共儀者不及

申、面々在所へも申遣、此時候間、舟數有之様〔本マ〕入情可有馳走候、於名護屋直可被爲請取候、一艘も多程可爲手柄候、然者一手々組々を仕、慥奉行相副、相加彈正奉行、名護屋へ可差越事、

一各兵粮事、多貯候程可爲手柄候、左候とて、兵粮無之候を所持候様申成、下々迷惑させ候てハ可爲不屈候儀、然者何迄之兵粮有之通指日限、人數も各如在ニてハ有間敷候間、當分軍役程無之候ても不苦候条、有次第相改一札を出、兵粮手寄々ニて可請取事、

一猶以船到來次第被成御渡海、御仕置爲可被仰付候条、弥以不可有由断候、委細淺野彈正少弼可申候也、

二月九日

〔大隅御朱印〕

羽柴薩^(義弘)侍從とのへ

27 「御文庫廿二番箱八巻中」

厥后不遂參會、非本意候、仍去年者當國へ御下向候之段、雖承及候、其節在京之条乍存候、于今於御滞留者、可致熟談殘多候、京儀宜相調御上洛之有増候哉、〔本マ〕尤目度候、至向後、倍互可申通事本懷候、隨而何々令進獻之候、寔〔本マ〕補空書計候、恐々、

〔御譜朱カキ〕
一慶長元年欽二月十八日

古溪和尚

〔義久公御案文也、御譜中ニ在リ〕

28 「兒玉氏家藏」

猶々後人、おしき墨跡にきす付候と可申候、歌之事雖不對酌淺、古歌之事情間染筆候、無案内なる事候へとも如是候、かしこ、

〔文祿五年カ〕
二月廿三日

龍伯

〔近衛信輔公〕
三木

29 「兒玉利昌譜中」

一文祿五年丙申、先是近衛信輔公〔初信〕謫居坊津、爲三善書有名、二月、貫明公請讚古画、乃二十三日、尺牘謝公、而七月歸洛、是月實相〔兒玉利昌事〕還自朝鮮、公乃賜實相以其尺牘等云、

30 「正文在井尻神力坊」

大隅國帖佐餅田村之内

一作

上前蘭之門 〔印〕

○ 分米大豆三石定

住吉村之内

○ 分米大豆九石者

眞幸院飯野宮原村之内

倉本之門

分米大豆卅八石定

薩州隈城西手村之内

麦下之門

分米大豆六十九石四斗九升

高合百拾九石四斗九升

右知行之内田島山畑等、各以談合、無親疎可被配分候、

若憲法之外違乱族在之者、即可被申出候、以糺明可被成

其沙汰者也、

文祿五年二月廿三日

(新納)
旅庵

一雄

(川上)
肱枕

井尻豊前坊

〔口上書〕
井尻豊前房

〔家久公御譜中〕

〔正文在島津又作〕

以上

態申入候、仍きま御いもうと御知行之事、さいせん千式

百石被遣候、今度之わりニなく候由承候、此たんへとか

くニ被遣候へて、かなわぬ計ニ候間、御わつふ候て被遣

よく候へく候、おりくニ御心つけ候も同事ニ候、御心

へのためニ申候、恐々謹言、

〔朱かき〕
「慶長元年」

三月二日

石田

治少入(花押)

羽又八様

人中

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

今度幸便へ一書無之事、無御心元候、仍先度聖護院殿へ

御手本之儀被仰候キ、先色紙進之候ッ、其後從青蓮院殿

手本ニツあそはし候て召下候、是又進覽候、兼又油畑三

挺進候、此内一挺之薄艶者態誂申候、匂ひなと可有之候、

爲御存知候、將又此比安宅殿被指出候之間、娘か御暇之

由申候へ共、治少老々言上有間敷之由被仰候之条、可致

在京覚悟候、恐々謹言、

〔朱かき〕

「慶長元年」三月五日

龍伯(花押)

又八郎殿

33 「家久公御譜中」

大明勅使來朝、則朝鮮在陣諸將、各各城營、入置勤番兵衆、主人皆以率少寡騎歩、待勅使渡海節、與諸將俱解歸陣纜、直上京都可謂 秀吉公之旨、石田治部少輔三成達之於嚴親 義弘主、又告我之書懇懇、記左、

34 「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其地在番人衆、銘々辛勞之段可申候へ共、近日以使者可申候間、期其節無沙汰ニ相過候由、相心得候而可被仰聞候、圖書頭・石治少々貴所御供たるへき旨被仰候条、無子細候、い勢弥九郎事ハ定供申候て可罷上と存候、就中光明院・神徳院事、貴所渡海之祈念、兼日より抽丹精、不可有由断之旨、申度候、以上、

急度令啓候、

一 大明勅使來朝ニ付而、高麗在番衆各人數をハ殘置、主々一身之儀者可致歸朝之由、被仰出候、先以目出存候事、

一 貴所事も、大明勅使渡海之刻、各同前歸朝候て肝要之由候、其地へ殘番衆之儀者、伊集院抱節・比志嶋紀伊

守・鎌田出雲守此三人主取にて、當手之人數七佰程殘

置、貴所ハ圖書頭を始、供衆十騎程あがらば、十四五騎ほと召列、其表が直京都之様ニ可被罷上之由、石治少より承候、被成其心得可有上洛候之事、

一 木脇三左衛門尉所より本田源右衛門尉までの書狀ニ、

其元舟つもり之儀、當分在番人數ニ應し候へハ、舟もあまる程在之由、申越候、萬々珍重存候、尚以舟つもり以下無緩被仰付、貴所早々上洛肝要ニ候、殘番衆之儀も、あまり長陣たるへきやうニハ聞得ず候間、殘番衆之乗船等、氣遣なきやうニ可被入念候、もし舟共不足之儀候者、それより早々國元へ被仰越候て可然候、於様子者、小西攝州へ被得御内儀、諸事可有分別候、とかく近々以使可申候へ共、先好便之条、申越候、

恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長元年」三月九日 義弘(花押)

又八郎殿

35 「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々 聖門様御手本之儀、御事繁ニ被入御念被遊候由候、御忘却候ましく候、

誠今年之御慶千々萬々、不可有盡期候、爲此等之御悅、

御札并御太刀一腰・馬一疋被懸御意候、目出玆重之至候、

就中 聖門様・石治少・幽齋・安三州・麻吉左各への御

祝物共、存松相調進入候、銘々御返事被成遣之由候、隨

而 聖門様へ被申上候御手本の儀、今程者大仏ニ被成御

住宅、弥御事繁なり候て、御手前急度被調下儀もなりか

ね候まゝ延引候、此飛脚早々まかりもとり度之由申候へ

共、とかく御手本の儀者、被遊候て可被下候間、飛脚留

可申之由、依仰此間留置候、少も此者非私曲候、只今御

手本出來候間、持せ候、何共急度可爲歸朝之条、以面可

申談候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
慶長元年三月十日

義弘(花押)

又八郎殿

36 「御文庫拾七番箱十三卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶々御歸朝之儀被仰出之由候条、近日可爲御上洛候、

爲御迎罷出、御祝詞等旁可申上候、

改年之御慶玆重奉存候、當年者諸篇被任責意、早々御歸

朝奉待候、抑去十二月廿三日之尊書、去月廿三日ニ相届

拜見仕候、其元御番等堅固ニ被仰付、公私各御無事之由、

目出度存候、先々りんす一巻被贈下候、被思召寄忝次第

候、次 聖門様へ御音信旨披露仕候、委細以 御書被仰

越候御手本之事、種々雖被成御斟酌、達而申上、只今之

便宜ニ下申候、 武庫様當時者伏見ニ御座候、 大閤様

御前能御殿敷被成御拜領、御仕合共候間、御心易可被思

召候、隨而ゆかけ二具・御筆五對令進覽之候、聊表御祝

儀計候、此等之趣可然之様可被申入候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
慶長元年

三月十日

〔伊勢貞知〕
友枕齋

如貴(花押)

伊勢弥九郎殿

37 「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」家久公御譜中ニ在リ

先度小西攝州被成下向候之条、令傳筆候キ、同篇之儀

ニ候へ共、爲御迎國分左京亮差渡候間、重而令啓候、

一大明勅使來朝付而、高麗在番衆各人數殘置候て、主々

之儀者可致歸朝之由被仰出候、誠以目出存候事、

一貴所事も勅使渡海之刻、各同前可有歸朝之由候、然者

圖書頭を始、供衆十騎程、其上ならば十四五騎ほと食

列、其表々直可有上京之由、石治少より承候、被成其

心得、急度可有上洛候之事、

一其地殘番之儀者、比志嶋紀伊守・伊集院抱節主取にて、當手之人數都合七佰程殘置候て可然之由、石治少より承候、此趣をもて、可然之様可被仰付置事、
 一鎌田出雲事、右兩人殘番衆へ主取同前ニ可申付之由、石治少より承候間、先札ニ申越候、然共殘番衆之儀、高麗渡海遠近次第可申付之旨、治少も承候条、鎌雲事ハ最前も藏人令渡海、其上出雲女房共在京候、於于今も手前之休期無之段、被聞食置候て可給之由、治少へ申理候へハ、御得心をもて歸朝肝要之由被仰候間、鎌雲事も食列、直可有上洛候、如此候へハ、殘番衆之主取比紀・抱節可爲兩人事、
 一其元舟手之儀、當分在番之人數ニつもあり候へハ、舟もあまるほと在之由、木脇三左所より本源右までの書狀ニ見え候、此者舟手之儀のミ令氣遣候つる、右之到來何よりく環重存候、猶以舟つもり已下、無緩被仰付、貴所早々上洛肝要候、其元出船時分之儀共、小攝へ被逐熟談、可被得指南候、不及申候へ共、大事之渡海にて候間、日次をよく見せられ、天氣次第可有出船候、光明院・神徳院祈念之儀、渡海以前より別而可被抽丹精之旨、我等申すとして可有傳達候、於此方も御祈念

之儀、少も不存由断候事、

一殘番衆之儀も、あまり長陣たるへきやうニハきこえず候間、乗船之儀無氣遣之様ニつもありをかれへく候、もし舟共不足之儀候者、早々それより國もとへ被仰越候

て可然候間、左京亮口上ニ相含候、恐々謹言、

〔朱かき〕
慶長元年秋三月十一日 義弘(花押)

又八郎殿

38 『雜日記』

文祿五年三月十一日、於京都御所御庭前のいとさくらさかりなりし砌、めしよせられ、ひねもす御酒宴の折ふし、歸國申のよしありしかは、此御詠歌を拜領させられ侍ぬ、たゞにハいかくと存、御返歌かたのこたく申侍けれども、頓作なれハ書とむるに及はず、

叩凍負來寒谷月拂盡暮山雲

いく春もかけてやにはふいと桜

君かよハひに華もひかれて

せめてさはこの春はかりいとさくら

たひたつ人を引もとめはや 龍山

「此歌、忠元譜中ニ在リ」

39 「御文庫二番箱家久公六卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御札致拜見候、其表相替儀無御座候由、被仰越候、爰元も玆敷儀も無之付而不申入候、(寺次正成)寺志明日出船被申候、我等も使者を差上候間、御用候へ、可被仰越候、何様近日以參御見舞可申入候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長元年」

三月十一日

小攝

行長(花押)

嶋又八様まいる
御報

40 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

此度相良新右・三原諸右を以、条々被仰越候儀、具ニ承届候、就中替衆之儀承候之条、即申付可進之覚悟候之処、先札にて如申候、京都より大莊なる儀のミ被仰下候て、少遅々仕爲躰候、乍去不存油断候之間、頓而可致渡海候、猶巨細之趣へ、右兩使可申上候、恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長元年」

三月十九日

竜伯(花押)

又八郎殿

薩广舟 七端帆 邊麦對馬之助

中乘五人 かこ拾一人

合拾七人令歸朝候条、無吳儀可被成御通候、以上、

文祿五年三月廿六日

嶋津又八郎
御判

船改

御奉行衆

42 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

爲當年之祝儀、遮而使書令満足候、自是茂旧冬今春書狀差越候處、未相届候つる哉、定其後者可爲通達欵と存事候、其元之様子、川善左衛門尉歸朝之時、具可承候、猶巨細者鹿右衛門尉へ申含候、恐々謹言、

三月廿七日

龍伯(花押)

又八郎殿

43 「雜旧記抄」

薩州河邊之内

一作

平山之村

諸侍ニ令配分候、其余分之内、割付候之訖、

高三拾斛

41 「雜抄」

此地爲加増被差遣候者也、

已上

文祿五年

三月卅日

伊集院右衛門入道

幸侃(花押)

一 乘院

44

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆城權右衛門」

猶々 新正八幡へ上ふき板之事、於其元ニ談合申候
 様に、富山備中入へ弓断致まし由、我等申候由、其
 より可被申候、まつく、雨露に御ぬれ候ハぬやうに、
 さいかく肝要候、一主事茂座主前よりならぬ事ニ候
 ハ、かし候儀ふんミやうにおひてハ、肱枕前より
 もことハリ候て可然存候、兼又右へ祈念之札・はい
 ち、一々頂戴いたし候、誠々こころさし程、一入
 よろこひに存候、將又又八郎殿歸朝、さこそうれし
 く思ひ候、こなたもおなし心にこそ、すもしあるへ
 く候、次ニかすかに候へ共、御酒樽一荷持せ候、し
 やうくはんあるへく候、又いづれもく奉公申、男
 女共辛勞之由、從其心得頼存候、肱枕ふうふへも、

心得候て可被申候、細碎源介申含候、以上、

伊集院源介罷上候、ひんきに文のほせ候、うれしくお
 もひまいらせ候、

一 高麗引陳茂やかてたるへき由候間、又八郎殿むかへと
 して、國部ぬいと申者遣候、定而頃ハ致渡海候覽と申
 事ニ候、

一 從幸侃被頼候哉、安佐三州より我等むすめ事、留主中
 是非共庄内へつかハし候へと被申候、其返事、我等類
 主と云、ことに源次郎方も上洛之事ニ候条、今程つか
 ハすへき儀ハかつて成間敷候、下向候ハ、其時之儀
 たるへき由申取候、身つから下向候ハ、やかて申さ
 れへき間、可有由断候、

一 父子ミなく星供御成就、又高麗・京都へ祈念として
 不動こま一七日、般若寺別當坊修行させられ候由、誠
 満足之至候、又八郎殿も歸朝程有間敷候、

より

宰相殿

義弘

45

「義弘公御譜中」

一 歸朝御悅之事、付渡海無恙様可被入念之事、

一 御勢揃之事、付馬之事、

一 又八郎殿供之人衆、圖書頭・鎌田出雲守已上十騎か十五騎か召列、可有上洛候、右之人數者遠近之沙汰不可在之事、

一 抱節・比志嶋紀伊守、殘番衆主取之事、付七百人之番衆遠近次第可被殘置之事、

一 在京ニ付而用所之儀者、銘々國元へ直ニ可被仰遣事、但從是も申下候事、

一 から嶋にて、從公儀被召置候御上米、并諸道具已下之始末、入念可被仰付事、

一 殘番衆乘船之事并兵糧米之事、付かたく嶋ニ在之高麗人之事、

一 又八郎殿着具足并馬面・馬鎧、付鉄炮五十丁・鎗五十本可被持之事、

但鳥之羽さや此内ニ可在之事、

一 伊集院小傳次歸朝之事、

以上

〔朱力キ〕
〔慶長元年四月款〕

46 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

以上

三月七日之書面、今月六日ニ到來、具令披見候、仍其表無何事候哉、此方御同前ニ候、兼又先日者手本進覽候之處、慥相届所好ニ合候哉、大慶之至候、猶巨細之段、鹿嶋右衛門可申達候、其地之様子、川東善左歸朝之刻、精可示預候、余者期後喜候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長元年款〕 卯月九日 竜伯(花押)

又八郎殿

47 「御文庫三番箱中」家久公御譜中ニ在リ

先度者爲御見廻雖被成御越候、何之風情も無之、無調法御殘多存候、其後早々以書狀成共可申述候処、何角仕延引、非本意候、尤自身罷越可申入候へ共、當城普請等申付候条、無其儀候、旁期後音候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長元年〕 四月十二日 嶋又八郎

忠恒(花押)

(毛利高政)
毛民太様

人々御中

其後者令無音候、仍此表御働之儀、近々ニ可被仰付候由、

被成 御朱印候間、其許用意不可有油断候、然者我等事、

武庫様於御渡海者致上洛、國元御檢地共被仰付候御札共

申上、私用をも相違候て、又如此方之可差渡由、從石治

少被仰遣候間、武庫様御渡海次第、与風可令歸朝覚悟候、

自然御働八月之比迄も相延候者、必其許爲見廻可令下國

候条、兩三人之儀も、從是一左右迄其元へ可被相待候、

爲其如此候、恐々謹言、

〔朱カキ〕慶長元年四月十三日 忠恒(花押)

源七郎殿

喜入攝津守殿

入來院又六殿

〔此御書、喜入忠續譜中ニ在リ〕

〔正文在當家トアリ、双方ニ正文如何〕

49 「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

幸便之間令啓候、仍可有御歸朝之由、被申出候趣承之、

一入目出度令満足候、相積事以面可申述候、急便之条一

筆令申候、猶友枕可申越候、恐々謹言、

〔朱カキ〕慶長元年卯月十五日 近衛龜山公御判(花押)

又八郎殿

50 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

唐之天使上洛ニ付、京都御下知を以、貴所事被成歸朝之

由相聞、誠以満足此事候、仍此等之御悅爲可申入、使札

差登候、巨細彼者可申候、隨而高麗へ人數被殘置之由候

之条、連々申付候替衆急ニ可指渡候処、天使上洛之儀并

御馬揃之儀ニ付、種々被仰下儀候之条、此中之盛に皆以

相違仕候之故、少遅引之躰候、併漕分申付候間、可御心

安候、恐々謹言、

〔朱カキ〕慶長元年卯月十六日 竜伯(花押)

又八郎殿

51 「義弘公御譜中」

〔正文在松本慶彌左衛門〕

猶々拙者馬ハ早馬にてハ無之候、乍去よく責入候者、

如形ほとにハ可成候欵、中々御馬などの足之面影に

不可及候、將亦此草花一本進之候、又御隙之透光臨

可爲祝着候、

先日之後御床敷候、仍早馬細々御責候哉、無比類足難忘

存候、至吉田前馬場御出候者、雖爲何時可罷出候、をか

しき馬関東衆くれ候、一圓くたひれ候へ共、吉田馬場へ

御出之折節可懸御目候、廿三日まで血之日敷にて候、廿

四日廿五日兩日之間、其方次第候、猶期面謁之時候、恐

く謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年款〕卯月十九日
(前心)
(花押)

(義忍)
兵庫頭殿

52
〔家久公御譜中〕

〔正文〕

尚以陣屋く奉行を被付置、火之用心以下堅申付

候様ニ念を入、可被仰付候、以上、

態申入候、其方御事ハ、勅使渡海ニ付てハ、五拾三十二

て可有歸朝候、左候へは跡之御留主之事堅御申付て、若

何様之雜節なと何方ニ申候共、其方か羽兵ハ一左右なく

候ハ、むさと仕たる、無覚悟様ニ能物主御申付候て、

火之用心以下迄御申付可有候、御留主之事、無心元なき

様ニ御申付肝要候、恐く謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕
石治少

卯月廿五日
三成(花押)

嶋津又八郎殿
御宿所

53
〔二番箱家久公六卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御札致拜見候、昨日従是も以使札申入候、定而可相越候、

勅使不慮之儀出來付而、各御歸朝相延候之段、無是非次

第候、委曲昨日申入候間、非具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年款〕
卯月廿五日
小攝
行長(花押)

嶋又八様
まいる
貴報

54
『旧記雜抄』

受取申金銀之事

一合黄金八拾六匁ハかこしま

一合銀子拾貫四拾九匁五分ハ同所より

文祿五年

卯月廿八日

(新納長住)
休閑齋
旅庵判
(久徳)
町田出羽入
存松判

右銀之内、堅山讚岐守納之内より、出目拾四匁七分四り、

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆城權右衛門」

かこしまゝ入銀拾八匁之内老匁七分四り不足、引殘而拾六匁式分六り出目入銀入付而三拾老匁、右之銀高ニ相籠候、受取筆者衆相良勘解由次官・野村新右衛門・同各才右衛門也、

以上

古後七郎右衛門殿

勝目兵右衛門殿

参

『全』

受取申金銀之事

合金子六枚但ばかり目貳百六拾三匁七り也、帖佐より、

文祿五年

卯月廿八日

休閑齋

旅庵判

町田出羽入

存松判

勝目兵右衛門殿

古後七郎右衛門殿

参

猶々ひら松家作、あまり／＼見苦敷候、いかやうのまつしきものも、そのほと／＼にハ家をも作り、かけをかくす事にて候、誠ニころひかゝりたる家ニすけをかけたて、そらのはれ候てよりも、家の内は雨露にぬれられ候ありさまをもかもハす、かんにんさせ申候、家中之者の心さし存しやり候へハ、はらの立事にて候、曲事千万ニ存候、さりとてハ／＼、あるにかひなきたゝすまい不可然候、平松やく人共へいゑ作りの事申付候へと、肱枕へ申置候つる、いかゝ調候哉、いよ／＼ひらまつへも、ゆるかせなきやうニと、われら申として申ふくめらるへく候、兼又藤次郎殿物をかゝれ候へてハせうしにて候、たそ呉見共申ものもなくて、氣まかせニおいたゝれ候てハ、其身の事ハ不及申ニ、それかしため迄一段めいわくたるへく候、とにかくに／＼、手習をせいに入られ候てかんようたるへく候、此よし我等申として、念比ニ申こされへく候、肱枕ふた所・外山ふうぶ、いづれ／＼へも可有心得候、將又高麗へ又々人を越申候、可爲一二日内候、定名護屋邊にて參相候すると
「本マ、」
そんな候、追々吉左右申へく候、以上、

其後はおもハしきたよりもおハし候へて、文にてさへもとかく申さず、無音の至り心もとなく候所に、伊東孫八にて卯月朔日の文同月廿七日到來候、先々其元無事ニ候由聞え候て、うれしくおもひ被申候、こゝもといよ／＼無事ニ候、御心やすかるへく候、させる事候ハす共、たより過ぎず、こま／＼そこもとやうたい文して可承候、其元うつり候へハ、やかてふた／＼とのほり候ゆへ、よろつ取まされ、なに事もか事も申付置事もなくて、留主居の御さひしさ、さこそと存はかりに候、

一 又八郎殿歸朝之事、馬乗十騎程めしつれ、高麗よりすく上落いたすへきよしおほせ出され候間、爲迎と國分左京亮さし渡し候、定此ころは參陣いたし候へんと存候、なこやへ此程居られ候ゆうけきも近々上落之由候、さやうニ候者、又八郎殿さちうも可被急とよろこひ存計ニ候、又八郎殿爲使と大山かん右衛門尉、此五日以前罷上候、高麗おは今月二日ニ出船候由申候、又八郎殿一段と聞えニ御入候由申候、めてたき事と申すはかりに候、然者三月は又八郎殿いミ月たるよし候間、爰元ニおいてさま／＼きねんの儀無由断候、就中高野

ニおいて求聞持修行之祈念共いたし候、又平田豊前の子大峯花供ニ入峯候間、是にも祈念の儀共申付候、か

れこれ祈念之事申付事ニ候間、又八郎殿歸朝無何事めてたくおハし候へんと待かね申事に候、定而そこもともおなし心ニまちなね給へんと存はかりに候、御れうにんさもしに御渡り候や、めつらしくこそ文して可申候へ共、別ニかへる事もなく候まゝ、無其儀候、よきやうにあい心え申させらるへく候、兼又ひらまつへも從其元相心得頼入候、めてたく、かしこ、

〔朱カキ〕

〔慶長元年款〕五月朔日

〔此書、義弘公宰相殿御宛之御書ナルヘシ〕

57

〔御文庫二番箱義弘公四卷中〕〔義弘公御譜中ニ在リ〕

昨日者預御使札候、罷出於途中御使者懸御目候、如仰當陳替之御衆、近邊御渡之由申旧候、併非実儀候哉、於致歸朝者必遂面拜、可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長元年款〕

五月朔日

土侍

元親(花押)

羽兵様

參人、御中

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々殘番衆之始末、貴所めしつれらるへき人數被下候通、石治少御念を入られ候之条、其元番衆ハ無人めしをかれ、貴所供衆多候てハ、治少之覚如何に候、御由断者有間敷候へ共申事候、次殘番衆之兵糧如何候哉、もし不如意之儀もやと國元へ細々申下候、定可被見續と存候、其方よりも、其元様式をよくく國元へ被申越候而、かんよう存候、以上、

大山勘右衛門尉去月廿二日令上着、三月廿五日之書狀共一々令披見候、先其表無吳儀之由、萬々目出存候、一大明勅使來朝ニ付而、高麗在番衆主々儀者、可致歸朝之旨被成、御詫、貴所事も其表よりすくニ可有上洛之由、被仰出候間、爲迎國分左京亮差渡候、定可致參陣候、

一其元殘番之儀、抱節・比紀伊守此兩人主取候て、人數七伯程在番肝要之由、石治少承候間、其旨國分左京亮にて申越候キ、右兩人之事、誠數年之辛勞不及申候へ共、石治少御さし圖と申、貴所留守居之在番、大事之始末にて候間、かやうの人數ならてはなりかたき儀共候、よくく被仰付置候て、專要に候、

一大明勅使兩人之内、菅人走候由候、然共遊撃被申候ハ、此走候使者ニますほと之使者をめしよせ可申候間、大明和平之儀、更以吳儀有ましきよし候、大閣様御詫も無別、定日本衆しかけあしく候て、如此たるへく候間、可被成御糺明之由被仰出之由候、いつれにても各歸朝之儀者、先度國分左京にて申越候趣、少も無相違事にて候、其元在番之諸大名衆之様式をも被見合、題目者小攝へ被得内談、早々歸朝まち存計候、

一其元殘番衆之儀者、能く被入念可被仰付候、いかやうの雜説共候て、隣所隣方之在番衆歸朝させられ候共、薩州請取之番所ニ在之人數然与在番候て、此方よりの一左右可相待儀肝要ニ候、もしく殘番之人數雜説ニおとろき、不届仕合共候者、豊州などの手なりたるへきよし、石治少切々御念を入られ承候条、態申越候、抱節・比紀主取ニて可致在番上者無氣遣候へ共、何事もく、以後者いかやうの口能も不入儀候間、前かとよくく念を入られ肝要候、

一ある人申候ハ、いまほと其地在番衆、あまりく無人之由候、なにとしたる儀に候哉、さやうにハあるましき儀共ニ候、もし於事實者、せうしニ候、早竟貴所并

「御文庫拾七番箱十三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其後久不申入迷惑仕候、無吳儀被成御歸朝、諸事可奉得尊書候、

圖書頭心よはく御入候て、をのくいとまといひ出候へハ、其假ニいとまを出され、もどさせられたる始末たるへく候、さてく不可然候、のこり番衆都合七日程のこしをかれ候へきよし候之条、たとい貴所歸朝之供衆者無人にても不苦候、當番所之手前之仕置以下公儀ニ相違候てハ、則國家之爲ニなるましく候、よくく念を入られ候へく候、歸朝之望あらん者ハ、奉公だてのやうニ申なし、是非共めしつれられ候て可被下之旨、さまく申へく候、相構當座人ニほめられ候ても、始末之覚悟不相届候てハ、國家之爲ニなるましく候、諸人いかやうニ申候共、よくく思唯肝要に候、惣勢引陣之儀も程有間敷候条、國元より替衆之儀も不申付候、万一於爲長陣者、替衆之儀も可申付候、可有其御心得候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長元年」五月二日 義弘(花押)

又八郎殿

去二月廿一日之尊書拜見仕候、殊段子一卷拜受、誠以過分至極候、聖門様へ以御一札段子一御進上候、則披露仕候、御祝着之由被成御書候、其表之儀、番舟雖相動候、堅固ニ被仰付之由、其御沙汰執御座候、御手柄共無

是非之儀候、然者可爲御歸朝之由、御朱印參候由、先々珍奉奉存候、漸此比可有御着船与、朝暮御左右奉侍候、十日之内齋藤源介方可罷下之由候条、其刻具猶可申入候、御便宜之旨、只今從伏見申來、先如此候、此旨可然候條、可預御取成候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長元年」五月二日 如貴(花押)

友枕齋

伊勢弥九郎殿

如貴

60 『新納氏家藏』

今度國本就改易、諸侍知行支配等之儀、一切無案内之条、始末之首尾、萬端不審之至候、雖然、龍伯様、武庫様以御談合、其方之事者定宜被加、御意候、若雖被成御油断候、累年不願身上之安危奉公之忠節無比類候間、御兩殿之御前申調、進退可然様必可致分別候条、心安亦可被

抽忠貞候、仍證狀如件、

文祿五年

五月二日

忠恒(花押)

新納武藏入道殿

〔此御書、忠元譜中ニ在リ〕

61

『伊地知氏家藏』

於御當家ニ御祝儀等之夏、伊地知周防介ハ被仰付候、然
ハ入具之事、何色ニ而も下知を申候仁進退仕候、自然下
知仁之前ヨリ包丁仁へ者、何ニても分別次第遣可申候、惣
而入具を包丁仁可被成進退事、有之間敷候、但包丁仁老
人之校量を以調進候ハ、乍勿論可爲進退候、此等之趣、
先例之旧儀ニて候間、少茂私之儀無之候、仍證文如斯、

文祿五年五月四日

伊地知駿河守

重治(花押)

(下ニ印影アリ)

伊地知勝左衛門尉殿

62

『義弘公御譜中』

〔正文在加治木兼城權右衛門〕

此ふミ從認候而、萩原寺高野より罷下候、彼僧上候処ハ、
恕參・紅生・宗江心さしいたし候、取分純香一しうさま

63

『新納氏藏書』

いり候あいた、四十九院日はい相調候、同法花頓写りし
ゆ經せきたう閉目候、雖然高野不慮之炎上ニ付、御先祖
日新・伯圃・妙安御はい皆焼すたり候、乍去紅生・恕參
・宗江のはい共ハ燒不申候、金子二枚ニて、いつれも心
さしとちまり候て下向仕候、我等も満足仕候、定而宰相
殿も同前たるへく候、御存しとして申事ニ候、かしこ、

〔朱カキ〕
一慶長元年五月五日

より

宰相殿

義弘

尚々依樂見續之儀、此比やうく出船之由聞得候、
飯米可爲払底候、先々御物借下され候而、見續付
候やうニ、御取成偏ニ奉頼候、いまたかこしまのは
まニ有船之事情之間、定六月末つかたこそ可致上着
候欵、其御分別所仰候、兼又今程國本之仕合不及是
非、依子細走上候處ニ、武庫様以御分別於中途討
果候、御満足之由、自 龍伯様ハ御丁寧御礼被仰下、
外聞実忝候、此等之次第、御前様江御仕合可然折
節、御披露憑存候、次存松老江も申入度候、其外吉

作州・休心老・白次左、いつれニも、在洛中御懇志之儀候、又依樂召置被懸御目候、然ハ御酒御振舞可爲相並之由、御心得所希候、

就好便令啓達候、卯月廿二日細嶋着岸仕候而、入来院江者今月二日漸罷着候、御堅約之日州江濱市迄、夫丸五人相閑候て越着仕候、悉皆貴老御力迄^{まてにて}て遂下向候、過分之至難申盡候、帖佐へ參上申候、上下無何事候、御在所江ハ急申候之間、使ハかりを進覽候、御息御兄弟御さかしく候、可御心易候、愚老進退之儀、菟角不申上、如入來之罷通、大方見廻申候、一切無心付候条、能く見合候而、濱市江以抵候御侘可申上分別ニ候、追而吉左右申へく候、恐惶謹言、

五月六日

(忠元)
同武藏入道
爲舟判

(長生)
旅庵老

參人、御中

「義弘公御譜中、正文在新納仲左衛門トアリ」

64

「御文庫三番箱宝鑑中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

すそニ少血たまりさうにみえ申候者、早々上手ニ血をとらせられ、よく御ひやし肝要候、よくひやされ

候ハ、不可有別儀候与存候、又かけとひの馬不被

召置候歎、かけとひハ鞍をもミ、年寄候てハ、くた

ひれ申候ものにて候由申習候、され共馬のふり疎敷

思召候ハ、めしをかれ尤候歎、かけとひの乗様聊

心持候、習申候間、乍憚重而可申候、又彼船御肝煎

之由、祝着申候、弥可然之様、此節之御馳走專一候、

又此便宜ニ、うつくしく候へんねこ二疋大望候、こ

れ又被仰遣可給候、かた／＼以面可申候、

昨日者御物語申、難忘候、昨夕ハ草庵へも可申入与存候

処、北野へ御參之由候間、其以前ニ以參可申与存候へハ、

早御立出之由候間、無其義候、扱ハ鶴毛之御馬見事ニ存

候、可有御秘藏候、三光旋候、是ハ吉事共出來、誉を取

旋にて候条、旁人ニ不被遣、御乗かへニ目出度存候、よ

くかハれ、ひらくひ・をつさまへ、しゝかゝり候ハ、

駈にもおとり不申候、

武庫

「御譜ニ朱カキ」
「慶長元年歎」五月八日「御譜ニ」
「龍山公ナルヘシ」
山「御譜ニアリ」

65

「御文庫二番箱家久公七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以石治少々の書狀進入申候、御返事此者ニ可被下

候、以上、

寺志上着候て 御目見え被仕、此表之儀弥最前ニ不相替被 仰出之由候て、重而從御奉行衆各へ之御狀參着候間、則寺志御使相添持進入候、御兩四人之被任御書中、御城之御番かたく被仰付、勅使渡海之刻、 御歸朝尤ニ候、御奉行衆へ之御報、此者ニ可給候、猶使者可申入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年秋〕

五月十日

小攝

行長(花押)

嶋又八様
人々御中

66 「御文庫四拾八番箱義弘公卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

大明和平之儀相濟ニ付而、其地在番之人衆主々之事者、急度歸朝可仕之由依被仰出、國分左京亮爲御迎差渡候處、其儀相替、縦中途迄各歸朝候共、又々高麗へ罷渡、此間之番所ニ然与勤番可仕之旨、去廿七日丑之刻時分ニ被仰出候、然間石治少迄拙者申入候趣者、貴所事、定頃者可爲渡海之条、直被致上洛候之様ニ有度候、左様ニ候者、某其地へ罷渡、高麗ニ在之而可致勤番之由申入候へ共、石治少無御同心候、其故者、於長陣者勿論左様ニ可在之

候、今度之儀者廿日三十日之間たるへく候、然処我等貴

所へ相替候へへ、今少之間勤番無首尾段、早竟貴所之覺不可然候間、拙者存分へ被聞召分候へ共、無用たるへき旨承候間、不及力在京候、誠々最前之まゝにて候へ、如何様にも可在之候之處、若く中途までも歸朝せられ、又々高麗之様ニ可有御渡海儀、さりとてハ大儀之事共ニ候、併諸人なニ之儀不及了簡候間、高麗へ勤番肝要候、石治少よりも此等之旨、被仰越之由候間、可有其間候、菟角歸朝之儀者、重而可被成遣 御朱印之由候間、於其地被相待、各なニ分別候て可有御歸朝候、爲御心得候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年秋〕五月廿九日 義弘(花押)

又八郎殿

67 「全上」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々宰相はかま一通持せ申候、將又時分柄之儀ニ候之間、つかいかたひら十ヲもたせ申候、以上、其元餘御さひしく候はんと察申候、帷三・杉原十帖・しからきの盃進之候、 龍伯様之御壺之茶三袋・九重之茶二袋・星野新茶之詰、別儀そゝりにて候、御賞翫尤候、

將又弥九郎・治兵衛・小姓衆・納戸衆、其外皆可被相心得候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長元年五月廿九日

義弘(花押)

又八郎殿

68 「御文庫三番箱宝鑑中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

追而此狀竜伯へ御届候て可給候、憑入候、吳々馬之儀、委曲慶春ニ申含候、可有御尋候、

態令啓候、昨日之御使令祝着候、仍船之儀相調、今日御下候之由、御案内喜悅之至候、弥其分候欵、就中彼黒毛之馬、青地与右衛門尉召寄相尋候処、先日拙者於卧見御物語由候、三日以前ニ大野与申候者、黄金一枚与其外立物共遣之、取申候由候、近頃々殘多候、大野与申通候間候者、相當之礼ヲ申、令所望可進之候へとも、不申通間柄候故、不及了簡候、然者一廉之馬共未在之由候、青地入道宗与令馳走、可懸御目之由申候、先馬之躰、乘氣・年・爪御覧候へて如何候、御出京候而、北野邊にて可有御一覽之候哉、左様候ハ、笠にて御忍候て可有御見物候、拙者も御〔供可申候、如其可被〕申候、但天氣次第尤候、御隙之定〔目〕御返事ニ可承候、兼而其筈ヲ可取候、猶此使僧慶

春可申候、恐々謹言、〔スリハケノ所御譜ニハアリ〕

〔朱カキ〕
慶長元年五月廿九日

〔前久〕
(花押)

武庫

山〔龍山公也〕

69 「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而令啓候、仍從 聖門様御祈念之御札護并卷數被差越候、則此使ニ持せ進之候、目出度御頂戴可有候、弥御祈念之儀、無御由断由被仰候間、諸事可爲御満足と存候、便宜之折節ハ、從其御礼可被申越候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長元年五月晦日

義弘(花押)

又八郎殿

70 「義弘公御譜中」

慶長元年、李宗城・楊方亭停檣于釜山浦、宗城大憂之、晝夜悲泣、歸郷之思黯然、惟敬察之、使謝隆謂宗城曰、封號之事破矣、卿等若赴日本、則不得再歸也、宗城聞而大恐、密與其僕相謀弃其詰命、改衣裳乘夜出釜山、自間

道逃歸而潛居焉、翌日方亨報于明京、孫鑛達之、宗城既逃、惟敬大喜、方亨憂恐謂、我一人何爲冊使、而得不辱君命乎、故向惟敬而泣、惟敬叱之、方亨恐惟敬、而不敢違其言、乃遣書于石星、頌褒惟敬而誹宗城、石星喜而白于明帝、以方亨爲正使、以惟敬爲神機三營添註遊擊、使行副使之事、且授白銀數万兩、以爲其航海之費、六月、正使楊方亨・副使遊擊沈惟敬率從者四百餘人、發釜山赴日本、此時清正・行長猶在釜山浦、與兩使共歸、李昭素不信和議、故不欲遣使者、然惟敬微責之、故使全羅道觀察使黃愼・將官朴張長同渡海而來焉、

71 「義弘公御譜中」

「正文在教仁郷長介」

御家門様御事、急度可被成御歸京之由、江戸内大臣殿・加賀大納言殿以兩所、從大閣様到我等被仰聞候、爲其使者差下申候、早々可爲御上洛之旨、言上可被申候、誠千々萬々目出度候、然者先年御下向之時者、海陸共以御朱印御念之入たる事、貴所存知之前ニ候、然處今度者それ程御念も不入候、責而拙者罷下可致御供儀候へ共、當分者我等一人在京候間、爲嗜令遠慮、無其儀候、然時

者自其許然々之仁御警固ニ被仰付、御賄已下念比ニ相調候様能々被得御意、慥可被申付候、隨而又八郎殿事、可被致歸朝之由雖被仰出候、爲何思食分に候之哉、其段相替、縱中途迄被參候共、又々高麗へ差渡可致在番之通、高麗番手之諸大名同前ニ被仰出候、然間則本田讚岐守を以右之段申越候、左候者歸陣之覚悟にて、何篇不如意たるへく候間、乍不申高麗へ見次之事、無由断可被申付候、兼又屋形作并御人數揃之誘、彼是銀子之入目過分之事共候、其外節々公儀之調爲一も可除儀無之候、其許金銀相調候やうニ、涯分可被申付候、次存松・旅庵所へ之書狀具遂披見候、其趣精可相屈儀者不知候へ共、口上相合候源次郎事、可添心之由、書面見之候、我等存寄之分者不指置、吳見可申事、別儀不可在之候、猶伊地知与兵衛尉可申達候間、不詳候、恐々謹言、

〔朱力字〕
一慶長元年六月朔日 義弘(花押)

幸侃

72 「御文庫拾七番箱十三卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶々此比者、其元御無事ニ相調由候間、御歸朝不可有程候、奉待候、將又五明十本進上仕候、御取合所

仰候、

去正月十九日之尊書拜見仕候、其表之儀無別義被仰付、

殊更公私御無事之由被仰聞候、尤以珍重奉存候、永々御

在陣御辛勞共候、乍去度々御手柄共候事無其隱、大閣

様一段御感之由候、各御名譽与申事候、仍 照門様江縮

二端御進上候、申上候、只今被成御書、御守御札被參候、

可被成御頂戴候、來月者御入峯之儀共候間、於峯中弥御

祈念不可有御油断由、能々可申入之旨候、先々銀子十兩

被下候、被思召寄、誠々忝次第ニ候、於此方御用等可被

仰付候、爰元之様子本田源右衛門可申入間、不能詳候、

此旨可然之様、御取成奉頼候、恐々謹言、

〔朱力平〕

〔慶長元年〕

友枕齋

如貴(花押)

伊勢弥九郎殿

73 「征韓傳略」

一慶長元年丙申

六月十五日、二使發釜山、平攘清正等先後撤兵回、平攘

錄、諸將亦將撤回、時義弘在京城、忠恒在加徳島、義

弘傳秀吉命于忠恒曰、日者命諸將、以明使來令撤回朝

鮮地、而今有所思慮、縱令諸將既發船、汝等猶歸本營

安住、如發船期、則後日當再命之、於是忠恒猶留加徳、

諸將亦歸各營、益嚴守備、征韓

74

「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

猶以他方之事者、とかく不相聞候、當國之衆者可爲

在番由候、定而各も同前たるへきと存候、次に幸侃

今程庄内へ有之、今日さま此地へ可參之由候間、見

次等之談合、別而可申候、以上、

京都より有馬銀右衛門尉今月十七日下着候、然者在高麗

之各歸朝之由候處、貴所之事可爲在番由、去月廿八日之

曉被仰出候由聞え候、帖佐へ下衆候も、右同前ニ申候、

爰元之人衆も、其方直ニ上洛之由候間、皆々如京都指上

候、此地より船にて細嶋之こたく廻る人衆も候、又陸路

を彼地之様に打立衆も候、此外道具之者共も指上候、雖

然右之左右相聞え候へ者、追々ニ留手を遣候、はや出船

もや仕候覽、未知候、左候へハ、人衆調等之仕立、何れ

も徒に罷成候、種々違變かちに候故、爰元之調首尾仕か

たく候、併爰より又人衆并見次之八木等、申調可指渡候、

菟角京都よりハ本田讚岐守を以、其地へ様子被仰渡之由

候条、細々可相聞候、就其自然諸軍衆被指渡事もやと存候、兼日其覚悟肝心候、御油断有間敷候、恐々謹言、

〔朱力寺〕
〔慶長元年〕六月十九日

龍伯(花押)

又八郎殿

75 『雜日記抄』

累年被持來候知行、檢地以後惣なミ相替、無便返地、剩少分之由、堪忍鉢可難成儀推量之前候、内々如洲底、今度知行沙汰之儀、一圓雖無案内候、向後國家可相守儀候間、竜伯様 武庫様へ得御意、諸侍安堵させへき鬱憤候、就中各事、別而知行等可令入魂候旨、兼日遣證文置候、乍去分量之儀未申遣候、國々様子ニより多少之儀、此刻雖難計候、先三千石程可申付内意候、以此旨、一節倅者以下相抱、忠儀簡要候之狀如件、

文祿五年

六月廿四日

忠恒(花押)

鎌田出雲守殿

76 累年被持來候知行、檢地以後惣なみ相替、無便返地、剩少分之由、堪忍鉢可難成儀推量前候、内々如洲底、今度

知行沙汰之儀、一圓雖無案内候、向後國家可相守儀候間、

龍伯様 武庫様へ得御意、諸侍安堵させへき鬱憤候、就中各事、別而知行等可令入魂候旨、兼日遣證文置候、乍去分量之儀未申出候、國々様子ニより多少之儀、此刻雖難計候、先三千石程可申付内意候、以此旨、一節倅者以下相抱、忠儀簡要候之狀如件、

文祿五年

六月廿四日

忠恒(花押)

(伊集院久造)
抱節

〔此御書、抱節家譜中ニ在リ〕

義久公	慶長元年 自七月
義弘公	至十二月
家久公	
後編 舊記雜錄 卷三十七	

「義弘御譜中」

「正文」

御手前之御城米、我等參候て可渡申と存候へ共、志广守於釜山浦ニ用所申付候間、代之者一人遣候、御奉行被仰付候、急被成御請取候て可被下候、官人道具のせて日本へ戻候間、舟急申候、其分被仰付候て可被下候、増田右衛門尉殿・早川主馬頭殿はんの使を以、前かきニ可渡と申付候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長元年」

七月二日

「本マ、一」
淺野平右衛門尉

吉(花押)

進上

羽柴薩广侍從様

「樺山紹綱自記」

一文祿五年丙申、專和平之懸引也、閏七月九日、薩广ハ大地震也、京都ハ十二日之夜也、諸屋形町屋などは不及申、金銀を芥はめたる御殿崩て、數百人打殺早、高麗之取人渡本朝へ、何と御談合も成行候也、太閤様御機嫌悪候、ゆふけきも腹立の躰ニ而出津候、然處本朝衆も又高麗江押渡候而、高麗を可從とて、過平打取早、

「正文在官庫」

薩隅諸縣移替ニ付而先納之事、寺社諸侍町人已下雖爲誰々、到當給人速可令收納、自然無沙汰之輩於有之者、爲過怠其難澁之員數一倍領地を食上、則當領主ニ可宛行、但對其主人可遂算用者也、

文祿五

七月四日

義弘(花押)

竜伯(花押)

三成(花押)

猶々 龍伯様致御供下國之通、先条ニ申候へ共、此度御取亂ニ各在京候之条、先我等一人可罷下由、石治少々承候、斟酌深重ニ候へ共、任公儀罷下候、以上、

其表永々在陣辛勞之至候、不及是非候、併別成事も無之由候、尤殊重候、京都無吳儀候、其地御番御普請等之儀、弥不可有由断候、就中切々本陣へ罷出令勤仕之由、從忠恒所可申越候、神妙存候、尚以可入念儀肝要候、兼又國中人數之事所替之儀、大閣様被仰出候間、應其旨 龍伯様致御供令下國事に候、猶於様子者、此使可申候、謹言、

〔文祿五年カ〕

七月十三日

義弘(花押)

伊集院抱節

〔義久公譜中〕

一近衛信輔公薩摩へさせんたりといへとも、京儀とゞのをり、御歸洛之折節、大隅富隈にて和歌御會度々有、慶長元年七月六日、近衛信輔公御歸京の首途なり、

〔此本在御文書方〕

近衛殿薩州鹿兒嶋の御旅宿にての御會に、

梅交松芳

松か枝にかハせる梅のほひこそ

千里の春のかさしなりけり

〔同〕

當座藤埋松

色かへぬ松のみとりもかくろひて

空に浪たつ藤の花かな

〔同〕

又御庭のさくらに歌あり、

春とてもつもりなからに消やらぬ

雪はちりしく花の庭哉

〔同〕

〔朱カキ〕慶長元年歌
とミのくまわたまししの連歌に、

松かけのすまい涼しき岩井かな 龍伯

近衛信輔公薩摩へさせんたりといへとも、京儀とゞのをり、御歸洛之折節、大隅富隈にて和歌の御會有、御懷紙末に記するものなり、

〔正文有之〕

〔義久公御譜中〕

詠松蔭新涼倭歌

「此題之和歌、左ニ載せ置故略」

83 「在本田助之丞藏文書中」

於庄内都城 〔文禄五年七月掃部時ヲルベノ近衛殿様御興行之和歌〕

詠松蔭新涼倭歌

信輔

立歸る名殘こそあれ松かけはすゝしき秋のやとりとおも

へハ

詠松蔭新涼倭歌

竜伯

あつき日の影も忘れて馴なるゝ松のしつえに秋風そふく

秋日同詠松蔭新涼和歌

大藏少輔長治

とひよるもかわらぬ友と松陰にかたろふ秋の袖のすゝし

さ

秋日同詠松蔭新涼倭歌

左衛門尉長家

秋風をたもとにふれてあかなきハなミ木の松の下すゝミ

かな

詠松蔭新涼倭歌

沙弥慰歌

ときわなる松とやハ見ん秋きてのかけハありしにかわる

すゝしき

秋日同詠松蔭新涼和歌

沙弥玄与

枝しけき松の下露落添て衣手すゝし秋の初風

詠松蔭新涼和歌

沙弥紹劍

きゝて猶すゝしき宿の松陰に吹もたゆむな秋の初風

詠松蔭新涼和歌

沙弥幸侃

わするなよとひよる松の下すゝミ千とせの秋ハよしやふ
るとも

詠松蔭新涼和歌

沙弥珠長

すゝしさをまねきし御代の名にしおハ、玉松かえの庭の

秋かせ

詠松蔭新涼和歌

沙弥爲舟

すミよしや西に秋風松吹ハ涼しさよするおきつ白波

詠松蔭新涼和歌

沙弥宗運

植そへし眞砂の庭の松かけに千とせの秋もこもるすゝし

さ

詠松蔭新涼倭歌

沙弥宗哲

世を遠くみそのゝ松の枝も葉もならさてすゝし秋の夕風

詠松蔭新涼和歌

沙弥元巢

あふくてふ君か千とせを松かけのすゝしきならす宿の秋

風

詠松蔭新涼倭歌

沙弥宗察

松の葉のかわらぬかけの梢より吹きてすゝし秋の初かせ
詠松蔭新涼倭歌 沙弥与進

すゝしさそきのふにもにぬ松の色ハ秋を見せたる木かけ
ならねと

秋日同詠松蔭新涼和歌 大炊助久正

いさ清きみきりの松の聲立てすゝしき秋やさそひきぬら
ん

秋日同詠松蔭新涼倭歌 左衛門尉増宗

松陰のすゝしさもやゝ音かへて荻の上葉にかよふ秋かせ

秋日同詠松蔭新涼倭歌 雅樂助經宣

立寄てけにとことへの松陰も秋の夕へなをそすゝしき

秋日同詠松蔭新涼和歌 〔新編島津氏世録正統系図義久譜ニハ左兵衛尉トアリ〕
左衛門督道武

風の音涼しさそへて色かへぬ松の木かけも秋をこそしれ

秋日同詠松蔭新涼倭歌 兵衛尉宗親

秋來ぬと音にしらする松風をふるゝ夕ゆふへの袖そすゝしき

秋日同詠松蔭新涼倭歌 右衛門尉豊信

秋來ぬと音吹かへてすゝしさハ今一しほの松のかけかな

〔義久公御譜中〕

近衛殿西國になかされ給へとも、京儀とゝのをり、御歸

洛の折ふし、大隅富隈にて和歌の會あり、懷紙は別紙に
あり、

〔此本在御文書方〕

當座薄露

ゆく袖をむすひもとめよいとすゝき

すゑ葉の露は玉とちるとも

〔同〕

寄鏡神祇

神かきのうちゆたかにもうつしをく

こゝろや代々のかゝみなるらん

〔同〕

慶長元年七月六日、近衛信輔公御歸京の首途なり、其

路次にて、かめにさす花に御口号あり、其座にて、

花くゝをわけにし野邊の歸るさや

たをりもて来てかめにさすらん

近衛信輔公解纜於日州志布志、而歸京也、

〔御文庫二番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

已上

態申上候、仍朝鮮之使日本へ渡海候付而、一兩日中西表

より爰許乗船三艘通申候、爲御心得申上候、恐惶謹言、

「御文庫四拾八番箱中」一家久公御譜中ニ在リ」

「朱カキ」
「慶長元年款」

七月九日

小西作右衛門尉
末(花押)

小西主殿助
行(花押)

進上

又八郎様

人々御中

『伊集院氏文書』

(本文書ハ八〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

「文祿四年、檢地御目錄御給候、後七月御打立なり、然者本文文祿四年款」

「義弘公御譜中」

「正文在松本慶彌左衛門」

昨日者至東山預御使令祝着候、仍内々御約束申候駒鳥之子、唯今從南都到來候之条、重而進之候、未見分鉢候、

猶友枕可有傳達候之間、令省略候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長元年款」七月廿日

(前々)
(花押)

武庫

先書并町田縫殿助を以承候条々、得其意候、彼仁歸帆之時、細碎可申候、此節も渡海可仕候へ共、御所好之鎧出合無之候間、態詭仕立候故、延引ニ候、

一來春之奥入必定与申候哉、爰元ハとかく無沙汰候、乍去由断有ましく候事、

一有方へ奥入之儀相尋候へは、未定之由候、事実々御沙汰可有之刻、其用意有へく候、先々大儀之借銀候、此返弁之才覚專ニ候、さてハ本銀計當毛之上にて可相濟候、請取手國元へ可被差下候由承候、然者其元々かこしまへ油断有まじき通、堅可被仰渡候、此方々も慥ニ申下し候事、

一六月廿日之書面、此十七日ニ到着候、先以其表無何事候之哉、目出度候、諸篇御賢慮肝要に候事、

一野村五郎二郎事、御下知を相背候之哉、不及是非候、併然々不存儀に候間、當分國元へ歴々罷居候間、此入組共可承合之由、慥申下候、其元衆なみの御唆尤に存候事、

一大閤様御冠落氣、以之外咲止之由申散、下々浮立鉢ニ候つれ共、此節者御驗氣にて静謐に候、可御心安候、

恐く謹言、

〔朱力キ〕

慶長元年七月廿六日

竜伯(花押)

〔家久〕
又八郎殿

89 「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

其地ニ暫可爲在番之由承候之間、可爲御大儀之段存知、
 人數等可差渡覚悟候之処ニ、京都も急度可爲歸朝之間、
 渡海衆可召留之由承候間、任其意候、併其表之様子爲可
 承、彼兩人差越候、歸帆相定候する刻者、前以注進可承
 候、名子屋迄供衆可差越候、去々月供として罷上候衆へ、
 于今在京仕候、爲心得候、將又此比和泉へ御材木大松三
 百本、自身罷越、船元迄可引付之由被仰付候間、急度可
 罷越候、彼木拽相濟候者、追付上洛可仕由承候条、今月
 之末ニ此地可罷出用意候、猶委曲用口上候、恐く謹言、
〔朱力キ〕
〔慶長元年〕 閏七月一日 龍伯(花押)

又八郎殿

90 「義弘公御譜中」

「正文在加治木來城權右衛門」

ひやうふきやう罷のほり候ニ、ことつてのとほりくハシ

くとゞきまいらせ候、まつくまつく、其元いつれも

父子さかしく候由、なによりもうれしく存まいらせ候、

此方も同じ事ニ候、高麗も頃、本田さぬき参り候て、又

八郎一段さかしき由申候、令満足候、陳引之事者いつと

も爰元無取沙汰之候、何共く待久しくこそ候へ、そな

たの心もすいりやう申候、高麗之事者一段と兵良無之由、

又八郎所より申越候間、先く従是少成共致借用、二三日

中船指渡へき覚語ニ候、我等も頃者がいけにて候哉、老

のやまいにて候哉、七日八日程しよくし無之候、柿なと

のるいもほしくも無之候、是にてすいりやうあるへく候、

あまりくたひれ候て、座内も立居難成躰ニ候、いしやう

心も遠く成候て、こゝろほそくこそ候へ、か様ニ申候て

人の命ハしれぬ物にて候間、きつかい其よりあるましく

候、將又又八郎殿祈念として、御伊勢へ千日参りさせ

申候、是又爲心得申候、巨細者兵部さやうへ申含候間、

きこしめすへく候、目出度、かしこ、

〔朱力キ〕
〔慶長元年〕 閏七月廿八日

宰相殿

義弘

91 「義弘公御譜中」

〔在加治木衆新納仲左衛門〕

文祿四年分

石田治部少輔殿藏入目錄之事

米 合三千六百拾六石七斗七升

右之内船ちん米上着百石ニ付廿貳石五斗ツ、

此米 六百六拾四石三斗五合五夕
此銀 五貫七百拾三匁分

但壹石ニ付八匁六分ツ、

以上

文祿五

閏七月廿八日

(新納長住) 旅庵
(町田久倍) 存松

(秀彦) 安宅三川守殿

92 「全上」

文祿四年分

石田治部少輔殿藏入目錄之事

米 合三千六百拾六石七斗七升

此代 合銀三十拾壹貫百四匁分二り

右利平、去四月より閏七月迄五ヶ月之利平銀四貫六百

六拾五匁六分五り、

但壹ヶ月ニ壹貫目ニ付利平卅目ツ、

以上

文祿五

閏七月廿八日

旅庵
存松

安宅三川守殿

93 「義久公御譜中」

「正文高岡衆有之」

薩州伊集院之内大内田村

余分之内

一作 高五斛者

先年依被昇御輿候、爲其忠恩被宛行早、

文五

八月二日

伊右衛門入
幸侃判

中馬十郎左衛門殿

94 「正文市來衆有」

薩州伊集院之内田村

一作 余分之内

高貳石此外三石市來湯田ニ給、

先年依被昇御輿候、右之地被宛行畢、

文五

八月六日

伊右衛門入

幸侃判

市來豊前入道殿

95

「御文庫ニ番箱家久公七卷中」家久公御譜中ニ在リ

猶以てれ布式卷被送下候、遠路御懇情一入忝存候、

尚自是可申入候、以上、

如實意其後以書狀も不申上無音之刻、御札拜見忝存候、

然者其表之儀、吳儀無御座由珍重ニ存候、仍大明勅使

上様被成御對面、其上以高麗御在陣之御衆も可爲御歸朝

由候間、貴老様御歸陳奉待候処ニ、去月十二日之夜、大

地震ニ付、伏見・大坂之御城之内御對面所損候故、唐人

御札相延候、雖然近日御對面可在之旨候条、御歸朝不可

有程候、伏見御城御てんしゆ・御矢藏損候故、上之山ニ

本松之在之所ニ御城被作、御普請半ニ候、然共義弘御屋

敷、其儘可有御居住之旨被 仰出候、殊今度之地震ニも

御家無別候、旁以御仕合能候間、可御心安候、治部少家

も不苦候、就其三成者桑木之風呂一通之材木、如御注文

被進候、一段満足不過之由被申候、思召寄遠路御心懸之

儀共忝由ニ候、御報被申入候へ共、猶以拙者前々御札可

申達旨候、此方御用候者可被仰付候、猶重而可得御意候、

恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長元年秋」

八月六日

安宅三河守

秀安(花押)

嶋津又八郎様

參御報

96

「義久公御譜中」

覚

大閣様御下之刻、川内泰平寺へ被成御陣宿候、其時 龍

伯様泰平寺へ被成御差出候時、無人ニて候之故、我々親

とも伊集院へ罷居候折節御供仕り、御輿をまへし候之由

申置候、此節ケ様成儀共可被聞召上之由候之間、申上候、

已上、

「朱カキ」此年月ニ不拘前ノ座ニ入也

慶安四年十一月廿二日

「前之宮内左衛門子」

高岡上村覚右衛門在判

「前之千介子」

同 河添藤七左衛門在判

97

書物

先年 大閤様川内泰平寺へ御下向之時、 龍伯様御指出

被成候折節、吾等祖父但馬・親源太兵衛父子共ニ御輿を廻し、御奉公仕候、爲其忠高五石被下候、名寄于今見失

申候ニ付、以書物申上候、少も無別儀事ニ候、以上、

〔朱力キ〕此年月ニハ不拘前ノ座ニ入也

高岡小田原源右衛門在判

98 「雜抄」

隅州桑原郡吉松般若寺領目錄

一 般若寺村之内

右田畠屋敷分米合

高百三拾石式斗九升九合三夕式才

已上

伊集院右衛門入道 幸侃判

文祿五年八月九日

右之地、從使僧前以算用、田數石付等被差出候、其低令支配早、配當衆之算勘ニ無之候間、爲後日如斯書置也、

99 以上

永々在番辛勞之儀、中々申も疎ニ候、仍大明勅使無吳儀來朝、誠珍重之至候、 大閤様被成御對面候へ、追付

被爲歸帆、其表之儀も可爲引陳之由候之処、去月十二大

地震、以之外之儀にて、地下之事ハ不及申、大坂・伏見御殿令破損候、御普請已下御取亂ニ付而、勅使御對面之儀、于今御延引候、定急度可相濟候条、各歸朝不可有程

候、不及申候へ共、勤番之儀油断有間敷候、恐々謹言、

〔文祿五年カ〕

八月十日

義弘(花押)

伊集院(久造)下野入道殿

100

「義弘公御譜中」

「正文在伊地知浄眞坊」

以上

其表無吳儀候哉、さて、永々在陳苦勞之式無申事候、

仍忠恒勇健之由其聞候、偏御祈念之故と令満足候、就中於忠恒上落者、及瑜事者直可爲供奉之由候、肝要ニ存候、

まち存計候、鎌入・慶吞以別紙可申候へ共、辛勞之通相心得可有傳達候、猶期後音之時候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

「慶長元年」八月十二日

義弘(花押)

光明院

101

「義弘公御譜中」

「正文在野田休右衛門」

猶以此中之無音背本意候、旁期貴面之時候、以上、

先刻預御使者候、自是も可申入處ニ、今朝より御前へ罷出、只今罷歸候ニ付て、無音背本意候、朝鮮之使一昨日上着候、さ様之儀爲可致言上、夜前爰元罷越候、來廿五
六日勅使并朝鮮仁へ可被成 御對面之由、被 仰出候、其ニ付て今夜大坂へ罷歸候間、御見廻も不申上、慮外千萬ニ候、 御對面之節者、定而大坂へ可被成御越之条、以貴面可得御意候間、書中委不申入候、恐惶謹言、

「朱力斗」
「慶長元年」

八月廿一日

小攝津

行長(花押)

羽兵様

人々御中

102

「御文庫ニ番箱義久公ニ卷中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

薩廣國之内御藏米御算用狀之事

一 參千九百弍拾弍石

文祿四年納物成

一 七百五拾三石弍斗八升

同年之大豆千弍百石ろ米ろ老ろ舂ろ

ニ大豆老舂六合易

一 貳百四拾石

同年之あわ四百八拾石ろ米ろ

舂ニあわ貳舂かへ

合四千九百拾三石弍斗八升

此はらい

一 四千拾石八斗四升

金子九拾三枚弍兩三匁「本ヤ」四分只

今迄、但老枚ニ付而於大坂四

拾三石かへ、

一 九百弍石四斗四升

右ノ米さつまろ大坂迄舟ちん

老石ニ付て弍斗弍升五合つゝ

はらい

合四千九百拾三石弍斗八升

右皆濟也、但文祿四年之免目錄 上様未被成御覽候間、

御目ニかけ、相違之儀候へ、追而可申入候、以上、

文祿五年八月廿二日

長東大藏(花押)

増田右衛門尉(花押)

徳善院(花押)

伊集院右衛門大夫殿

103

『雜抄』

慶長元年九月五日、義弘公ろ宰相殿と御宛書有之御狀

之内ニ相見得候、

一 慶長元年、高野炎上ニ付、御先祖 日新様 伯圍様

妙安様御はい、皆焼すたり候、乍去 幻生様 恕參様

宗口の御はいへ焼不申候、

104 「義弘公御譜中」

慶長元年八月十九日、楊方亨・沈惟敬及黃愼・朴弘長其
到和泉塚、秀吉公聞而大喜點檢大坂泉塚、聚牛猪雞魚
若干充其食、且命曰、休憩泉塚過五六日、忘脩程之疲勞、
而後可來于伏見、二十九日、方亨・惟敬赴伏見、街路之
警營尤肅嚴焉、園國之民人群來、欲見大明封秀吉之册使、
滿陌擁衢誦 秀吉之威德者洋洋盈耳、册使亦刷威儀錯奏
管絃既到伏見、此時 秀吉公遣柳川豊前守調信、責黃愼
・朴弘長曰、朝鮮王子不自來謝、而馳使固無禮之至也、
罪擬擢髮、莫與方亨・惟敬同調焉、兩使驚懼、依行長而
頻謝之、秀吉公遂不旨、
慶長元年九月二日、方亨・惟敬登伏見城、方亨在前、惟
敬捧金印立階下、少焉殿上黃幄開矣、秀吉公使侍臣二
人持太刀・腰刀而出、群臣望見、而皆稽顙、惟敬深懼持
金印而匍匐、方亨唯隨惟敬之所爲而戰栗、秀吉公勞之、
兩使以爲責己、故其足越越、其口囁囁、時行長進曰、大
明使使謹可行其禮、於是惟敬捧金印及封王之冠服、且授
日本諸臣之冠服五十餘具曰、隨其位階而可用之、其於

大明所調整之衣服僅三十餘具也、今見日本國牧郡守之多、
而驚不得俄調之、故并册使之故衣而備其數、既而册使對
面事畢先歸、秀吉賜珍膳美酒以饗之、翌日 秀吉又召
册使而享之、盡善盡美、其座次者以上壇中央爲 秀吉座、
秀吉爲耀威儀于明人、故被赤裝束戴唐冠而大坐、册使坐
中壇右方、家康卿・利家等七人坐于其左方、皆著大明所
遺之冠服、其餘諸侯坐于南緣、諸大夫以下充滿于廊下庭

上、其膳羞者從大明之禮法、其膳高三尺方五尺、盛以牛
羊雞魚、鏤金銀飾花草、參議以下侍從以上少年之諸侯著
華服、而進羹行酒、秀吉賜盃、册使拜戴之、其後 秀
吉催猿樂、笛音寥亮鼓聲嘈雜、册使驚見之、時見擊鼓者
之指間流血喚叫揚聲、而變色問通事曰、未知是何等之罪
人也、其被徵責也、至於此哉、譯語解說之、乃大笑、猿
樂既終、秀吉慰册使之遙來、册使亦拜今日饗燕之辱、

105 「御文庫四拾八番箱中」義弘公御譜中ニ在リ

猶々木之御奉行達當風にて、色々ノヤから毎々ニい
ひかけられ、めいわくいたし候事ハ御推量ニこえ候、
彼是面談ならてハ申延かたく候、さてもく高麗人
と長陳たるへきのよし承候て、おとろき入候、何と

武庫

まゐる

義久

とちまり候する欵、めいわく仕候、又それより承候
事かへりかましく候て、是又めいわくにて候こそ候
へ、此文他見有間敷候、灯下之筆跡よめましく候、
御すもしく、

自然御氣にもはつれ候てへとハ存候へ共令申候、今度休
心罷登申候するハ、有方ひいき過候する、又上甚申候す
るハ、長壽ひいきにて候する、此中ヲ御分別なされ候て
可目出度候、ここにて承得候、口ひきおほく候、大事
の事にて候、我々ならてハ真中ヲ申候する者、此國ニハ
あらしかと存候、然共御かた／＼たち、それヲまこと
おほしめし候ましく候、まことか偽に成、偽かまことに
成へきかと存、無念ニ候、兼又御材木引之事、以之外隙
入候て、いまた事すまず候、是さへ隙明候ハ、追付上
落いたすへき覚悟候、木引之儀ヲ三清へ申付候て、拙者
ハ上洛用意のためニ、先々此比罷歸り候、成就次第御左
右可申候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長元年〕九月三日
竜伯(花押)

106

「正文在文庫卷本」義弘公御譜中ニ在リ

急度被仰出候、今度朝鮮王子不差渡之段、不相届儀候、
然者城々普請番等、丈夫ニ被仰付候条、存其旨、手前之
人數半分、慥朝鮮ニ相詰可令在番候、兵粮等之儀も丈夫
ニ可令覚悟候也、
〔朱カキ〕
〔慶長元年〕九月七日
〔御朱印〕

鳴津兵庫頭とのへ

107

「御文庫二番箱義弘公四卷中」義弘公御譜中ニ在リ

先度者此地御下向ニ付て、不計御見廻懸御目候て、千萬
大慶候、然者官人衆被申様悪敷候て、高麗御無事俄相破、
毛利老・加主計・小西急度被指渡之由候、年明候ハ、
四國中國之衆可罷渡之由御觸候、此度皇子差渡、唐人よ
りも先ニ御礼可申之處、延引之段、御腹立尤之儀候、右
之分候間、武庫様も可爲御渡海候哉、承度候、定治少
が彼是具可被申入候へ共、如此候趣可爲御存候条、不能
巨細候、隨而拙者事、昨日御暇被下、早々罷下心安可致
養生之由候間、忝存候、些氣分共取繕候て、十四五日比
可致乗船と存候、何茂其内尊慮可得御意候、恐惶謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長元年〕

三中納言

九月七日

隆景(花押)

羽兵樣
人々御中

108 「義弘公御讀中」

秀吉於花畠山莊召承兌・靈三・永哲、使讀大明之璽書、時行長密語承兌曰、秀吉若聞誥命之義、則其大怒不可疑、請變其文辭而讀之、承兌不肯、於秀吉前遂讀之、秀吉聞而果怒、瞋目憤激大聲曰、明主封我爲日本國王、固是可憎之殊甚者也、我以武略旣主於日本、何藉彼之力乎、前日行長曰、大明封我爲大明國王、故我信之、而旣班師矣、行長誘我、加之其在本朝通志于大明、其罪不可勝言、速可呼行長、我斬其首而甘心耳、卽解大明所餽之冠服而不著之、唐捐誥命、而不復見怒氣甚壯、旣而行長懷懼而來、秀吉極叱之、其聲如雷、行長謹對曰、匪我所爲也、受三奉行之旨、而悉決之耳、因出數通之書牘以爲其證、依是秀吉抑憤而少止焉、行長僅得脫鱗涎、其後秀吉召清正・石田・增田・大谷曰、大明遣使封我、我甚雖不滿意、而先姑忍之、朝鮮求和者決、而不許之、册使亦不可久留之、詰朝速可遣之於泉堺、我將再起大兵

屠滅朝鮮、翌日楊方亨・沈惟敬共歸泉堺、秀吉憤怒猶甚、欲殺朝鮮兩使、承兌・靈三・永哲諫而止之、然後秀吉聚清正及西州諸將、而定遣兵于朝鮮之期日、屢議軍事、

方亨・惟敬胥議曰、我輩奉使于万里不取回翰而歸、則有何面目而見人乎、滯于泉堺數日、與黃慎・朴弘長共發泉堺、時又議曰、我曹歸大明・朝鮮之後、此事可明告之、若不然則誤我國矣、茫然罔措、

秀吉下令曰、加藤清正・小西行長相勦前陣、中國九州之諸軍悉渡海、而可屠拔三韓也、東國北國畿內之士卒者可改築伏見城、閏七月之地震、伏見城崩矣、故復有此舉、軍旅之勞・土木之役並與、秀吉憐册使之徒歸、遣柳川豊前守調信賜金銀雜物于册使、時調信密語黃慎曰、來歲朝鮮征伐事已定矣、汝歸國之後必可使王子來謝矣、黃慎大恐告册使、惟敬猶不信之、册使旣到肥前待順風有日、時清正來于肥後、黑田長政歸于豊前、聚軍兵催渡海之資用、方亨等失色大驚、惟敬謂、我若不死、則和親又可成矣、故不敢驚、此時寺澤志摩守正成持秀吉之書來示册使、皆謂謝恩表也耶、披而見之、則責朝鮮之三罪文也、其詞甚倨、其趣曰、前年朝鮮使者來雖悉述其情、而甚秘大明之事而不言、其罪一也、我以

沈惟敬所乞、故寬宥兩王子及夫人以下而歸之、然未速來謝、待大明冊使之渡海、而王子不來、唯馳黃朴之賤价、其罪二也、大明・日本之和交及冊使之航葦、皆依朝鮮之反覆而事尤遲滯矣、其罪三也、李哈得之大驚、而不敢隱之、別寫一通遣之大明、約其賜援兵、

慶長元年丙申九月、賜歸國假、是亦就明年再朝鮮國渡楫、爲諸般用意也、仍同月廿三日、解纜於大坂也、

109

『永吉邑主藏書』

朝鮮四ヶ所城ニ被籠置候兵糧之事、爲其城主當米ニ入替被差渡可有御成敗候間、其節諸勢御兵糧可被下候条、可成其意候、猶寺沢志摩守可申候也、

〔朱カキ〕

慶長元年九月十日

○〔御朱印〕

嶋津又八郎とのへ

〔家久公御譜中、正文在卷本トアリ〕

110

〔家久公御譜中〕

九月朔日、^{三イ}殿下秀吉公招大明勅使於伏見城、而遂對面、

時捧金印冠服、且復授諸臣冠服五十餘具曰、隨其位階而可被用之、其事既終、則從大明之禮法、備膳羞盡美麗、

且催猿樂慰冊使之遙來、冊使亦拜今日饗燕之辱、其後

秀吉公召承兌・靈三・永哲、令讀大明之璽書、聞其文章大怒曰、明主封我爲日本國王、是固可憎之甚者也、我以武略既主于日本、何藉渠之力乎、冊使亦不可久留之、詰朝可遣之於泉堺、又使柳川豊前守調信責朝鮮使者黃愼・朴弘長曰、王子不自來謝、而馳使固無禮之至也、欲殺兩使、然而有諫者止之、由茲求和者決不成、再定遣兵于朝鮮之期日、屢議軍事、以故止諸將之歸朝、所以爲長陣也、

111

〔御文庫四拾八番箱中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

猶々番船於相支者、加徳嶋之儀者大略籠城ニ可罷成欵と見及候躰、これ〆氣遣に候、就中兵糧之儀共、國元へ追々申下候間、定不可有別儀候、於其地もなる程念を入可被仰付候間、追々可申候、以上、

急度遂注進候、

一大明勅使今月朔日、大閣様被成御對面一段御仕合能候キ、然如朝鮮皇子今度無來朝之段不可然之由、官人へ被仰聞之由、下々申散候、官人被申様如何之儀候半、御陵之儀相破、御弓箭ニ相濟候、就夫年明候者、早々御人數被差渡可被仰付之条、其内九州衆を以、高

麗番手之儀可相勤之由被仰出候、然間薩隅諸縣人數先千五百人程即刻差渡、鹿徳嶋在番無緩可申付之旨御旋候、御城御普請之儀、勿論丈夫ニ申付、大鉄炮・石火矢以下籠置候て、番船急度可浮出用心肝要之由、石田治少も承候、可有其心得候、定此中者御引陣之取沙汰共在之儀候条、鹿徳嶋御普請、然とも有間敷候、笑止千万ニ候、先々此節者番船之用心手前之儀候、御普請之儀夜白共無緩可被仰付候、渡海人數之事もはや國元へ申下候間、急度可令參陣候、

一鉄炮之事、對馬邊まで内々被越置欵之由きこえ候、於事實者、早々可被食寄候、先々手前ちいさきてツほうハ無之候共、番船之用心者大てツほう・石火矢ニ相究候条可有其才覚候、國元へ在之分者、いそぎ其表へ可被差渡候由國へ申越候、てッほう・玉藥なども國元より用意候て可被差渡之由、念比ニ申下候、勿論在番兵糧米之儀も急度可被差渡之由、國へ申越候、一我等事急度高麗へ可罷渡之由被仰出候、然ニ此元より直可罷渡も、又者國元へ罷下候而、それも可致渡海も、今一度被得 上意候て可被仰聞之由、石治少より承候、今日致 御目見得候之条、定様子可相聞と存候、とに

かくニ、年内可致渡海候間、以面可申承候、圖書頭を始、在陣人衆へめい々相心得可被仰聞候、恐々

謹言、

「朱かき」
慶長元年九月十一日

義弘(花押)

又八郎殿

112

「御文庫拾七番箱十三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而令申候、抱節・紀州・雲州・伊弥九各へ可申入候へとも、あまり々手前取亂候之条、乍恐御心得

奉頼候、以上、

又々申上候、近日山田弥九郎・野村五郎次郎・村田

藤五郎・新納拾郎、御道具衆三人被差渡候条、其節

様子慥ニ可申入候、

幸便之条令啓上候、仍太明勅使來朝候之處ニ、爲何子細ニ候哉、御無事相破、又高麗御出勢ニ相濟候、就夫 武庫様も急度可被成御渡海由、從 大閣様被仰出候、雖然先如御國元被成御歸國候て、御人衆を被仰付可有御渡海由、治少も被仰候、然間近々如御國元可有御下ニ相定候、當分上下御軍役如何可相續候哉、乍愚意心遣千万候、其許御堅番可目出候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕

九月十一日

休閑齋

旅庵(花押)

圖書頭様

參人々御中

113

〔義久公御譜中〕

〔正文在坊津一乘院〕

七月十七日着岸、以來之仕合具可申候へ共、此を如存用
繁候間、不能懇筆候、乍去幸侃かたへハ一書を以申下候、
かしこ、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕九月十三日

〔信男〕
(花押)

一乘院

114

〔御文庫四拾八番箱中義久公卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々彼使有方眞蟲之者にて候間、御用心有へく候、
圖・抱・紀・出其外皆々へも辛勞之由、心得頼入申
候、

長陳之御辛勞察存計ニ候、仍初秋之比、高麗番衆引陳ニ
相定候間、替衆糧物等可差留之由、京都々被仰下候キ、
雖然八木之事者少分成共可差渡之由、我等爲分別申付、
上井中五渡海之刻、其元へ相届之由候キ、定別儀有まし

115

〔御文庫四拾八番箱義弘公卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

く存事候、然者此比者又在番ニ相定候、人數糧物可差渡
之由承候条、其分別可仕之由、幸侃へ申付候、節々替り
かましく候間、不及了簡候、兼又閏七月十六日御材木
引ニ付、和泉表へ罷越令馳走候得共、三百本之大木にて
候之故、はかゆかす候て、漸此比引濟候、さてハ此廿二
日ニ可致上洛覚悟に候、爲心得候、將又先書ニ幸侃かの
や縁中之儀無分別由承候キ、是ハ菊壽と源二郎女子之事
にて候哉、かのやハ又六之女子を縁中にと被存候處ニ、
高麗にて典既幸侃へ被仰合候間、不及是非候、併此比ハ
源女子若年にて候間、縁中之儀いかゞ之由候て無落着候、
幸侃も此節者病氣快氣にて候、内々も宗躰被改候て、大
峯之護、愛宕之千座執行、正八幡へも參詣にて候、種
々引替りたる様子に候、彼是爲心得候、猶期後音之時候、
恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕九月十五日

竜伯(花押)

又八郎殿

猶々朝鮮國中之番船者不及申、定大明よりも番船多
々差渡、海陸共いかやうのたても可在之候、おほ

方之儀にてハ有ましく候、明年三月者かならずく

御人數可被差渡之由候条、其間之儀越度出來候ハぬ
様ニ可有才覚候、尚追々國元より可申通候、兼亦其
表在番人數之改之 上使、大略臘正月之間可有渡海
之条、其間之普請、無斷絶被仰付尤候、人數之儀ハ
罷下可申付候、以上、

先度令注進候様、大明和平之儀相破、明春御人數可被
差渡之由、弥必定候、我等事急度可罷渡之由被仰出候
間、貴所替りにも可罷成欵と幸ニ存、自是直可致渡海
と用意候処、去十二日致 御目見得候へハ、先急度人
數を差添、我等事者老躰寒中之儀候条、年内令在國、
所務以下申付、明年三月惣勢可被差渡時分可致渡海之
由、直被仰聞候、然者先國元之様ニ罷下候、人數兵糧
等之儀急度可差渡候、

一鹿徳嶋之事、此間者定御普請以下、然々も有間敷と氣
遣千萬候、夜白被入精候て可被仰付候、當座先番船可
浮出用心專要ニ候、萬一薩州衆手前ニいかやうの越度
も出來候てハ可爲笑止と、石治少御心遣之由、切々被
仰候、かやうの刻ハ無理非道をもてなり共、御城御普
請等之儀者、周備させられ候へて不叶儀共ニ候、能々

可被仰付候、

一竜伯様御事者、初秋已來早々可有御上洛之由被仰出候
へ者、今度高麗へ人數兵糧以下被差渡ニ付而、先此節
者被成御在國、諸事被仰付、さて伏見にて御越年なさ
れ候やう、拾貳月中旬比ニも御上着候て可然之由、石
治少被仰候、其旨追々申下候間、此節者可爲御在國候、
爲心得候、

一其表爲御見廻定 上使可被成御渡海候、其内其元御普
請等之儀、無由断可被仰付候、今度大明勅使并遊撃も
失面目、御弓箭ニ落着候て令歸帆候間、此跡之番手ニ
ハ相違たるへく候、相構不可有由断候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長元年〕九月十五日 義弘(花押)

又八郎殿

116

「義久公御譜中」

薩州伊集院之内

一作 飯牟礼之村

余分之内割付候早、

高五斛

右之地、爲加増被差遣候之也、

〔朱カキ「即慶元年」
文祿五年
九月十五日

九月十五日

伊集院右衛門入道
幸侃(花押)

大迫五郎左衛門尉殿

117

〔雜抄〕

慶長元年九月十五日、義弘公^も又八郎様江御狀之内ニ、
一我等事、急度可罷渡之由被仰出候間、貴所替り等も可
罷成欵与喜ニ存、自是直可致渡海と用意候処ニ、去十
二日致 御目見得候へハ、先急度人數ヲ差渡、我等事
者老躰寒中之儀候条、年内令在國、所務以下申付、明
年三月惣勢可被差渡時分、可致渡海之由直被仰聞候、

118

〔雜抄〕

一慶長元年九月廿三日、大坂御出船、十月十日、濱之市
御下着、

119

〔嶋津氏御文書〕

近日御下向之由珍重存候、仍先度如申候、吉田美作・白
濱次郎左衛門・福崎新兵衛尉加増之事、當所務共ニ被遣
候様ニと申候處、右之衆竜伯被召遣候間、御談合在之而

可有扶助由承届、尤存候、長壽儀者貴老御自分可被遣候
条、則被仰付可然候、長壽事、諸人之猜可在之候間、自
然訴族候共、被入御念可被遂御糺明事專一候、如申旧朝
鮮在陣辛勞、并毎々御上洛之供衆、打續奉公仕面々、義
久被成御相談被立勘否、此刻御加増肝要候、猶三河可申
入候、恐惶謹言、

〔文祿五年〕
九月十七日
石治少
三成

羽兵老

人々御中

120

〔新納旅庵譜中〕

慶長元年賜暇 義弘主歸國、九月廿三日、解纜於大坂也、
明年再就朝鮮國渡楫、爲諸般用意、樺山權左衛門尉・白
坂七右衛門入道・本田源右衛門尉・旅庵共四人殘京都成
諸事、十月廿三日、解纜於大坂欲歸國、有逆風無順風、
由此旅庵一人從蒲州島下船、經陸路所以歸國也、

121

〔嶋津家文書〕

覺

今度石治少様へ石火箭五丁進上申候、此内ばらひや壱丁、

右之内幸侃より石火矢式丁、抱節より老丁、

以上

文祿五

九月廿六日

鎌田出雲守

政近判

伊集院下野入道

抱節判

長壽院

盛淳判

〔一番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶以増右・石治書狀相添進候、御請則此ものニ可給候、以上、

態申入候、今度此表歸朝之次第、最前被仰出候通、各申渡候旨言上申候處ニ、被成 御朱印候条、則相進候、猶面上之時可申入候、恐々謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長元年欽〕

十月朔日

寺志 广守

正成(花押)

小攝津守

行長(花押)

嶋津又八郎殿

御陳所

『喜入氏文書』

永々在陣中別而辛勞之段、于今無忘失候、然者無吳儀歸朝之由目出候、殊今度其地之躰具ニ注進、尤肝要之儀候、

弥無油断世上之躰被聞合、切々可被相通事可爲満足候、

此國之儀、歸朝已後每篇無易儀候、可心安候、猶期後音

之時候、恐々謹言、

〔慶元欽〕

拾月十四日

喜入攝津守殿

忠恒(花押)

〔御案文正本大口土篠原自淨院藏〕

猶々乏少ニ候へ共、段子ニ卷進覽候、誠補志計候、以上、

態令申候、仍國元之儀御檢地以來、治少老別而被入御念、置目等御改ニ付、貴所御辛勞之由、雖不始于今儀候、亦御入魂頼存候外無之候、將又家中之者共未加増之支配無之候、急度糺申付候へと龍伯・兵庫頭へ申越候、定貴所
如
内々可爲御存知候、龍伯・兵庫頭併者共、當時餘少扶持
在京我等在陣いれも數年之儀候如、不并なるニ躰より見苦候
にて在陣在京を相届候故、皆々見苦躰候間、こゝもと在
陣中
陣之大名衆へ出合候て外聞不可然候条、一刻も早々支配仕度候、若御引陣之儀も候へ、直罷上、龍伯・兵庫頭談

合申候て、申付度と存候つれ共、御引陣之御沙汰も無之候付不能其儀候、幸龍伯も此比被罷上候由候而、兵庫頭令相談、急度相濟可申候、拙者も可致扶持者共候而、追而從是以付可申付候、治少様へも委申入候条、定可爲御納得候、恐々謹言、

〔慶元カ〕

十月廿三日

嶋又八

忠恒(花押)

安三州

御宿所

125

〔御文庫四拾八番箱義久 卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

御書面之趣、隨令披覽候、

一 今度大明和平之儀相破、又々御人衆可被指渡旨被仰出、既惣勢來三月可爲渡海由候、九州來者急々に罷渡、年之明暮可到御番由候、當國同前ニ被仰付候、就夫當分談合最中候、俄之儀候間、難成事耳ニ候へとも、追々人數可指渡用意無由断候事、

一 兵糧之儀承候、先ニ人衆并兵糧之事可指渡覚悟候處、從京都御引陳之由候て、被成御留候、併御引陳有之共、兵糧者罷渡候へたと存、上井仲五罷渡刻少々差渡候、然者此度兵糧可指渡調法長壽仕へき、從京都以御指圖

被仰付候間、長壽前より可申候、然共其元兵糧之始末無心元候条、此度拙者上洛舟之内、荷物つミ入申候といへ共相おろし、二そう兵糧舟として指渡候、巨細之段者利安可申事、

一 八月以來、拙者上洛之儀被仰下候へとも、何かと指合候而、于今令在國候、然処頃之到來ニ者、高麗御番手申調、於京都可至越年用意候て可罷上由候間、任其意、必來月中旬比ニ者此元可打立覚悟ニ候、毎事自京都可申承候、大閤様御自身可有御渡海之由候間、於其儀者至御供、其表にて可遂對談候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長元年秋〕十月廿四日

竜伯(花押)

又八郎殿

126

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々在番之人數、いつれへも永々辛勞之段、被相心得候て可預候、隨而金銀色繪之鉄鈔并せつは相添令進之候、爰元諸式之儀、本田治兵衛存知候間、於様躰者可有御尋候、以上、

好便之条令啓候、仍大明和平之儀相破、到其表重而御人數可被差渡之旨、京都へ巨細申渡候き、定此比者可相届

候、其表之儀亦可爲長陣之間、諸事苦勞之段、中々申も疎ニ候、我等事、去月廿三日ニ大坂致出船、今月十日濱

之市迄令下着、人數・兵糧已下其地へ可差渡儀共、竜伯様へ申上、遂御談合候、先々人數兵糧之儀、近々可差

渡候、我等一身之儀者、明年三月惣勢可被指渡時分、可致渡海候由被仰出候間、來春者かならず可罷渡候、以先

札申候様ニ、其元御普請已下無緩候様可被仰付候、尚追々可申越候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕十月廿五日

義弘(花押)

又八郎殿

127 「御文庫四拾八番箱中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

猶々御城米の返米、こゝもとへ參候やうに、國もと

へ可被仰遣候、治定上かたより渡海之軍衆へ、彼御

城米御くばりなと候てハ可爲笑止候間、幸侃へも具

申遣候、猶々被仰下候て御尤候、以上、

急度申上候、仍此方おく入之由候て、諸陣其用意候、

拙者へハ未被仰聞候間、正儀いかゞ候へ共、毛利老

州より豊前守殿へ、一昨日早船を被進必定之由候て、

あんかうら在陣之各在所へ、用意之儀被仰遣候間、油

断申候へぬやうにと、從又七殿注進候条、則國もとへ申越候、

一御軍役何と可相調候哉、千萬機遣ニ存候間、於此方軍衆可罷立調之儀、よるひる三日談合せ申候へ共、曾

可罷成儀共不出合候、定國もとへハ御つもりの様子可被仰下候条、無油断やうニ被申付候へと、幸侃へ申越

候、今度之御軍役不相調候へ、御家何と可罷成候哉、連々存候事も、只今ニ相當申候、治定御つもりなと候

て、諸侍知行相應へ被仰付、於不成者、其仁へ曲事たるへきなと被申、又ハ出物にて被相調候へ

なと、大かたニ可申人も可有之候、さやう候て時日押移、事成申ましき事可爲必定候、先書ニ如申上候、

諸侍あまり不弁之躰候間、無余儀御軍役共御あたり候

へ、とても諸侍へありしき役儀を被仰付かた

候すると存、先書ニ加増之儀細々申上候つる、弥其段

存通候、

一軍衆於渡海者、兵糧可被相續儀肝要候、此中度々態船

を遣申候て、是非ニ兵糧運送候へと申候へハ、近日歸

陣之沙汰候間、入ましき由候て被打延、當于時如此候

事^(嘆)止不及是非候、いよ／＼事せきにて候する間、船

128

〔義弘公御譜中〕

楊方亨・沈惟敬先歸朝鮮、時朝鮮京畿道都體察使李元翼聞 秀吉之再促大兵、而聚兵爲防戰之術、逢方亨・惟敬而重問之、方亨悉告之、元翼曰、速守釜山城、而日本攻襲則可急破之、惟敬制曰、事成則固善矣、然日本人者武勇尤勝、元翼其難克乎、初戰失利則後禍起矣、子其深圖

共無之、兵糧屆候儀可難成候、然者軍衆渡海候共、一日之堪忍も相續申ましく候、何角と候ても、果而ハ御兩殿様御前ニたゞり可申候、不可有御油断候、一軍衆并兵糧相調候共、船無之候ハ、いたつら事ニて候する間、題目船之儀可被入御念候、國もとへハ則申越、所々津浦へ可有之船四枚帆を限付立、年内先兵糧一もどりがせ候へと申遣候、若船主船子等、或藏入役人、又ハ津浦へ主取なと蟲貞候輩を頼、違亂申者候ハ、則致成敗候へと申遣候、爲御存知候、猶追々可申上候、誠惶敬白、

〔朱力平上〕

慶長元年

十月卅日

又八郎

忠恒(花押)

進上 武庫様

129

〔羽嶋氏文書〕

之、依是元翼意迷而不得出軍、既而方亨・惟敬皆入大明、惟敬恐人笑己、而佯言曰、秀吉拜天恩之辱、戴冠冕稽首而謝恩矣、且施賄于行長、調猩猩毡・天鵝絨及大小金器皿三十餘櫃、大書于其箱上曰、日本國王豊臣秀吉所餽遺之什物也、明人皆笑曰、猩猩毡・天鵝絨者南蠻之土産也、而爲日本之方物、尤可捧腹、然明主不罪之、而藏于内府、石星尤信之、雖然以無秀吉之謝書故人皆疑之、故惟敬又到釜山浦、賈撰謝表而來獻、然不著其年月、由是朝野齊言曰、惟敬之僞言也、惟敬慙懼、

隅州肝付之内新富之村

一作余分之内割付候早、

高四斗二舛

右之地五斗出米、爲返地被差遣候者也、

文祿五年

十一月二日

伊右衛門入道

幸侃(花押)

羽嶋藤右衛門尉殿

130

〔又七郎豊久譜中〕

「正文在島津安藝守久雄」

其國爲在番相殘、打續令苦勞儀被察候、此比弥其元靜謐
之由尤候、雖無差事、使者被遣候、猶追而可被仰遣候也、

〔采カキ〕
〔慶長元年〕十一月四日 ○〔御朱印〕

嶋津又七郎とのへ

131 薩州菱刈大口之内

一作 大儀寺之村

余分之内割付候早、

高六石七斗

右之地五斗出来被納せ候、任員數、爲返地被差遣者
也、

文祿五年

十一月四日

伊集院右衛門入道

幸侃(花押)

宮里主殿助殿

132 『嶋津氏文書』「義久公御譜中あり」

(本文書ハ一二三四号文書ト同文ニツキテ省略ス)

名残をのこせ玉ゆらの露

右一首、龍伯公 大中庵主の年廻ニ依て、詠して手向奉
る也、

134 「御文庫四拾八番箱中」

敬白 起請文前書之事

今度加増御支配之儀、 竜伯様・幸侃・義弘遂御熟談申
喫候之条、 公儀之事者不及申、縦家來之諸侍企述懐、
當末誹謗之族雖在之、不混于他、 竜伯様・幸侃・義弘
一味御同心之御相談、聊不可存別儀候、若此旨於令相違

者、

(年玉)

奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本國中六十
余州大小神祇、別而當國鎮守正八幡三所大菩薩 霧嶋六
所權現、殊當所擁護新正八幡大菩薩并諸神等 薩摩鎮守
新田八幡大菩薩 開門正一位 鹿兒嶋諏訪上下大明神
天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰可罷蒙身上者也、
仍起請如件、

文祿五年十一月五日

兵庫頭

義弘(花押)

竜伯尊老様

參人、御中

133 夕たちの雲はきゆともはちす葉に

135 「御文庫四拾八番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以先書申候様ニ、其表在番人數、應軍役可差渡之由被仰出、去月中旬下國候、然者右人數之都合、急度者難調候へ共、竜伯様へ遂御談合申付半ニ候、貴所事打續永々御辛勞、中々申も疎ニ候、明春者かならず可罷渡候間、萬々以面可申承候、就中明年之うらかた、森喜右衛門尉友賢へ申付候て參せ候、爲御心得候、恐々謹言、

十一月十一日 義弘(花押)
又八郎殿

136 「義弘公御譜中」

「正文在加治木來圖師平兵衛」

尚以加徳へも何事無御座候、切々得御意躰候、以上、幸便之条一書令申候、其已來切々以書狀成共可申入處、遠路故無音ニ罷過、背本意候、此地相替儀無御座候、可御心易候、來春此地爲可御渡海之由承候間、其節以面上方々可得御意候、指儀無之候へ共、御國本へ御下之旨承候間、一書如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」 伊民太
「慶長元年」 祐兵(花押)
霜月十六日

薩广侍從様
人々御中

137 「御文庫拾七番箱十三卷中」

敬白 起請文之事

今度少煩申ニ付、我等者不届儀申候て迷惑申候、若只今申分候を、偽など思召候てハ咲止に存候、いさゝか自由にて遅參不申候つる、餘々おとろき申候間如此候、可然やうに御申分候て可被下候、此旨偽申候ハ、
奉始上梵天帝釈四天王、下堅牢地神五道冥官、惣者日本國中大小神祇、別者薩州惣廟新田八幡大菩薩 開門正一位大明神 鹿兒嶋諏訪上下大明神 大隅正八幡大菩薩 日向鎮守妻万五社大明神 霧嶋六所大權現 白鷺六所權現 愛宕山大權現 大天狗 小天狗 氏神大口上下諏訪大明神 天滿大自在天神御部類眷屬、神爵冥爵蒙忠貞身上、此世者白癩黒癩受大重病、於來世無間大地獄可墮在致者也、仍起請文意趣如件、△

文祿五年 十一月十九日 新納貳右衛門尉
伊勢弥九郎殿 (貞鳥) 忠貞(花押)
まいる

『旧記抄』

猶々鎌雲事内存共候て、談合所へハ罷出まじき由候、然ハ何扁秘書内談候へと申事候、就中支配かた歸者之儀候而、別而談合専用候、兩人も可得其意事肝要候、自然秘書手前繁多候て、大かたニ候者爲兩人、

鎌雲へハこま／＼内談尤候、以上、

今度就奥入支配之儀申候、圖書頭・鎌田出雲守差越候様子熟談候而、可然やうニ可入精儀此時候、定秘書雖可爲演説候、別而心遣之儀候間令書載候、支配之儀連々抽奉公之眞実候、衆人ハために成候やうに可入念候、爲其配當衆使筆者いつれも以分別申付候、若公儀を蔑いたす者共同前ニ候ハ、後日無面旨稱可申理候、此段秘書へも堅申候間、爲兩人配當衆使銘々可申聞候、鎌雲へこまかに内談候へと秘書へ慥申候間、得其意肝要候也、謹言、

〔慶元款〕

十一月廿四日

忠恒御判

本田六右衛門尉殿

相良新右衛門尉殿

『喜入氏文書』

以上

其後者無音之至候、在陳中者別而辛勞之儀不及申候、仍

就奥入圖書頭歸朝に候、然者巨細申越儀共候間、可被遂

面談事尤簡要候、尚重而可申通候、恐々謹言、

〔朱ノ片カキ〕

〔慶長元年〕十一月廿五日

忠恒〔花押〕

喜入攝津守殿

〔此御書、喜入忠繼譜中ニ在リ、正文在當家トアリ〕

〔大崎衆野本内記家藏〕

尚以御舟作之儀、弥手間入へき由聞得候間、肝煎尤

ニ候、乍重言於致遅々者、拙老迷惑可爲此時候、入

魂頼存候、以上、

今度公儀御船作付而、石治少老より川東善左衛門尉被指

下候条、則彼者其地へ差越候、巨細之通可被聞置事肝要

ニ候、然ハ此度十そう之船、皆以正中ニ可相調之才覚

専用之段被仰下候、自然各手前之船致遅々候て不可然、

京儀之時ハ、畢竟此方迷惑ニ可相究哉と存候間笑止ニ候、

能々可被入念事此節候、尤重疊雖可令啓候、可致口達之

間、不及細筆候、恐々謹言、

霜月廿六日

竜伯

北郷左衛門入道殿

「文祿慶長之間、朝鮮入中之御狀」

141 正宮 善神王御再興茶番書法略ス

一番 景庶(平) 二番 道隆 三番 柴朝直人

四番 永温 五番 重助 六番 道武 鑑嶋宮ト

七番 道宗 八番 尊守 九番 永澄 俊房

十番 景繩 執行大夫 十一番 衆徒中 十二番 十三番

十四番 十五番 正興寺 十六番 正高寺

十七番 正國寺

文祿五年十一月廿六日

田所澤永温(花押)

右茶番はて次第、此番帳さへの様かへし可有候、

142 正宮 中門御再興茶番之夏

「名前、前条同断故略ス」

慶長二年丁酉三月八日

「右二通、國分宮内澤氏文書」

田所澤永温(花押)

文祿五年丙申十二月二日、公復賜主水田祿於隅州西俣

村隸肝、及河原村隸曾於郡之地、乃國老伊集院右衛門太夫忠

棟裁目錄授之、凡伍拾參斛八升併故爲百斛、

144 隅州肝付郡之内

一作 西俣村之内

高五拾三石八舛

曾於郡 河原村之内

高四拾六石九斗貳舛内三分、別所へ返地出申候也、

合百石、此内加増五拾三石八舛、

文祿五年 伊集院右衛門入道 幸侃(花押)

十二月二日

兒玉主水佑殿

145 「正文種脇士在肝付鏡存坊」

日州諸縣郡

一作 野尻 三ヶ山之内

高五石

先年高麗國輿陣迄御奉公被申候故、如此被宛行者也、

文祿五年 伊集院右衛門入道

十二月二日

幸侃(花押)

文祿五年十二月二日

伊集院右衛門入道
幸侃判

蓮光坊

146 『安樂氏文書』

隅州桑原郡

一作

吉松之内

高十四石二斗六舛三合

持留

高五石七斗三舛七合

合貳十石

右之内十四石二斗六舛三合

加増

文祿五年

十二月二日

伊集院右衛門入道
幸侃(花押)

安樂大炊助殿

147 『寺文書抄』

『龍伯公』
御袖判

一高二拾石

隅州曾於郡郡田村之内

一同四拾石

横川上之村之内

『曾於郡』
念佛寺

148 「財部米良氏藏」

薩州大口之内

一作

柳瀬村之内
下殿

高十九石九斗四升四合八夕九才

大儀寺村之内

高卅石七斗八升四合壹夕壹才

合五十石七斗貳升九合

右之地者、先年朝鮮國奧陳まで被致供奉、始中後御奉

公被成候故、爲加増被宛行者也、

文祿五年

十二月二日

伊集院右衛門入道
幸侃判

米良勝右衛門尉殿

149 日州諸縣郡之内

一作

田尻村之内

高四百十七石四斗七舛九合二夕一才

隅州曾木
裏之名之内

高七石七斗參舛八合六夕九才

菱かり本城
南裏村之内

高五佰六十六石四斗一升六合九夕四才

同
荒田原村之内

高八石三斗六舛五合壹夕六才

合千石

右之内四佰廿五石貳斗一舛七合九才、爲加増被差

遣者也、

文祿五年十二月二日

源七郎殿

伊集院右衛門入道

幸侃判

150
『旧記雜抄』

日州諸縣郡志布志

一作

高拾三石一斗壹舛玖合

内之藏村之内

寺見

姫城村之内

高廿六石八斗八舛壹合

合四十石

右之内十三石一斗壹升九合、爲加増令配分者也、

文祿五年十二月二日

蒲地孫四郎殿

伊集院右衛門入道

幸侃(花押)

151
『御文庫三番箱 義久公 二卷中』

唐入ニ付嶋津殿御軍役人數一万五千

一三百本

のほり

又一郎殿

五十本手鑓

義久

一三百本之内貳百本ハ長鑓

卅本て鑓

義弘

廿本て鑓

此外手鑓ハ面々たしなミ次第、

供使之時、又ハ陣屋之前ニ、長鑓計ハ見くるしく候、

一千五百丁

鉄鉋

一千五百帳

弓・しこ

一六百本こさし物、是ハくそくきせて、

一馬上ハ歴々之衆計、但かちたちにて不成衆、いつれも

可爲馬上、然間馬上之員數ハ不相定、馬上之衆甲・具

足可然候事、凡如此、猶以御たしなミ專一之事、

一米・大豆合老万四千四百三拾八石九斗

一右馬頭殿馬數九騎、此人數三百三十貳人、

一幸侃之馬數六十九騎、此人數貳千三百卅貳人、

一千二拾石ニ馬老騎之賦、合九拾五騎、此人數三千貳百

惣已上馬數合三百五拾騎

三拾人、但人躰老入ニ付卅四人宛、

惣已上人數老万五千九十七人

一五百拾石ニ馬老騎之賦、合廿四騎、此人數四百八人、

船配但二度漕⁷一度之分

但人躰老入ニ付拾七人宛、

一拾端帆拾艘 但老艘ニ付八十人宛八百人、

一三百石ニ馬老騎之賦、合百四拾三騎、此人數千四百三

一八端帆四十艘 但老艘ニ付七拾人宛二千八百人、

十人、但人躰老入ニ付拾人宛、

一七端帆三十老艘 但老艘ニ付六十人宛千八百六十人、

一かち小持衆三百人、夫丸九百人、但人躰老入ニ付夫丸

一七端帆四艘 但老艘ニ付四十人宛百六十人、

三人宛、

一六端帆六艘 但老艘ニ付三十人宛百八十人、

一無足衆五百人、夫丸千人、但人躰老入ニ付夫貳人宛、

合船九拾老艘

一御道具衆六百六拾五人

合人數五千八百人

一御藏入より可出夫丸貳千人

馬船之配

一加子貳千人

一七端帆拾六艘 馬八拾疋

惣都合人數老万貳千四百三拾三人

但舟老艘ニ付馬五疋、馬付十五人、加子拾人宛、

右之人數、五ヶ月之兵糧老万五百二十二石九斗、但

一六端帆拾四艘 馬五十六疋

此内船頭・加子増分籠候、

但船老艘ニ付馬四疋、馬付十二人、加子八人宛、

一馬數貳百七拾貳疋、此飼大豆六百拾六石、但五ヶ月分、

合船三十艘

一日ニ貳舛飼、

合馬百三十六疋

加子馬付

合人數六百八十人

惣都合人數五千八百人

惣都合船數百二十壹艘

有船

一拾端帆 拾艘

一九端帆 五艘

一八端帆 拾艘

一七端帆 廿艘

一六端帆 廿艘

合六十五艘

作船

一九端帆 四十五艘

但船壹艘ニ付六十五貫文ツ、入目、

一八端帆 廿一艘

但舟壹艘ニ付五十五貫文ツ、ノ入目、

合作船六十六艘

惣都合四千三百五貫文

右米ノ二千八百七十石

文五

十二月五日

「此正文、御文庫ニ番箱義弘公ニ卷中ニあり、季通亂合ス、義久公御譜中ニ正文在卷本トアリ」

「家久公御譜中」

「案文」

以上

其後者不申通候、仍我等忤者共數年在陣在旅をいたし、別而辛勞仕候者共、近年然々扶持無之候、他之家中ニ相替見苦躰にて奉公仕、外聞不可然候条、我等歸朝申候者、竜伯・兵庫頭ニ談合申、知行共相應ニ可申付と存候處、于今ニ依致在陣押移候、然處明春可爲奥入と被仰出候由、其聞得候、爰許各其被催候間、可致軍役者共へ、於此方令加増、出陣之用意共申付、圖書頭歸朝させ申候、國元之儀、御檢地以來別而治少老被入御念之由候間、先々得御内意候て可申付事ニ候へ共、奥入之調儀一刻もいそかわしき事ニ候間、急申付候、惣而武士役可仕者へハ、御檢地以後追付令加増、兼而用意共申付置候ハ、俄ニ如此氣遣申ましき事ニ候へ共、此中竜伯・兵庫頭も此表御無事ニ相濟候ハ、拙者歸朝可申候間、談合申候て可申付候、我等を相待候由内々承候間、存分共細々申越候、

定而竜伯・兵庫頭を委可申入候間、治少老御前可然やう

ニ御取成頼入候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

十二月五日

嶋又八

御在判

安三州
御宿所

154

〔御文庫四拾八番箱中〕「義弘公御譜中正文在川野彌六トアリ」

なをく今度之儀相調申候へてハ笑止候間、あまり

の儀ニ令自筆申候、以上、

明春おく入之由被仰出候由候間、必定之儀承度候処、又七殿へ被進候御狀、先日もたせられてミせられ候間、洛着申候、然者御國之やうす何篇不調躰ニ聞申候間氣遣ニ存、圖書頭・鎌雲歸朝させ申候、我等存分共申上候、定此比者可爲着船と存候、よくくきこしめし候て、肝要候、竜伯様へも申のほせ候、猶重而可申上候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕

十二月七日

忠恒(花押)

〔上書〕

武庫「字不見得」

參人々御披露

又八郎

忠恒

155

〔義弘公御譜中〕

〔正文在大口衆有村安左衛門〕

今度條々申出候之處、被令納得之由喜悅候、殊更向後被任下知、可爲無二之忠勲之段、具誓紙到來尤以神妙候、從是永々不可有違變候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

十二月十三日

義久(花押)

兵庫頭殿

156

〔御文庫二番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中」

以上

御札拜見申候、走者之儀被仰越候、則申付、御使へ渡申候、將亦早々御見舞可申入処、手前取紛無音背本意候、勅使船も夜前罷着候付而、以使者不申入、御心中致迷惑候、勅使遊撃送返候刻、必以參相積儀可申上候、恐惶謹言、

〔慶長元年款〕

十二月十八日

小攝

行長(花押)

嶋又八様

御報

157

〔御文庫二番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

貴札令拜見候、殊更虎皮杓被懸御意候、遠路御志之段
忝候、當年者可被成御歸朝候かと存候處、無事滯ニ付て
不及是非候、來春者早々兵庫頭可爲御渡海候条、其砌可
申入候、恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長元年」

十二月十八日

石治少

三成(花押)

嶋又八郎殿

御報

158 「御文庫ニ番箱義弘公四卷中」「義弘公御譜中正文在巻本トアリ」

以上

御兩札具拜見申候、

一 御國御置目、彼是猶以竜伯老被仰談度儀共數多在之ニ
付、竜伯老御上洛今少可相延由仰蒙候、來春者可被成
御渡唐候間尤ニ存候、乍去拙者折節佐和山ニ候て、殊
煩申故不罷上候間、三成如何可被申候哉、難計候、然
共久相延儀者在之間敷候条、其内ニ萬可被成御相談与
存候、隨分三成へ相心得可申聞候事、

一 高麗返上米無御由断被仰付由、尤可然候事、

一 御下向以後、兩度之御狀共致拜見候、御國之御仕置色
々思召候様ニ無御座由、幸御下向之儀ニ候、來春御出

陣候者、御在陣中者遠路及越難被仰付候条、此刻諸色
堅被仰達尤ニ存候事、

一 福崎新兵衛仕上せ之八木、上着次第如仰蒙候、於此方
隨分精を入可申候、

一 當米古米五斗出物、并貳拾万石御藏入、并浮地分仕上
せ之刻、悉懺狀ニ書わけ上せ可申旨、堅可被仰付候、
惣別御國元々毎々送狀之員數・上着之員數引合請取、
拂方を改可申候間、幸侃・肱枕・福崎ニ右之通可被仰
付事、

一 御下向之刻、治部少被申入候儀共、竜伯老・幸侃へ被
仰達候由尤ニ存候、

一 爰元替儀無之候、伏見山之御城普請迄ニ候、猶追々可
得御意候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長元年」

極月十九日

安宅三河

秀(花押)

義弘様

參御報

159 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々八木民部左衛門尉先度爲御使歸朝候、しかれば
濱市・帖佐をかけまへり、早々參陣仕度之由、肝煎

申候、爲御心得候、以上、

其後御音信も無御座候處、圖書頭・鎌田出雲守爲御使被差渡、其地無事之由承候、満足之至候、此地も吳儀無之候、然者此間在番人衆いづれも令歸朝、陣中いよく可爲無人と心遣ニ候、乍去京都よりも番手之儀、無緩之様ニと被仰下候条、應其旨申付候、定急度可致參陣候、隨而正月御着物并茶つほ者・ミりんちうつほ者ッ參せ候、巨細者納殿も可申候間、不能一二候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長元年〕十二月廿一日 義弘(花押)

又八郎殿

160 桂民部少輔忠秀 初藤五郎、神祇
忠防二男

天正十年壬午生、

未迄志学之際、兵庫頭義弘主之侍閣下、爲小性不去膝下、以故朝鮮國渡楫之時扈從、感其勞也、本給五十石、新恩五十石共百石、文祿五年十二月廿一日、賜之者也、兄忠次早世、爲父後、

〔文祿五年ハ忠秀十五歳ニ當レリ、正保三年三月十九日病死、年六十
五トアリ〕

161 『新納氏所藏文書』

新春之慶賀不可有盡期候、抑其地無吳儀候哉、遠方故音信希にて不断想像計候、此表無相替儀候、龍伯様御勇健候哉、是又切々到來承度候、便之時者委可被申越候、洛中青春之佳景羨候、此地邊鄙之栖可被察候、猶追而可申候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔文祿五年丙申〕二月九日

忠恒(花押)

〔忠元〕
新納武藏入道殿

162 『桂氏文書』

一作

薩州市來之内領知目錄

一大里和田の門

一同 ケ所大庭の名子屋敷八郎次郎

一同 ケ所土師宗七先

御加増

分米大豆五拾石

本給分

分米大豆五拾石

合百石

已上

文祿五年拾二月廿一日

上井神五郎

里兼

休閑齋

旅庵

川上三河

肱枕(忠智)入道

桂藤五郎殿

「藤五郎後民部少輔ト改ム、侍 松齡公閣下爲小姓不去膝下、從軍朝 鮮役感其勞、賜新恩地百石、如右」

163

「本田氏藏」

一作 切紙

川邊野崎村之内

高四百廿四石二斗六升

此内百壹石谷山福本村ニ有、

高橋村之内

高五百七拾五石七斗四升

合千石者

右之内式百七拾五石七斗四升、爲加増當毛共ニ被宛 行者也、

文祿五年十二月廿三日

圖書頭

忠長判

本田六右衛門尉殿

一作 切紙

川邊野崎村之内

高佰四拾九石七斗六升三才

高橋村之内

高四百六拾九石二斗三升九合九夕八才

平川村之内

高百壹石

阿多

松田宮崎村之内

高八拾石

合八百斛者

右之内七拾五石七斗三升四合、爲加増當毛共ニ被宛行者 也、

拾二月廿三日

圖書頭

忠長(花押)

本田六右衛門尉殿

165

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々京衆罷下候ものゝ下説ニハ、高麗入上方ハとか
く無沙汰之由申候、いかゞと存候、

度々如申候、其表弓箭ニ相定候之故、長陳打續奥入之御
辛勞自是存候、就夫圖書頭歸朝之条談合最中ニ候、先以
番手之衆申付、爰元打立候へ共、順風無之候て、遲怠咲
止ニ候、兼又加増支配之儀、大略其元心付之ことく談
合にて候、此等之儀ニ付、我等上洛事、義弘が抑留にて
候間、于今延引候、さてハ越年者可爲在國候、猶期後音
候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長元年〕十二月廿五日 竜伯(花押)

又八郎殿

166 「新納忠元勲功記」

一文祿四未四月、忠元在京、此時分奉對御家惡逆之者有
之、世上無心許御時節にて、貫明様 松齡様別而御
心遣被遊ニ付、奉初 琴月様 御兩殿様江御誓詞三ヶ
条被差上御砌ニ可有御座、忠元も奉對 貫明様今度談
合仕候人衆、私之隔心差捨御奉公之本意相守可申、外
ニも同心之衆於有之者、遂言上熟談可仕、世上轉變仮
令數年不懸御目候共、不奉忘御高恩候て御時節可奉待

上、尤向後何様計策之族有之候共、曾以同意仕間敷、
此衆御成敗於承付者、上意次第上洛申分可仕趣、三ヶ
條神載を以申上趣御座候処、此月廿八日、貫明様よ
り忠元江三ヶ條神載被顯心底、寔ニ御當家且御自身様
之御爲、旁神妙被思召上旨御神文被成下、同日同案、
伊集院抱節ニも被成下、是又幸侃惡逆ニ付、御用心之
御密約ニ可有之与申事御座候、

一同年三月、此比忠元并町田出羽入道存松・本田下野入
道三省、其外吉田美作守清存・喜入大炊介久正・平田
豊前守宗・是枝大善坊快・肥後新左衛門等御供ニ
て、在京仕候衆銘々朝鮮ニ進上物差上、松齡様江御
機嫌伺申上候處、此月七日、三省・忠元・存松宛書に
して右之御挨拶御書被成下、彼表新儀無之、大明之便
も不被爲聞、何れ可爲長陣急便別書難被下、右之面々
江も御祝着思召趣相心得、各在京辛勞仕段も宜御頼被
遊旨被仰下、同比忠元兼而詠置和歌三十首、細川玄旨
ニ致持參高評願置候處、此月廿五日、玄旨手翰を以忠
元江右之一卷被爲返、墨を被付候事者憚候得共、御知
己之故難被打置、御沈吟之上御存慮被爲註候趣、叮嚀
被仰遣、左候而十六首御点有之、尤被爲褒候一首、時

雨之和歌ニ御座候、

晴くもるひかりハ空に定して夕日をわたるむら時雨
かな

一同年春、御檢地相濟候付、四月十二日、太閤御朱印ニ

而 松齡様江御用被仰渡、同五月十日、唐嶋御出船、六

月五日、大坂御着、則伏見城に御登城、太閤御目見、

同廿九日、薩隅兩國并日向諸縣郡御檢地御目録等御拜
領被爲在、七月、琴月様朝鮮より鹿嶋右衛門尉國

歸朝被仰付、同十一日、忠元江御書被成下、松齡様

御上洛被遊候間、何篇御熟談、皆々辛勞仕筈、御國中

配當如何相調候哉、御兩殿様被入御念御時節候付、

思寄候儀者無用捨申上、御家御爲可然様可預入魂、猶

右衛門尉可申趣被仰下、此月 松齡様京都御立、忠元

并長壽院盛淳東寺迄奉送之、同十九日、大坂御出船、同

廿四日、細嶋御着、同廿五日、幸便御聞付、右之御左右

忠元江御書被成下、此時分次郎兵衛忠光事ハ船造奉行

として河内ニ在勤、弥太右衛門忠増儀ハ行歩不自由ニ

て、以使者祝共申遣、何も無矣儀不及心遣旨被仰下、

同廿八日、栗野城ニ御着城、同九月十日、琴月様又朝

鮮より忠元江御書被成下、長々在京老躰辛勞可爲窮屈、

御國移替ニ付、貫明様 松齡様御心遣御遠察被爲在

候処、宜折柄 松齡様御下向之由、御祝着思召旨被仰

下、同十月、貫明様ニも御暇被爲賜、京都御立ニ而

御下國、忠元儀者御跡江在京本之通被仰付、同廿六日、

琴月様朝鮮より忠元江御書被成下、貫明様御下國御

祝着被思召趣、且右ニ付忠元在京可爲辛勞、何篇入念

御置目等弥稠敷申付儀肝要思召、自然緩之儀共於有之
者可爲曲事、彼表者不及心遣旨被仰付、御留守詰ニ在

京爲仕由、左候而此月 貫明様鹿兒嶋より富隈江御城

普請ニ而被爲移、鹿兒嶋者其時不被爲入候得共、琴

月様江御讓被遊、松齡様者栗野より帖佐江被爲移、

此儀早竟幸侃より太閤江申上、石田三成と致談合、奉

始 御三殿様、御一家衆・一所持衆其外地頭抔諸士小

身ニ至迄、御國一統移替被仰付、殊ニ何れも本領之知

行より令減少、幸侃其身ハ庄内都城ニ罷移、太閤御

朱印を以高八萬斛致拜領、振威勢爲申由、其節忠元ニ

者清敷地頭職被仰付、折柄在京仕居候付、嫡孫次郎兵

衛忠光大口より罷移、大口ニ者御城代として町田出羽

入道存松被召移、左候而清敷ハ少人衆ニ付忠元奉願趣

有之、山崎土肝付隼人兼里并子右助兼政、其外大村・

中津野・長野三ヶ所之人衆爲被召移由、同十一月廿四

日、琴月様朝鮮より忠元江御書被成下、來春輿入被仰出、御國元御仕置速々御治定無之付、御軍役可被爲

調程合御氣遣被思召上、旁爲御談合嶋津圖書頭忠長・

鎌田出雲守政近ニ歸朝被仰付候間、細事口達承之、御

留守居別而入念可相勤儀、御頼思召外無他事、且忠元

進退之儀茂委細忠長江被仰含候間、定而可然様可相成

趣被仰下、同十二月廿一日、松齡様帖佐より御發駕

にて、御上洛爲被遊由御座候、

一同五申十一月廿七日正月十三日、松齡様大坂御着、其

比忠元ニも在洛仕居候、同二月九日、琴月様朝鮮よ

り新春之御慶書忠元江被成下、遠方ニ而御音信稀ニ有

之、不断御想像(た)被遊御事計候間、貫明様御機嫌等節

々被聞召度便宜委可申上、洛中春景御羨思召、彼地邊

鄙可奉察旨被仰下、同三月、太閤忠元江御暇被下、

此度在洛中、忠元隙々ニ者近衛龍山様江參殿仕、歌道

之御講說拜聞仕候付、内々奉願趣爲有之由候処、伊勢

江庵取成にて、詠歌大概抄と申御書物御深秘被成置、

御窓外江未被爲出御本ニ候得共、忠元執心之者ニ候間、

写方御許被遊旨被仰聞せ、難有書写、此月七日終筆爲

仕由、左候而同十一日、御庭前糸櫻盛ニ付、御前江被

召寄せ、終日御酒宴、其節忠元歸國仕候由被聞召上、

御詠歌拜領被仰付、

せめてさはこの春はかりいとさくらたひたつ人を引

もとめはや

右ニ付、忠元頓作にて、御當座ニ御返歌爲仕由、

いく春もかけてやにほふいと櫻君かよへひに華もひ

かれて

自其忠元京都罷立、御國江罷下、地頭所清色ニ差入尾

迫と申所江新宅相構爲罷居由、嫡孫忠光事ハ此年爲人

質又々罷登在京爲仕由、同五月二日、琴月様朝鮮よ

り忠元江御書被成下、今度御國諸士改易知行支配等之

首尾不審之至、忠元も不顧自己之安危、累年奉公爲仕

忠節無比類事候間、貫明様 松齡様御談合も被爲在、

宜被加御意、若於無之儀者、御兩殿様江御申調、進

退可然様御取持可被下御賢慮被爲在候間、心安奉存、

可抽忠貞旨難有御證判被成下、同七月、近衛信輔公

御歸洛ニ付、貫明様庄内都城迄被爲送、御歌會被爲

催、忠元も被召加、詠松蔭新涼和歌一首爲詠置、

沙弥爲舟

すミよしや西に秋風松吹ハ涼しさよするおきつ白波
同年九月、松齡様再朝鮮御渡海被爲蒙仰、同十二日、
太閤御目見、寒天ニハ御老躰御太儀被思召上候間、先
人衆被遣置、來春可有御渡海旨、御懇之上意等被爲蒙、
同廿三日、大坂御出船、十月十日、濱市御着、自其帖
佐江御歸城爲被遊由御座候、

義久公	慶長二年 自正月
義弘公	至五月
家久公	
後 編 舊記雜錄 卷三十八	

167 「御文庫四拾八番箱中義久公」〔義弘公御譜中ニ在リ〕

新春之御吉慶幸甚々、猶更不可有休期候、仍旧冬上井甚五郎當年旅庵兩便之書面具令披見候、僞者赤國御成敗之事、當年者被差延之由候、然處分國中之人衆并兵具等之儀、連々石田治少老へ致談合可申付之間、可御心安候、次者歲暮之爲祝儀縮三端送預候、祝着之至候、從此方茂乍輕塵扇子五本并替物之縮三端進入候、謀表嘉悦計候、佳事、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年款〕正月十五日
〔義弘〕
兵庫頭殿

〔義久〕
龍伯〔花押〕

168 「義弘公御譜中」

慶長二年丁酉正月、行長在肥後催航海之事、秀吉之所命者雖以二月爲出陣之期、而行長憂秀吉之沛怒故如此、清正亦恐行長先著祖生之鞭、依是先諸將而渡海焉、

169 「正文在文庫」〔卷本〕

其表長々在番辛勞不被及是非候、仍小袖二被下候、猶毛利豊前守・平野新八可申候也、

〔朱カキ〕
〔慶長二年款〕正月十六日
○〔御朱印〕
羽柴薩广侍從とのへ

「義弘公御譜中ニ在リ」

170 「御文庫四拾八番箱義久公卷中」〔家久公御譜中ニ在リ〕

追而申候、

一旧冬已來高麗立衆之儀申付候處、舟津へハ着揃候へ共順風無之故、渡海遅引咲止ニ候、併稠敷申付候間、定追々着津可仕候事、

一圖書頭歸朝候間、彼是談合にて候、然者加増支配之儀早々可仕之由京都へ承候間、義弘へ致談合申付候処、其元より之心付も致卒隊候事、

一鹿兒嶋支配之儀、加増なと被下ましき様成者へも被遣候、不可然之由申散候、殊ニ其方も割付之外にも加増有之由取沙汰申候、笑止ニ候事、

一軍役始末之儀ニ付、惣支配可被改之由出合候つれ共、浮地帳なと然と不究之故、此節者難成由候、去年之割付恣ニいたしたる在所計仕なをすへき由候、

一日置之中原坊今ハかこしま之寶泉坊へ罷移候、今度其元へ可參由申候へ共、爲祈禱大嶺入之儀申付候、爲心得候、

一爲歳暮之祝詞、巻物一ツ上井仲五持參申候、喜悅之至候事、

一我等年内之上洛ニ相定候處ニ、當國軍役始末之談合ニ付、義弘抑留故于今在國候、併急度出國たるへく候、已來者每篇京都之ことく可承候、爲御心得候、恐と謹言、

〔朱力字〕
 慶長二年正月十九日
 (家久)
 又八郎殿

竜伯(花押)

〔御文庫ニ番箱家久公七巻中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶以憚千万之申事ニ候へ共、御配分御國之御置目之

儀者、義久・義弘へ深重被仰談尤ニ存候、但不可過御分別候、御分國与申なから、乍勿論 上様御置目聊以無相違様ニ、諸事御分別尤ニ存候、以上、

御貴札拜見、本望之至候、如御意遠方故近日者御左右不承、無御心元存候處、其表替儀無御座由珍重ニ存候、然者御國元之事、高麗へ初而義弘様御出陣刻御無人、其上召船さへ無之、殊歴との衆御供も不被申被失御面目、御立御存知之前ニ候、殊更御陣之御留守ニ知行配當、取と恣之儀共猥敷仕立悉無正儀事、是又無其隠候、然處御軍役諸事公儀之御調も不罷成ニ付而、其趣 上様被聞召付、

御國御檢地被 仰付、役なしニ拾万石義久、同拾万石者義弘、其外北郷右馬頭并幸侃知行之御支配迄も、 上様御直ニ被 仰出候、以其上諸侍持留者替地被遣、又浮地此段者拾貳万石餘被引退、此浮地之内を以四万も五万も加増ニ成共、又者新座ニ人を拘候共、義久・同義弘分別次第、殘而七八万在之浮地分、家來之者奉公忠節次第可遣由申候者、悉いさミをなし役奉公忠儀を可仕候、此置目無相違様ニと被 仰出候旨、以來御家中加増之儀、治部少ニ度と御内談雖被成候、御國之儀一度秋配分候て支配ニ以外出入候間、治部少も惣別配分者仕直難成題目ニ

心へ、助言申段斟酌申候、義久・義弘も 上様重々被入

御念、御置目被 仰出候ニ付大事ニ思召、于今御支配配
移候、然處於高麗員數を被定御配當候て、則圖書頭・鎌
出被差上由候、爲我等治部少ニ難申聞候、すくニ三成へ
被仰尤存候、可得御意候、恐惶々、

〔朱力キ〕

〔慶長二年〕

正月廿日

安宅三河守

秀安(花押)

嶋又八郎様

参貴報

172

〔圖書頭忠長譜中〕

慶長元年丙申十二月、日本諸將相議欲攻南原城之際、

忠恒主謂忠長曰、患我兵之不多、汝速歸日本催軍衆來、

應諾以不日解纜、歸我之國既催士卒、翌年丁酉携息男又

五郎忠倍、而引率軍衆、二月再到朝鮮見于忠恒主、而後

當破軍艦於唐嶋之時進于此矣、其後赴全羅道・忠清道、

日本諸將悉以環南原城、八月十五夜陷之、于時忠倍斬獲

強敵矣、

173

〔朝鮮日記〕

一慶長二年丁酉二月上旬ニ、羽柴兵庫入道惟新公朝鮮

國へ爲御渡海、酉刻帖佐被成御立、其夜蒲生ニ御一宿ニ

而候、然ハ其日は晴天ニ而候処ニ、御立被遊候刻雨降、

御供衆皆々被爲濡、頓テ亦晴天ニ罷成候、其刻老躰之

衆物語ニ、御門出ニ如此雨降候事者、自昔御吉例之由

被申候、其外野原ニ狐火共相見得申候、何茂不思儀ニ

沙汰申候、義弘様御供之衆新納弥太右衛門殿・川上

四郎兵衛殿・同姓久右衛門殿・加治木萩原寺・大田吉

兵衛殿・新納勘解由殿・桂民部少輔殿・敷根三十郎殿

・久木山仁兵衛殿・押川六兵衛殿・大脇弥五右衛門殿

・木村平太夫殿・是枝半左衛門殿・花堂佐左衛門殿・

伊尻半兵衛殿・大山三次殿・上床藤右衛門殿・白坂七

右衛門殿・瀬戸口弥七殿・財部傳内殿・平山對馬介殿

・赤崎銀右衛門殿・宇都宮神兵衛殿・古川全兵衛殿・

矢野主膳殿・菱刈源兵衛殿・白坂式部殿・法元太郎左

衛門殿・白坂助六殿・野添善兵衛殿・南郷淡路殿・鎌

田勝右衛門殿・白尾孫九郎殿・新穂主馬殿・中馬與市

殿・市來源介殿・米良千介殿・福永久左衛門殿・丸目

五右衛門殿・鳥丸六右衛門殿・長田筑後殿・木佐貫四

郎左衛門殿・亀沢神右衛門殿・川上助左衛門殿・蘭田

縫殿殿・谷山爲右衛門殿・久木山龍兵衛殿・鍋倉小左

衛門殿・有馬勝右衛門殿・厚地彦右衛門殿・子息彦三郎殿・池田平四郎殿・内倉九郎左衛門殿・野添慶育坊・本田兵右衛門殿・寺原早助殿・牧田助之丞殿・西神十郎殿・黒江九左衛門殿・中野勘兵衛殿・坂本番左衛門殿・前田孫兵衛殿・鹿野屋宍岐殿・岩松玄蕃殿・有馬安右衛門殿・黒木甚左衛門殿、人數上下三百餘人茂御坐候半与存候、外ニハ餘多可有御坐候得共覺不申候、一次日 義弘様蒲生御立被成、入來江御着ニ而候、亦次日入來御立被成、隈之城江御着ニ而、爰元へ十日餘御滞留ニ而候、其内ニ平佐之北郷佐左衛門殿所江一日被成 御成候、又鹿兒嶋より種子島左近將監殿・花山權左衛門殿、其外御供衆餘多參着ニ而候、其後向田より御出船ニ而、久見崎江御下被遊候、御坐船者拾一端帆、御船頭者東太郎左衛門、早船之御船頭者関備後、惣御船數十一二艘茂御坐候半与存候、久見崎へ十日餘御滞留候内ニ、高江山ニ而御狩共被遊候、其後久見崎御出船ニ而、天草之内佐志之津ニ被成御着、爰元江一兩日御滞留被遊候、其後佐志之津より柁嶋江被成御渡、柁嶋より平戸江御着ニ而、平戸ノ宍岐之風元江被成御着、爰許江順風無之、數日御滞留ニ而候、其後從風元海上

四十八里被成御渡海、對馬之内桑振小浦与申所江被成御着、小浦ノ又灘二十里被成御渡、同對馬之内飛崎与申所へ御着ニ而、此津ニ茂五日御滞留被遊候、其後飛崎より海上四十八里被成御渡、其日者申ノ刻、高麗之内普山堺ニ被成御着津候、此所江軍大將備前中納言殿被成御坐候間御對面、其日頓而夜船ニ被召、翌日之未之刻ニ加徳之嶋薩摩之御陣ニ被成御着候、比者四月ニ而御坐候、

174

〔(號紙) 大重平六覺書ト題スヘシ〕

〔外題〕高麗入并関ヶ原頭書覚

一慶長二年丁酉二月上旬、義弘公帖佐ノ御打立、高麗國江被成御渡海也、

一高麗赤國之内泗川与申所御城取御座候、泗川より五里奥ニ普州与申所ニ、江南人式拾万餘陣取て罷居候事、一泗川より宍里奥ニ古館与申所ニ、此方人數三百程召置被成候事、

一慶長三年戊戌九月廿七日、普州ノ江南人かけ申、古館之人數餘多戰死被成候、殘ル人數泗川之城ニ追入、御城口迄江南人餘多參候事、

一 義弘公直ニ御下知被遊候者、今日耆人茂城ヲ罷出、鉄炮打申間敷与御意被成候、左候得者江南人茂普州之様引陣仕候事、

一 慶長三年九月廿八日ニ、普州より黒房与申者使者ニ參候而申上候者、昨日者若者共氣任仕、御方之人數過分損申候、同十月朔日、泗川御城ニかならず人數寄可申候、其御用意可被成与申來候事、

一 慶長三年十月朔日、江南人式拾萬餘泗川御城ニ押寄申候而、掛樋和泉守石之陣所ニ罷居候、左候而御城左右之口押寄申候、其時 義弘公御城外廻り式邊御廻り被成候而御下知被遊候者、今日鉄炮尅挺打申間敷与御意被成候事、

一 大手之矢藏ニ 御兩殿様其外餘多御上り被成、寄來ル敵を御覽被成候得共、城元ニ參ル人數如何程与茂不相知候、籠門之南之矢藏より鉄炮尅挺打被申候事、

一 大勢之中ニゑんせうに火入候而、物之色ちも見得不申候、其時御城より切出被成、敵走るを追而泗川之川を追渡し、大將ニ追掛候得者大將差こたへられ、此方之人數足クニ罷成候所ニ、島津圖書頭殿・伊集院抱雪老手勢にて切被崩候、其節 又八郎様より御使御座候得

共、御意趣不聞召分候而、川上掃部介を以、只今之御使如何様成御意趣ニ而御座候哉可承候、御意趣者、敵茂大勢ニて大將差こたへ、此方之人數足クニ御座候也、如何可有御座候哉与、御意ニて御座候事、

一 義弘公より菱刈源兵衛ニ御意被成候者、西之塩入之敵大勢者横入之跡見得候、如何可有之哉与被仰候、源兵衛之申上候者、如御意ニ而御座候、日本之軍ニ而御座候ハ、横入可仕候得共、大國之人者存申間敷候之間、横入仕間敷候、并大將茂頼而崩レ可申与被申上候處、圖書頭・抱雪何れ茂御はたらき被成、則切崩方クニ追打被成候事、

一 古館之前ニ川有、其川石橋ニて御座候、大勢川ニ追入川を間に置こたへ戦ふ、其時本田右馬頭手を負被申候、川上四郎兵衛・同休右衛門兄弟之手勢ニ而切崩被成候、夫よりたまらず崩申候事、

一 普州之坂与申坂有、其坂之平中程より西之方ニ走行敵、又八郎様御馬を掛付、馬之上より弓ニ而射落シ被成、頼而御馬之上より御腰ノ物をぬぎ、則御討被成候、義弘公坂之下より御覽被成、扱茂早き御仕合与御意被遊候事、

一慶長三年十月朔日ニ、義弘公御打被成候敵三人、

又八郎様御打被成候敵七人、夫より御城之様ニ御歸宅被成候、城近所ニ平原御座候、其原ニ而義弘公御軍配被遊候、義弘公御打被成候首壹ツ、又八郎様御打被成候首貳ツ、合首三ツ御軍配被遊候、又八郎様者東向にしやうきニ御腰を御掛被成候而被成御座候、其時川上四郎兵衛被申上候者、士之左扇子与ハ今日之事ニ而御座候、左扇子を御遣可被成与被申上候得者、御腰より扇子を召出御遣被成候事、

一義弘公より菱刈源兵衛ニ御意被成候者、今朝塩入之敵之様子御尋被成候處、横入者仕間敷之由申候、頼而大將茂崩可申候条、御念遣有間鋪与申候欵、何与見及て申候哉与御意ニ而御座候處、源兵衛被申上候者、如御意大將こたへ申候而茂、足々之者崩掛り候得者、こたへんものと存候而申上候、義弘公被遊御意候者、弓箭ハ我共か功者と思召候處、源兵衛ハ我共よりハ功者ニ而候半与御意被成、頼而御城ニ引入被成候事、
一慶長三年十月朔日ニ、帖佐衆中瀬戸口弥七老人戦死被仕候、并稻荷敵陳ニ走入候而、半弓之矢ニ當り候而死申候、御城之北方之岡ニ取置せ被成候事、

一慶長三年十月二日より城中之人數江被仰付、切捨候首

三日ニ御取せ被成候、大方大手之口ニ集ル首數三萬八千七百十七、其外之打捨之首ハ數不知候、頼而大手之口ニ首塚三拾五間方御筑せ被成候而、松を植被爲置候事、

一其以後江南方より御無事之様子被申上候而、御無事罷成候、人質茂^{モトヲ}宇路宇歴之弟ういひん与申唐人質ニ被差上候事、

一慶長三年十一月十五日ニ泗川より御出船被成、ちやくせん嶋ニ御掛被成候而、三日被遊御滞留候事、

一小西攝津守・大村新八郎・五嶋孫右衛門・有馬修理大夫・松浦刑部卿、城順天与申所ニ御座候、番船取扱候故、除方不罷成ニ付、此方より番船切崩し被成、小西殿をくりのけ可被成与御意被成、同十一月十八日、番船ニ御掛被成候之處ニ御仕合悪敷、此方之人數餘多戦死被申候事、

一義弘公御馬驗敵船よりうはひ取申候處ニ、御供船より鹿兒嶋衆黒田宅右衛門敵船ニ切乗り、御馬驗を取返シ被差上候事、

一慶長三年十一月十八日之晚ニ、唐嶋之様ニ御退被成候、

同十九日之朝、唐嶋之小瀬戸ニ御掛被成候事、

一樺山權左衛門・同名太郎三郎、其外ニ茂乘衆餘多御座候、其船を着船嶋ニ追上申候而、船者敵より掛取申ニ付、其人數除方不罷成之處ニ、小船壹艘見出シ其船ニ乗、十一月十九日之九ツ時分ニ、漸 御兩殿様之御前ニ被參候事、

一慶長三年十一月廿日之朝、唐嶋を御出船被成、對馬江御渡被成、夫より壹岐之嶋に御渡被成候而、軍衆皆々御暇給候而歸朝仕候事、

一殿様御兩殿者、直ニ京都之様ニ御上洛被遊、左候而同十二月廿九日ニ、伏見ニ御着被成候事、

一江南人質京都江御同心被成候得共、頓而御暇給候而、薩摩之様ニ被罷下候、則江南之様ニ送届被成候、坊之津船頭鳥原喜右衛門与申者ニ被仰付、江南ニ被送届候事、

一今度朝鮮國之軍御打勝ニ付、爲御褒美 義弘公江正宗之刀、 忠恒主被任少將長光之刀御給、其上薩隅二州之内御藏入給人分有次第御給被成候事、

*慶長五年ニ石田治部少輔殿野心之起、^{〔本ノマ、〕}西大名をからくり廻、其後嶋津殿御同心之由被申候得共、 家康公江

別而被 仰合候之條、御同心罷成間敷与御返事被成候、

夫より伏見御城ニ籠、御味方可被成之由被仰候得共、御城主取鳥井彦右衛門殿・内藤弥次右衛門殿より嶋津殿を城ニ入申事罷成間敷之由被仰ニ付、於其儀者不及是非、平地ニ而御味方者罷成間敷与御意被成、井尻弥五介江被仰付、江戸江右之通御狀を以被仰上候處ニ、

家康公御返事之御狀を申受被罷登ニ、近江之水口ニ而石田殿衆よりとかめられ、御狀を捨御判計取留被申候處、頓而籠者^{〔本ノマ、〕}をさせられ候得共、色々^{〔本ノマ、〕}慥シ籠より出被申候而、伏見ニ被罷登候得共、御返事之様子不知候事、

一慶長五年七月十九日^{〔本ノマ、〕}ニ、 義弘公石田之催ニ加り、伏見之城を御責被成候處、無程城茂同八月朔日ニ落申候、

夫より頓而美濃之様ニ御下り被成候而、大垣より壹里奥ニ須之侯与申所御陳取御座候、其間ニ大川有、ろくの渡りと申て船渡りなり、其渡瀬ニ石田殿・小西殿大垣之城より御出合被成御談合御座候處ニ、内府方之衆美濃國きふ之城を責落シ、直ニ其人數ろくの渡りニ押寄候、此方之人數者須之侯江皆々召置被成候、御供衆入來院又六・川上休右衛門・新納弥次右衛門・喜入攝津守、其外ニ士十人計ニて御座候、其時石田殿被仰候

『枕山紹劍日記』

一慶長二年丁酉、本朝ニ者去年爲崩屋形ニ取立沙汰ニ而無隙間、高麗ヘハ國中江打入陳を張、如此之処ニ云々、

尚以旧冬治部渡海之刻、革式枚到來候、懇志之段祝着之至候、以上、

(*) *部分ハ一四〇五号記録ノ一部ト同文ナラン*

者、稠敷御座候程ニ、先ニ御除可被成与被仰候得共、人數を皆ニ須之俣召置候、彼人數者人茂不殘くり除不申候ハ、我等除事罷成間敷与御意被成候、然處ニ石田殿みれん被成候而、大垣之ことく被爲引候を、新納弥太右衛門・川上休右衛門石田殿之馬之口をとり、兵庫頭爰元ニ相はまられ候、御みれん被成間敷与被申候得共、馬之口を引たて大垣之様ニ箆被成候、然處木脇久作馬に乗、長刀を持ろくの渡リニ掛入、薩摩之今弁慶与名乗り掛渡シ、御前ニ被參候、被遊御意候者久作馬を乗入參を御覽被遊候而、千騎之きほひと御意被成候、夫より須之俣之人數茂不殘除取申候而、大垣之城ニ御箆被成候、其晩ニ家康公者赤坂に御陳被成候事、

『嶋津家文書』

高麗渡ニ付条ニ事但手火箭 百ちやうノ仕立

一こゝろさしにて可被參人ハ、其心さしのほと身ニかへ可申上候事、

一御めにかゝらさる人ハ御目にかへ申候、「本、マ、」後日歸朝之時御扶持を申遣へき事、

一爲何とかある人なりとも令同道候て、御めにかへく候事、もしならぬ事候ハ、永代我等同心たるへく候事、

一火箭持候て可被參人ハ、向後其首尾一途可申立事、
一御歸朝之時一途御扶持を可申遣事、

改年之御慶多幸不易、不可有盡期候、仍此度爲使新納狩野介・波多彦兵衛尉令渡海候、就其申越候条具被聞届、何篇入魂可爲肝要候、巨細之段者右之兩人可申達候、恐ニ謹言、

〔慶長二款〕
正月廿八日 義弘(花押)

伊集院久也下野入道殿

(撰録)
一文祿四年未五月御打立、六月大坂へ御着、翌五年九月再御渡海之命アリ、翌西二月廿一日帖佐御打立、朝鮮へ赴玉と、然ハ文祿五年款

一御扶持なく候ハ、我等知行を立衆合中ニ可遣事、
一いつれもぎりをおもふ人にをいては、身にかへ可得御
意候事、

右条と偽申ニをいてハ、諸軍神之御爵をかふむるハ
く也、仍如件、

上井仲五(花押)

高麗立衆中

まいる

178 「御文庫拾七番箱十三卷中」家久公御譜中ニ在リ

從 又八様御書被成下候、具ニ奉拜見候、高麗奥へ就御
出張、軍衆渡海之儀無御由断候、依此義 武庫様御下向
を以被成御肝煎候、舊冬已來軍衆或者なこや或者國中舟
本迄被着寄候へ共、一圓順風無之故、渡海遅々笑止候、
過半國かたぎに延引之人衆も候、可有御高察候、將又御
返上米之儀、最前ハ京都之ことく銀子を員數ニあはせ可
上せ由承候、其後名子屋へ可被付由 御意にて候、又其
後高麗へこぎ渡候へと御左右にて候、三段ニ相違候之条、
爰許御取紛御推量之前ニ候、然共長壽院ニ被仰付、御返
上米并高麗置兵糧、右兩条長壽肝煎にて候条、可相問候、

如此御藏入之儀もわり付ニ罷成候之条、不及是非候、殊
更拙子夫婦共ニ可致上洛旨、京都が被仰付候間、俄ニ上
京之用意仕候、必二月中ニ參着候へと御墨付被下候之条、
今月十三日在所相立申候、已來在伏見たるへき由被仰付
候、俄之儀候条手前取亂不及申候、 宰相殿御事も二月
中ニ御上着之由、京都が御誕にて候、旁爰元取紛無申及
候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長二年」

二月六日

伊右入

幸侃(花押)

伊勢弥九郎殿

179 「御文庫二番箱家久公七卷中」家久公御譜中ニ在リ

已上

態申入候、今日申刻番船罷出、牧嶋ニ相懸候、いか様之
行ニ罷出候儀も未存候、相替儀候者自是可申入候、恐々
謹言、

「朱カキ」

「慶長二年」

二月十日

小攝津

行長(花押)

寺志

正成(花押)

嶋津又八郎殿
御陣所

「二番箱家久公七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御札致拜見候、今晚此表番船罷越、牧嶋ニ相懸鉢ニ候、如何様なる行ニ罷出候之儀も未見分不申候、相替儀御座候者、不寄夜中如可申入候、先刻自是も以書狀申入候、定而參着可申候、其表堅被仰付候之由尤ニ存候、恐惶謹言、

「朱力半」
「慶長二年」

二月十日

小攝津

行長(花押)

嶋又八様
御報

「御文庫二番箱二義弘公」
「義弘公御譜中正文在巻本トアリ」

爲其表御見廻、被成 御朱印候、并呉服被遣候、誠長ニ御苦勞不被及是非旨候、來年御人數渡海被仰付、赤國御動丈夫ニ可被仰付旨候、其様鉢寺澤志ノ守ニ被 仰合候、將又此方御用之儀可蒙仰候、遠路故無音迄候、猶毛利豊音前守・平野新八可被申候条、不能巨細候、恐惶謹言、

「朱力半」

「慶長二年秋(文曆四年)」

二月十日

長束大藏太輔

正家(花押)

羽柴薩ノ侍從様

人々御中

「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中ニ在リ」

此狀相認候処、昨日釜山浦へ遣候使只今參候、釜山浦へハ今朝番船をしよせ、たかひにてつほう取合にて候つる由申來候、定此ちん手ほそく候間とりかけ可申と相待申候、今度之番船ハ百餘艘ほとにて候、

から嶋へ數百艘在之由候、跡より大勢可參候間、早々日本衆引取申候ハ、とをし可申なと申候間、一行可仕儀治定候、手前之儀由断を存ましく候、來月治定御渡海にて候ハ、時分相計候て、むかひ船進上可申候間、うか／＼と御渡海あるましく候、乍重言少成共御在國候て可被仰調候、不可有御油断候、

急度申上候、仍昨日十日未明ニ番船浮出、あんかうら湊口へをしよせ申候間、いかやうなる子細にて候やと存候處、何たる行も無之、又かたくをしむけ候て一二艘まぢかく參候て、此表手きれにて候間、早々如日本引取候へ、不然者近日大勢を可相向之由申、やかて如釜山浦之罷通候、追付小攝・寺志へも使を進候、右御兩所よりも今日預使候、釜山浦へも昨日船共ごさまはり、懸而かたかひ椎の木嶋へ相かゝり、しかと罷居候、釜山への通用も此中のやうニ海路ハ不罷成、竹嶋迄船にて參、それより陸

路を參候躰候、如此罷成候時者、日本との通用可相絶申候、さて、去年中兵糧之儀人數等之儀骨ニしめ申候て、追々細々ニ申越候つるニ、終ニ然々の見次も無之、就中此比其元へ到來うち絶申候、此方兵糧之儀、圖書頭存候やうニ漸年内をかきりたる儀ニ候つるを、色々候て只今迄相續申候、從是後之儀可仕やう無之候間、飢ニのそミ可申迄候、定御下國以後可被入御精儀奉察候へ共、御國之すかた中、かゝらぬ躰ニて候由承とをり候間、とても御家相續ましき儀ふか、存候入候間、圖書頭・鎌田出雲守歸朝させ申候て、存分共申上候つる、連々如申候ニ罷成、諸事不相調此方へ人數兵糧以下も不參、はや手つまりニ罷成候、此方之儀者縦相果申候共不及是非候、後々御家何と可罷成候哉、無曲次第不可有御失念候、去年御在京之うちも幾たひも人數兵糧之儀申越候処、何角候て無見次、此方捨もちにて候事、中々書中ニ可申様無御座候、先日如申上候、人數渡海之船以下其外つもり等之儀、或出物或自力にて相調可罷立など候て、事延ニ可罷成と申候つる、さやうの段も取ニ沙汰共候へんとすると存候、數年之在陣在旅、又へ度々の出錢出米ニ、諸人つかればたと聞申候間、縦理之御沙汰ニ候共自

分之調にてハとても急ニハ罷成ましく候、然時者こゝもとはずニもあひ申ましく候而、可爲笑止旨細々申候、大形申あて候かと存候、年の明暮ニ方々の船切々參候へ共、薩厂よりの船ハ一艘も不參候、定此比中途迄ハ人數も參候へん哉、さやうニ候とも、當時者番船わたり口へ在之事候間、從日本之船とも輒渡海可難成候、から嶋之儀も此比番船行まいり、普請具取なと罷居候をも追立候而、皆々逃去躰候、此方よりも普請具取ニ少々遣候者不參候間、むかひ船共遣候へとも、未到來無之候、此中從日本之船共釜山浦表のりは、づし候船へ、大略から嶋へとり付候つるニ、彼嶋も右ニ如申候間、此間之やうニハ罷成ましく候、御自身御渡海も三月たるへきよし、兼日被仰聞候、自然其御はずにと思召、ふた、と御渡海候ても、兵糧之御用意・人數等之儀不被仰調候へ、結句御外聞いかゝにて候する間、一月二月之儀者石治少へ被仰延候ても、御在國候て可罷成ほと被仰調候て、御渡海尤ニ奉存候、此方之儀者乍若輩無越度様ニ可申付候、何事も、兵糧無之候間不及力候、とかく、此陣之躰氣遣千萬候、若敵猛勢取より行ニ及候する時者、あまりの無人ニて候間、了簡御座あるましく候、又人數かさなり候ても兵糧

之調儀無之候ハ、結句手つまりニ罷成候、如此之躰
ニ罷成候時者、不入申事ニて候へ共、あまり無念さニ申
事候、猶相替儀候へ、追々可申上候、此船も番船近所ニ
罷居候間、夜ニまきれ候ていたさせ申候間、不具候、誠
惶敬白、

〔朱カキ〕
〔慶長二年秋〕

二月十一日

又八郎

忠恒(花押)

進上 武庫様

〔義弘〕

〔家久公御譜中〕「圖書頭忠長譜中ニ在リ」

〔正文有之〕

猶以本治兵殿正月十一日ニ着津候、其後一艘も不參
候、爲御存候、如此人先ニ御外聞惡候する事を被思

食寄、若殿様數ケ度雖被仰越候、終ニ御せうゐん

なく、爰元御氣遣爲被成御案中ニ罷成候、笑止之至

難紙面候、次御陳所無何事候、日々の普請御人衆

別而辛勞被申候、武庫様自然御着船候者、御陳所

ニもやと候て、御縦屋普請凡事成分ニ候、

遙久敷申隔候、御歸朝已來一圓無到來候、海上不輒故与
存候へ共、從日本他陳へ船之往還細々之事ニ候、此地兵

粮払底之事者御存之御前ニ候、然処ニ頃番船浮出候、唐
嶋を切當嶋之自用なと罷成躰ニ候、然者去拾日ニ百
艘計安骨浦爰元へ押寄候へ共、無指事候、子細者手切に
て者無之候、釜山浦へ可申理儀候之と申、如彼表之差通
候、早竟諸陳爲可見究欵与令存候、唐人と者乍申人衆を
催於致一手立者、當陳之御悟護之通難及候、人衆兵粮無
御座、從諸陳前ニ御國御外聞を可被失事口惜次第候、千
言万言今更不入申事ニ候、只御國元之御扱上下在陳衆奉
恨外無他候、余者期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

二月十二日

伊下入

抱節(花押)

圖書頭殿

參人々御中

〔御文庫拾七番箱十三卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

猶々切々可申入候処、不存便宜御無沙汰迷惑仕候、

改年之御吉兆漸雖申舊候、猶以不可有休期候、其表御無

事之由珎重奉存候、内々此比者可被成御歸朝与奉待候処、

武庫様被成御渡海候儀不及是非候、乍去被成一行候ハ、

可被納御人數由候条、御歸陣不可有程候、先々去年者爰

元珎のろ一桶被下候、誠々遠路被思召寄、過分忝候、其

以後具ニ申越候、定相届可申候、於此方御用等之儀者可

被仰聞候、此等之趣可然様可有御取成候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長三年二月十六日〕
〔伊勢貞知〕
 如貴〔花押〕

友枕齋

〔上書〕
〔赤之頁〕
 伊勢□九郎殿

如貴

〔義弘公御譜中〕

〔在加治木新納仲左衛門忠雄〕

〔自是前欠〕

付、もし懈怠之者於在之□、則過怠普請可申付、

萬一難澁之輩あらはめい、記置、長壽・神五郎として後日可申上事、

一諸事長壽・神五郎として申付儀、不謂夜白無吳儀可相勤事、

一晝夜共於小路高雜談・高笑、其外猥成振舞にて、在高麗・在京人其外留守居之者之門にたゝすみありき候儀、并さと宿一切停止たるへし、付よこ目之者共申付置候之事、

一惣別在國之者上下共、若猥成儀於在之者、たれくたりといふ共、見立聞立、有様於申上者、褒美をなすへ

き事、

一御内御番、無懈怠可相勤事、

一毎月御内へ朔日・十五日之出仕、無懈怠有間敷事、

一女方之嗜專一たるへき事、就中人の妻をぬすみ、慮外

之振舞仕者於在之者、見立聞立、実否を糺し、長壽・

神五郎として可令討罰事、

一每座酒を過す間敷事、付酒狂仕者あらは、可爲過物之事、

一喧嘩口論停止之事、

一人の留守居ニ若用所あらは、然々使を以申達すへし、

取分若輩として、自身出入せしむる儀、一切停止たるへし、

一他所ありき停止之事、但無余儀用所あらは、長壽・甚五郎いとまをこひ候て、罷出へき事、

一火用心由断有間敷事、付自火には過物有へき事、

一八萬石藏入より、速々に屋作并門之用意可申付事、

一いつミも、或走者、或賣人、買取於拘置者、早々可相返、自今以後走者之儀者不及申、いつミよりの賣人、

一切買置間敷事、

一長壽・甚五郎食仕候者共、萬一猥成儀在之而於有私曲

者、則兩人之惡名ニなるへく候条、念を入可申付事、

一分國中[○]之者、公用之外上洛停止之事、但商賈人者此外たるへき事、

一下馬之儀、傍示之外、其沙汰有ましき事、

右条々若相背輩あらは、留守居之兩人として可致言上候、萬一傍々被聞食付候者、右兩人之越度たるへき者也、

慶長二

二月廿一日

〔高麗赤國爲御討尉御渡海、御留守居之御置目狀之留也〕

〔此新納氏藏ト池上氏之藏書ト同日同案ナレトモ、文意少々異同アリ、

昔年写し置たるあれと、参照の爲御譜中之假写し置也〕

186

『嶋津家文書』〔三番箱三卷中ニ在リ 正文私合ス〕
〔義弘公御譜中此同案正文在加治木家池上貳吉トアリ〕

掟

〔○〕藏入所務方ニ念を入可申付事、

〔○〕長壽・上井神五郎兩人之間、令純熟〔○〕も隔心之儀無

之、每物可遂熟〔○〕之事、

〔○〕諸代官もし構私曲、猥儀於在之者、爲諸百姓中、無用

捨有様可致直訴之事、

〔○〕於普請衆、無懈怠可罷出事、付もし懈怠之者あらは、

則過怠普請可申付、萬一難澁之輩於在之者、めい／＼

記置、長壽・甚五郎として可申上事、

〔○〕諸事上井甚五郎・長壽として申付儀、晝夜共無怠儀可

相勤事、

〔○〕晝夜共於小路高雜談・高笑、其外猥振舞にて、在高麗

・在京人留守居之者之門にたゝすみありき候儀、又者
さと宿停止たるへし、付よこ目之者共申付置候事、

一惣別在國之者共、貴賤都鄙猥儀於在之者、たれ／＼たりといふ共、見立聞立、有様於申上者、褒美をなすへき事、

〔○〕御内御番、無懈怠つとむへき事、

〔○〕毎月御内へ朔日・十五日之出仕、懈怠仕ましき事、

一女方之嗜肝要たるへき事、就中人の妻をぬすみ、慮外

之振舞仕者於在之者、見立聞立、実否を糾し、上井甚五郎・長壽として可令討罰事、

一參座酒を過すましき事、付酒狂仕者あらは、過物を懸

へき事、

一人の留守居にもし用所あらは、然々使を以申すへし、

取分若輩として、自身出入せしむる儀、一切停止たる

へし、

一他所ありき停止之事、但無余儀用所あらは、上井甚五

郎・長壽ニいとまをこひて、まかり出へき事、

一上井甚五郎・長壽食仕候者共、萬一猥儀在之而於構私

曲者、則兩人之緩たるへく候間、諸事念を入可申付事、

一分國中者、公用之外私之上洛停止之事、但商買人

者此外たるへき事、

一いつミ御藏入より、或走者、或賣人、買取於拘留者、

早々相返すへし、自今以後走者之儀者申にをよはす、

いつミよりの賣人、一切買取ましき事、

一火用心由断あるましき事、付自火ニハ過物あるへき事、

一下馬之儀、傍至之外、其沙汰有間敷之事、

一八萬石御藏入より、連々に作事方并門之用意、無由断

可申調事、

一一向宗之事、先祖以來御禁制之儀ニ候之条、彼宗躰に

なり候者は、曲事たるへき事、

慶長二

式月廿一日

義弘(花押)

慶長二年二月、秀吉下令曰、前陣者清正・行長、拈關

隔日而可相勤之、其不爲前鋒之日則可在二陣也、三陣者

黒田長政・毛利壹岐守・高橋九郎・秋月三郎・相良宮内

大輔・伊東民部大輔、四陣者鍋嶋加賀守及子信濃守勝茂、

五陣者島津薩摩侍從、六陣者長曾我部元親・池田伊豫守

・藤堂佐渡守高虎・中川修理大夫・加藤左馬助嘉明・菅

平右衛門、七陣者蜂須賀阿波守家政・生駒讚岐守・脇坂

中務少輔安治、八陣者備前中納言宇喜多秀家・安藝宰相

毛利秀元可勤之、釜山浦城者筑前中納言豊臣秀秋守之、

而太田小源五可掌城中之事、安骨浦城者立花左近將監宗

茂可守之、加徳城者高橋主膳正・筑紫上野介可守之、竹

島城者久留目秀包可守之、西生浦城者淺野左京大夫幸長

可守之、我今遣毛利豊後守・竹中源助・垣見和泉守・毛

利民部大輔・早川主馬首・熊谷内藏允於朝鮮、而爲監檢

也、諸將戰功之善惡強弱勿見而隱之、勿聞而隱之、雖親

族朋友、而不聳肩不妄稱糾正其事實、而可告報之、舟師

者藤堂高虎・加藤嘉明・脇坂安治監之、以四國兵可爲其

援、凡百諸軍相結盟誓勿使有相惡也、大明若出大軍去朝

鮮王城五六日程而屯營、則速可告達之、我必單騎渡海悉

平之、直進馬於明國可運於掌者也、

〔義弘公御譜中〕

〔正文在卷本〕

条々

一 先手動之儀、加藤主計頭・小西攝津守(藩志) 鬮取之上を以、

二 日かへりたるへし、但非番ハ二番めに可相備事、

一三 番め黒田甲斐守・毛利老岐守・嶋津又七郎・高橋九郎(長政)・(吉成) 秋月三郎・伊藤民部大輔・相良宮内大輔可相備事、

一四 番 鍋嶋加賀守・同信濃守(長每)

一五 番 羽柴薩广侍從(義弘)

一六 番 羽柴土佐侍從(長曾我部元徳)

藤堂佐渡守(高虎)

池田伊与守(嘉明)

加藤左馬助(通勝)

來嶋出雲守(秀成)

中川修理大夫(達長)

菅平右衛門尉(家政)

一七 番 蜂須賀阿波守(正)

生駒讚岐守(正)

脇坂(安治) 中務少輔
安藝宰相・備前中納言(毛利秀元) (宇喜多秀秀)

一八 番 此兩人どうせい、かへりたるへき事、

一 釜山浦城筑前中納言、御目付太田小源五在番仕、先手(小早川秀忠) (二忠)

之注進無由断可仕事、

一 あんごうらいの城羽柴柳川侍從在番(立花宗茂)

一 かとくの城高橋主膳・筑紫上野介在番(直次) (廣)

一 竹嶋の城羽柴久留目侍從在番(小早川秀忠)

一 せつかいの城淺野左京大夫在番(幸長)

一 先手之衆爲御目付、毛利豊後守・竹中源介・垣見和泉守・毛利民部大輔・早川主馬首・熊谷内藏丞、此六人(高忠) (長忠) (直忠)

被仰付候条、任誓紙之旨、惣様動等之儀、日記を相付

候而、善悪共ニ見隠聞隠さず、日々可令注進事、

一 諸事かうらいニての様躰、七人より御注進申上儀、正

意ニさせらるへき旨被仰聞候間、存其旨、縦縁者親類

知音たりといふ共、ひいきへんはなく、有様ニ可注進

事、

一 先手動等之儀、各以相談之上、多分ニ付而可隨其、ぬ

けかけニ一人二人として申やふり候へ、くせ事たる

へき事、

一 於何方も野陳たるへき事、

一 赤國不殘悉一篇ニ成敗申付、青國其外之儀者、可成程可相動事、

一 船手之動入候時者、藤堂佐渡守・加藤左馬助・脇坂中務少輔、兩三人申次第、四國衆菅平右衛門并諸警固舟共可相動事、

一 右動相濟上を以、仕置之城之所柄之儀、各見及、多分ニ付而城主を定、即普請等之儀、爲歸朝衆令割符丈夫ニ可申付事、

一 右七人之者共ニ七枚起請をかゝせられ、諸事有様之躰可申上旨被仰付候条、忠切之者ニハ可被加御褒美、自然背御法度族有之者、右七人申次第、不寄誰々、八幡大菩薩可被加御成敗条、得其意不可有由断事、

一 自然大明國者共、朝鮮都より五日路も六日路も大軍ニて罷出、於陣取者各令談合、無用捨可令注進、御馬廻迄ニて一騎懸ニ被成御渡海、即時被討果、大明國迄可被仰付事、案之内候条、於由断者可爲越度事、

以上

慶長貳年二月廿一日 ○「御朱印」

羽柴薩广侍従とのへ

「右同案同年同日宛書毛利孝岐守とのへ・毛利豊前守とのへトアリ、略ス」

190 『嶋津家文書』

(本文書ハ一八九号文書ト同文ニツキ省略ス)

「右同年同日同案之御朱印、嶋津又七郎とのへ有之、略ス、此条書写、御文庫廿三番箱義弘公十三卷中ニアリ、同年同月同日之同案ニ而、毛利孝岐守殿・毛利豊前守殿兩人宛之写也」

191 「又七郎豊久譜中」

慶長二年、諸將屯加徳島之際、賜全羅道和人所謂赤州也征伐條目及行伍之記於 殿下秀吉公、記左方矣、

192 「正文在島津安藝守久雄」

条々

一 先手動之儀、加藤主計頭・小西攝津守以圖取上、二日かハリたるへし云々、「外數ヶ条略」

慶長貳年二月廿一日 ○「御朱印」「續目裏判同」

嶋津又七郎とのへ

慶長式年二月廿一日



三宅なへ

壹万人

加藤主計頭(清正)

七千人

小西攝津守(行長)

千人

羽柴對馬侍從(宗義)

三千人

松浦刑部卿法印(顯應)

貳千人

有馬修理大夫(精信)

千人

大村新八郎(喜前)

七百人

五嶋太和守(純玄)

四宅なへ
合壹万四千七百八人

三番

五千人

黒田甲斐守(長政)

貳千人

毛利老岐守(吉成)

八百人

嶋津又七郎(盛久)

六百人

高橋九郎(元種)

三百人

秋月三郎(種長)

五百人

伊藤民部太輔(祐兵)

八百人

相良宮内太輔(長每)

三宅なへ
合壹万人

四番四宅なへ
壹万貳千人

鍋嶋加賀守(直茂)
同 信濃守(勝茂)

五番三々なへ
壹万人

羽柴薩广侍從
(義弘)

六番

三千人	羽柴土佐侍從 (長曾我部元親)
貳千八百人	藤堂佐渡守 (高虎)
貳千八百人	池田伊与守 (秀雄)
貳千四百人	加藤左馬助 (嘉明)
六百人	來嶋出雲守 (通聰)
千五百人	中川修理大夫 (秀成)
貳百人	菅平右衛門尉 (達長)
四々なへ 合壹万三千三百人	

七番

七千貳百人	蜂須賀阿波守 (家政)
貳千七百人	生駒讚岐守 (一匹)
千貳百人	脇坂中務少輔 (安造)
三々なへ 合壹万千百人	

五そなへ
三万人
とうせい

(毛利秀元)
安藝宰相

此兩人、先陣かへりく、

三そなへ
壹万人
とうせい

(宇喜多秀家)
備前中納言

壹万人、此内三ヶ所之城々へ見計可加勢也、

ふさんかいの城

(小早川秀秋)
筑中納言

御目付 三百九十人
太田飛驒正

あんこうらいの城

(立花宗茂)
羽柴柳川侍従

かとくの城

五百人 高橋主膳正
筑紫上野介
(直心)
(廣門)

竹嶋之城

千人 羽柴久留目侍従
(小早川秀包)

せつかいの城

三千人 浅野左京大夫
(幸長)

城々在番衆
合貳万三百九十人

惣都合拾四万千五百人

ふさんかい

いき

つしま

(廣高)
寺澤志广守

なこや

右四ヶ所ニ次船を置、毎日先手より
注進、無由断可申上也、

「此写、御文庫廿三番箱義弘公十三卷中ニアリ、写也」

「義弘公御譜中正文在卷本トアリ」

「此同案、又七郎豊久譜中ニ在リ、略ス」

〔征韓偉略〕

一二年丁酉二月

二十一日、秀吉令曰、前鋒清正・行長隔日而役、不爲先鋒日當在二陣矣、三陣黒田長政・毛利吉成・高橋元種・島津忠恒・相良長安・伊東祐兵、四陣鍋島直茂・子勝茂、五陣島津義弘、六陣長曾我部元親・池田伊豫守・藤堂高虎・中川秀成・加藤嘉明・菅達長、七陣蜂須賀家政・生駒一政・脇坂安治、八陣宇喜多秀家・毛利秀元、釜山城豊臣秀秋守之、太田小源五掌軍務、安骨浦城高橋直次・筑紫廣澄守之、竹島城久留目秀包守之、西生浦城淺野幸長守之、今遣毛利友重・竹中重治・垣見一直一作家澄、毛利高政・早川長政・熊谷直盛於朝鮮監察檢督焉、諸將戰功輕重可明白之、糺覈事實而告報、若夫舟師高虎・嘉明・安治監之、以四國兵爲援、凡諸軍爲盟誓相親睦勿相背、明或發大兵、去朝鮮王城五六日程遠報之、我單騎航海勒之直入明、征伐記・秀吉譜・古簡雜纂・黒田家記○九州記・瀋翰譜及鍋島家記曰、此役令直茂・家政・惠璋指揮軍事、是月明復議防本邦、以前都督同知麻貴爲備倭總兵官統諸軍、神宗記

〔全〕

一四月、義弘入朝鮮屯于加德、敵船來攻者三、義弘擊而退之、島津家記

196

〔義弘公御譜中〕

再爲渡楫於朝鮮國、慶長二年丁酉二月廿一日、首途於帖佐、而轡渡船待順風也、

197

〔新納旅庵譜中〕

慶長二年丁酉二月廿一日、爲朝鮮國再渡、義弘主首途於帖佐、三月廿八日、解纜於久見崎、而留滯於壹岐島之際、見成賜朱印台書、雖爲最前從兵一萬之賦、有可爲一萬五千之旨、在途中士卒俄難催、被訴此旨於京都、旅庵爲使節從壹岐島赴京師、上達義弘主旨趣於龍伯尊君・石田治部少輔殿矣、

今度龍伯尊君有使喜入大炊助命旅庵之旨曰、止朝鮮國渡楫速可歸國、其故被改經界雖曰支配、猶未足田數不審、各揃所領知田數之書、山田越前入道・長壽院無遲引可持參京都矣、且復伊集院右衛門大夫隱田及大崎封疆有口能、未一定、彼此汝歸國可屬中正也、朝鮮亦堅可達此旨、汝莫疑思、由是不得已、而所以歸國也、京都

借銀漸爲本利八百貫目、國家重事莫大於此、魔島・富隈・帖佐割付之於三方可遂弁濟、旅庵早可企上京、以故又上洛、五月廿六日、於伏見遂勘定者也、

198 「御文庫拾七番箱十三卷中」

(本文書ハ三八二号文書ト同文ニツキ省略ス)

199 「御文庫二番箱家久公三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以羽兵御着陣候者、貴所御歸朝尤候、以上、

態令啓候、其表無吳儀之由、珍重ニ候、仍從此方被指渡候諸勢、五月中旬六月上旬之間、至高麗可致着陣旨被仰出候、然者貴所長々御在陣候間、此透ニ御小性衆迄にて御歸朝尤候、左様ニ候者、直御上洛在之而、上邊御用をも被相調、其上御國御支配以後、上様へ御礼も無御申候条、御目見得候而、諸勢動前從京都御下國被成候而、國元之御用被仰付、諸勢動之刻、從御國直ニ可有御出陣候哉、但先國元へ直ニ御歸朝候而、御國も御上洛有之而、惣勢動之砌、京も直ニ可有御渡海候哉、御分別次第ニ候、猶羽兵可被仰談候、恐惶謹言、

石治少

〔朱力寺〕
慶長二年二月廿二日

嶋又八郎殿
人々御中

三成(花押)

200 「御文庫二番箱義弘公四卷中」

猶以御女房衆二月中可被上置之由、弥其分可然候、以上、

正月廿五日之御返答、二月廿二日ニ參着候て令拜見候、貴殿二月中ニ必可有御渡海之由、尤可然候、從此方被差渡諸勢之儀者、五月中旬六月上旬之間ニ、至高麗可致着陣旨被仰出候、然ニ又八郎殿長々御在陣候間、貴所御着陣次第、此透ニ又八郎殿小性衆迄にて直ニ御上洛候而、上邊御用をも被相調、其上御國御支配以來、上様へ御礼も無御申候条、御目見得在之而、諸勢動前ニ京都も御下國ニ而、國元被成御見舞、則國元も直ニ可有御渡海候欵、但先直ニ御國元へ御歸朝ニ而、從御國御上洛ニ而、京都も直ニ高麗へ可被成御出陣候哉、又八郎殿御分別次第ニ候、將又御手前御人數御役儀之員數、無相違可被召連候事專一候、必御着到可在之候間、不可有御由断候、兼日御覺語肝要ニ候、恐惶謹言、

二月廿二日

石治少

三成(花押)

羽兵様

人々御中

以上

〔御文庫二番箱義弘公四卷中〕「義弘公御譜中ニアリ」

正月廿五日之御狀、二月廿二日至伏見參着候、則三成致披露候處、貴老二月中ニ必可有御出陣旨、尤可然由被申候事、

一 從此方諸勢被差渡時分之事、來五月中旬六月上旬之間ニ、悉至高麗可致着陣旨被 仰出候、然者又八郎様永々御在陣被成候条、貴老高麗御着陣次第、又八郎様御小姓衆迄被召連、此透ニ御歸朝候て可然之由三成被申候、さ様ニ候者、直ニ御上洛候て、義久様へ御見參在之而、上邊御用をも被相調、其上 上様へ御目見へも候て可然由候、但又御國ニ御用も候者、先直ニ御歸國候て、從御國可有御上洛も御手成、又八様御分別次第之由、三成以書狀被申入候、三成狀者直ニなこやへ丸目五右へ遣申候、自然未御在國候哉、急速可有御出陣ため、此狀御國へ申入候事、

一 御内儀様二月中可被差上由、弥其分可然由被申候条々、

なこやへ之書面ニ申盡候間、不具候、猶重而可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年二月廿三日

秀安(花押) 〔安宅三河守判也末紙ニ安三トアリ〕

羽兵様

參人々御中

〔上カキ〕

義弘様

參人々御中

安三

202 『嶋津氏文書』

掟

一 京都・高麗之御公役無經可相調事、
一 諸代官もし構私曲、猥儀於有之者、爲諸百姓中、無用捨有様可致直訴事、
一 於普請衆者、無懈怠可罷出事、付もし懈怠之者於有之者、則過怠普請可申付事、萬一難澁之輩あらは、めい々しるしをき、爲其地頭可申上事、
一 諸事爲其地頭申付儀、晝夜共無吳儀可相勤事、
一 晝夜共於小路高雜談・高笑、其外猥振舞にて、在高麗・在京人以下留守居之者へ門にたゝす(之)ありき候儀、

并さと宿停止たるへし、付横目之者共申付置候事、

一惣別在國之者共、もし猥儀於有之者、たれくたりと

云共、見立聞立、有様於申上者、褒美をなすへき事、

一毎月地頭所ニ朔日・十五日之出仕、懈怠有間敷事、

一女方之嗜肝付たるへし、就中人の妻をぬすミ、慮外之

振舞仕者あらは、見立聞立、實否を糺し、爲其地頭可

令討罪事、

一每座酒を過すましき事、付酒狂仕者あらは、過物を相

懸へき事、

一人の留守居にもし用所あらは、然く使を以申へし、取

分若輩として、自身出入せしむる儀、一切停止たるへ

き事、

一他所ありき停止之事、但無餘儀用所あらは、其地頭い

とまを乞まかり出へき事、

一火用心由断有間敷事、付自火には過物有へき事、

一其地頭食仕候者、萬一猥儀有之而、於構私曲者、其地

頭緩たるへく候間、能く念を入可申付事、

一分國中^(ニ)之者、公用之外私へ上洛可爲停止、但商賣人者

此外たるへき事、

一いつミ御藏入より、或走者、或賣人、買取於抱置者、

早く可相返、自今以後走者ハ申ニおよばす、いつミよ
りの賣人、一切買取間敷事、

一當所限城之儀者、御藏入之境、又北郷領彼是出入有之

事候条、諸事念を入、每物令遠慮肝要ニ候、就中喧嘩

口論之儀、一切停止たるへき事、

一下馬之儀、傍輩之外其沙汰有間敷事、

一一向宗之儀、先祖以來御禁制之儀候之条、彼宗躰ニな

り候者者、曲事たるへき事、

慶長二

式月廿八日

義弘御判

「右於隈城指宿左近兵衛所江卅日程御逗留被遊、此御条書被仰出、高
麗へ御渡海被遊候、長井十郎左衛門右筆と申候云々」

203

「正文在高城喜左衛門」
「家久公御譜中ニ在リ」
「ナン」

今度此表兵船浮出通用難成故、他之手之船一艘も無渡海

候処、各被抛身命、被遂參陣候儀、甚深被 思召御感候、

依其忠節、知行拾石可被宛行旨被仰出候、仍狀如例、

慶長貳年二月廿九日

比志嶋紀伊守
國貞判

伊集院下野入道
抱節判

本田刑部少輔殿

204 「伊集院氏支流系圖」

忠春

九郎 助右衛門尉

205 「正文在伊集院宮内少輔」

今度此表兵船浮出通用難成故、他之手之船一艘も無渡海候處、各被拋身命、被遂參陣候儀、甚深被思召御感候、依其忠節、知行拾石可被宛行旨被仰出候、仍狀如件、

慶長貳年二月廿九日 比志嶋紀伊守 國貞(花押)

伊集院下野入道 抱節(花押)

伊集院九郎殿 (忠卷)

206 「雜抄」

今度此表兵船浮出通用難成故、他之手之船一艘も無渡海候處、各被拋身命、被遂參陣候儀、深々被思召御感候、依其忠節、知行拾石可被宛行旨被 仰出候、仍狀如件、

比志嶋紀伊守

慶長二年二月廿九日

國貞(花押)

伊集院下野入道 抱節(花押)

高城左京亮殿

「家久公御譜中、正文在高城喜左衛門トアリ」

207 『公』

今度此表兵舟浮出通用難成故、他之手之船一艘も無渡海候處、各被拋身命、被遂參陣候儀、甚深被思召御感候、依其忠節、知行拾石可被宛行旨被 仰出候、仍狀如件、

慶長二年二月廿九日 比志嶋紀伊守 國貞(花押)

伊集院下野入道 抱節(花押)

弟子丸弥八殿

「家久公御譜中ニ在リ」

「右同年同日、本田刑部少輔殿宛ノ同案有之、略ス」

「右同断、伊集院九郎忠春江茂アリ、略ス」

208 「義弘公御譜中」

慶長二年、清正發船到朝鮮入竹島壘陣于機張、即攻于梁

山逐其守將、又到西生浦周見城邊、示牌文一紙於朝鮮人
民曰、日本國加藤主計頭清正受 大閣殿下之命、今再航
于朝鮮、朝鮮人民必不疑此牌文、莫恐怖而退逃、故先遣
我臣金大夫以告焉、

行長兵船自釜山浦外進到豆毛等浦、改築釜山舊營、以筑
前中納言秀秋爲城主、又構諸城於處處爲久留之計、自是
之後日本諸將相繼渡海、

慶長二年、朝鮮見日本大軍之復至而大驚、李昭亦創往年
之敗頓、即率后妃王子奔海州、故從臣亦皆遽逃于遠境、

李昭寵臣柳承寵托運入糧粟芻藁於王城、而遁於尚州、朝
鮮將官權慄不及一戰遂于東境、朝鮮又大亂、頻告急于大
明、且聲言曰、日本軍兵百万分之爲十三列、將入大明、

秀吉亦在浪古耶、自掌諸軍之成敗、駟馬日馳郵吏足繭、
黑田長政等諸將凡十三万兵皆入朝鮮、築城於登萊・機張

・西生浦・豆毛浦・安骨浦・竹島・梁山・蔚山・加德、
而橫行於熊川・金海・昌原・咸安・晉州・固城・泗川・

昆陽之間、大明人・朝鮮人共不得往來於此中、故目中既
蔑朝鮮、然朝鮮國中以連年兵革、故米穀不甚多、諸將頗

困焉、

209

「御文庫拾七番箱十三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

永々其地御在陳御苦勞奉察候、細々書狀以成共可申上處、
且憚多存無沙汰仕候、就其 武庫樣被成御渡海候、御舟
本迄送申候、目出度頓而被成御同心御歸朝所希乞候、將
亦雖輕儀至極候、褰袋ニ入老ッ致進上候、誠表御音信迄
候、自然於京都相應之御用可被仰付候旨、御披露所仰候、
恐惶謹言、

「朱力半」慶長二年三月十一日 了齋(花押)

伊勢(貞島)弥九郎殿 參人々御中

210

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

長陳之軍勞察存候、此比者義弘渡海候之間、可爲御満足
候、然者治老少急度可有歸朝之由、被仰渡候通承候、
目出度存候、早々上京待入候、我等茂此節上着候、兼又
其表へ番船出候由申散候、無心存存事に候、爰元之儀無
別儀候、可心安候、猶期後音候、恐々謹言、

「朱力半」慶長二年三月十七日 竜伯(花押)

又八郎殿

起請文

被對京都連々毛頭無御別儀、以御天道先年高麗入之刻、
梅北逆心相企候之處、無御存之旨致顯然、御家于今日出
度候、然処今度又御渡海之上ニ 龍伯様御在京、殊ニ
忠恒様御在陣旁御留守中儀、國境被召置候之故、乍不似
一段心遣迄ニ候、萬一世上雖致傳交、御兩三殿之御下
知之外者、曾以請付間敷候、但 御家之御爲眞實於存人
ニ者可申談之事、

若右之一儀於僞申者、

▽^(年志)奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本六十余州
大小神祇、別當國鎮守新田八幡大菩薩 開門正一位 金
峯山權現 鹿兒嶋諷方大明神 霧嶋六(ヨメズ)所權現 正八
幡三所大菩薩 鵜戸權現 白鳥大權現 愛
岩山大權現 飯綱大明神 天滿大自在天神御部類眷屬等、
神爵冥爵各可罷蒙者也、仍起請文如斯、△

慶長貳年丁酉三月十七日

新納武藏入道

爲舟(花押)

川上四郎兵衛尉殿
(忠兄)

猶々川東善左衛門尉今朝爰元川内へ下着候、以上、

川東善左衛門尉京都へ下着、然者貴所歸朝之事、石治少
々直以書狀其表へ被仰渡候由、安三州へ書狀如此到來候、
則寫進之候、我等事も去月廿一日より川内へ相越在之事
候、乗船不廻候ていまニ滞留心外之至候、さり共五三日
中ニ船可廻候間、追付出船可仕候、もし我等着陣候てか
ら、其元可有出船と被思候而、歸朝延引なり候てハ笑止
ニ候、我等渡海不可有程候間、先々其元出船候而可然候、
左様ニ候ハ、對馬邊にて可致參會候、就中六月者又高
麗之様ニ可被渡之由候間、片時も急候て直可有上洛候、
龍伯様もはや御上着之由候、宰相も去十一日帖佐打立上
洛候、國元への用所者とかくさしをかれ候て、直上洛肝
要ニ存候、尚北郷宗次可被申候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長三年〕三月十八日 義弘(花押)

又八郎殿

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆城權右衛門經秀」

猶々こま／＼申たき事おほく候へ共、船元へまか

り下候間、従高麗可申候、身もし渡海之心遣よりも、

さいしやう女子さしならへぬたひの程、さらにく

自是明暮露のひまなくおもひまいせ候、【本マ、】伏見へ着候

ハ、たより次第御左右可承候、我等も可申越候、

肱枕ふうふやかて渡海仕之由、自其心得あるへく候、

將又その乗船いまたまはり候ハぬ、まへかとニ聞

合候て、ほそ嶋まで被越候て可然存候、油断有間敷

候、以上、

態申まいらせ候、仍我等事昨日乗船、爰元へ參候、しか

れハ今日きち日にて候間、乗初申候、やかてかせ次第船

いたし候する間、此よし可申ため、又々三覚防まいらせ

候、こゝよりはいよ／＼程遠くまかり成へき間、高麗よ

りこそ無何事渡海候、由可申越候、併宰相事茂又八郎殿へ

けんさん可有間、先以うれしく候へんとおもひ候間、少

は旅之心遣もかるく候する哉と、先々目出度候、くハし

くハ彼三覚防へ申含候あいた可申候、めてたくかしこ、

【朱カキ】
慶長二年三月十九日

214 「義弘御譜中」

慶長二年三月廿八日、待得順風解纜於久見崎、而留滯於

壹岐島之際、賜朱印、台書曰、雖爲從兵一萬之賦、有可

爲一万五千之旨、我已出領國在途中、士卒之催無如之何、

使旅庵訴之於京都也、

215 「義弘公御譜中」

慶長二年四月、明帝以刑玠爲經略、楊鎬爲經理、劉綎麻

貴爲南北大帥、促湖東・浙江・四川・廣東兵士、而救朝

鮮、

李貽受明帝之命爲新總督、即使左兵使成允門・防禦使權

應銖在慶州防鳥嶺之敵、使右兵使金應瑞在宜寧禦釜山之

敵、使統制師元均領舟師拒竹島・加徳之敵、

216 「御文庫二番箱家久公七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

已上

爲年頭御祝儀御使札并銀子三枚被懸御意候、遠路御懇志

畏入存候、仍去月十日至其表ニ番船雖罷出、指働無之早

々引退候由、先以可然候、乍去弥不可有御油断事專一候、

然者羽兵御着陣次第、貴殿可有御上洛通先度申入候、何

(義弘、広瀬氏)
宰相殿

よし弘

より

篇御上着候刻、積儀可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

三月廿八日

石治

三成(花押)

嶋又八様
御報

217

〔御文庫二番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

巳上

急度申入候、先度番船之儀ニ付而、各被成御注進候、其
ニ付て被成 御朱印、寺半三より被指越候、則半三使持
參被申候、將又當年之御働之御書立共、城々各へ參着候、
其元へハ定而石治少々直ニ兵庫頭殿へ御届候かと存候、
猶様子瀧七右衛門尉口上ニ申合候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

卯月八日

小攝

行長(花押)

嶋又八様
人々御中

218

〔家久公御譜中〕

〔案文在帖佐士伊地知吉右衛門〕

先日番船出申候ニ付、各御注進被仰上候、被成 御朱印
候、拜見仕候、忝之旨寺澤志广守殿迄、以愚札可申入候、

220

〔二番箱家久公七卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

猶瀧七右へ申候間不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

四月十日

嶋又八

忠恒

小攝様
御報

219

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

我等事、五日以前此方壹岐迄罷渡候、順風無之故、いま
ニ令延引候、仍拙者參陣候者、貴所事者可有歸朝之旨、
石治少より被仰下候間、先度北郷宗次郎渡海之刻、我等
不致着陣候共、貴所事先々加徳を出船候者、於對州邊致
參會可申談之由申渡候き、其後石治少々拙者着陣候てか
ハリ候へと、達而被仰下候間、我等可致參陣、其間之儀
者然与可有在番候、其上此節者 上使御渡海之由候間、
彼是遠慮候て可然候、順風次第可罷渡候条、以面可申承
候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

卯月十一日

義弘(花押)

又八郎殿

御札拜見申候、仍當年御働之儀、弥必定之由申來候、内
々其御用意尤ニ存候、自然相替到來候ハ、從是も可申
入候、其元も可預御知候、此中御見舞可申入処、普請
取紛無沙汰背本意候、与風以參可申述候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年
卯月十二日 小攝 行長(花押)

嶋又八様まいる
御返報

221 「御文庫四拾八番箱中」家久公御譜中ニ在リ

猶以石治少より、小性はかりにて可有歸朝候由、被
仰下候、其御分別肝要候、何共かとくにて可申談候
間、令省略候、

就拙者渡海之儀、態書狀并使節を被差渡候、誠満足之至
候、然者我等中途之儀、折角雖急申候、順風無之候而、
津々浦々ニ漂、漸昨日對州小浦ニ着岸候、仍貴所歸朝之
事以北郷宗次郎、我等高麗へ着船無之候共、先々歸朝可
在之候、必老岐對馬邊にて參會可申由、堅申越候、雖然
石治少早飛脚を以、於高麗可相替之由堅承候間、寔隣所
之覺与申、彼是我等分別不届儀を申越候与、後悔千万ニ
候之処、貴所書狀ニ拙者於高麗可被待之由相見、別而神

妙ニ存事候、順風候ハ、近日可罷渡候間、以面談積儀
共可申承候、余者相良甚吉可申達候条不詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年
卯月廿日 又八郎殿 義弘(花押)

222 「義弘公御譜中」

「正文在伊勢六郎左衛門貞秋」

此表御働之事相延候間、當節參陳之儀先無用候、高麗與
陣已來之窮屈、今少之間なり共、相甘候て肝要候、出陣
時分之儀者、重而可申越候条、内々無由断可令用意候、
謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年秋
卯月廿一日 義弘(花押)

伊勢弥次郎殿

223 「御文庫拾六番箱八卷中」

慶長二年卯月廿四日 御本陳御番帳

一番 次第不同

南郷覺右衛門尉 ● 村田源左衛門尉 ●

長野六兵衛尉 ●

四本伴九郎 ●

鎌田吉左衛門尉 ●

藥丸沓岐守 ●

有馬藤兵衛尉 ●

大山勘介 ●

二番

野村市右衛門尉 ○

肥後与三郎 ●

白坂喜右衛門尉 ●

本田弥十郎 ●

市來孫左衛門尉 ●

八木民部左衛門尉 ●

町田助次郎 ●

黒田加兵衛尉 ●

三

伊集院九郎 ○

松井勘介 ●

長野仲左衛門尉 ●

吉利三介 ●

嶋田新藏 ●

長田勝允作之 ●

猿渡与三 ●

蓑毛和泉守 ●

四

高城左京亮 ○

柏原弥九郎 ●

小嶋勝介 ●

谷口宮内左衛門尉 ●

宇田次郎五郎 ●

摺木治介 ●

春成主税助 ●

中間次郎太郎 ●

五

祁答院伴次 ○

有川新左衛門尉 ●

伊東小五郎 ○

春口主水佑 ●

日高甚六 ●

蓑毛齋藤左衛門尉 ●

赤塚利七 ●

田上舍人佑 ●

六

福永久左衛門尉 ●

酒勾式部少輔 ●

木脇弓作 ●

久富木佐吉 ●

吉富八左衛門尉 ●

金田与吉 ○

大内田采女正 ○

有馬吉左衛門尉 ○

七

白濱七介 ○

有川藤七郎 ○

萩原右近允 ○

山下源十郎 ○

清藤八郎 ○

河副四郎左衛門尉 ○

椎原左近允 ○

三原舍人佐 ○

八

瀧聞九郎右衛門尉 ○

上原孫次郎 ○

河村七郎左衛門尉 ○

鴛川五右衛門尉 ○

入田六郎 ○

加藤賀右衛門尉 ○

山下三介 ○

瀬戸口六右衛門尉 ○

九

弟子丸治介 ○

入田東市頭 ○

小嶋六左衛門尉○

川越作内○

田中徳右衛門尉○

竹下平五○

六々

小藤太囚獄左衛門尉○

石川喜兵衛尉○

町田弥兵衛尉○

種子嶋六兵衛尉○

奈良原大膳正○

井尻八郎

邊牟木利右衛門尉○

七々

御番帳次第
不同

税所助五郎

大内田采女正

一番

川上源十郎○

三覚坊○

八々

兒玉平右衛門尉○

平田吉兵衛尉○

本田民部右衛門尉○

相良一弥太○

二々

春成助六○

平田吉兵衛尉○

九々

福山(四七)衛門尉

伊集院伴五郎○

上原善右衛門尉○

三々

川上八郎次郎

若松覚右衛門尉

十々

山田吉次○

村田藤四郎○

井之口清藏

四々

福永宮内少輔○

山下喜介○

右一日一夜無

卯月

五々

曲田大炊助○

山崎四郎左衛門尉○

224 『嶋津氏藏書』

〔義弘公御諱中〕

慶長二年、秀吉遣使于沈惟敬曰、速割朝鮮三道而可授我也、明帝使惟敬徹日本之兵、相互徵責之、依之惟敬曰、不得奈之何、秀吉所求之三道者全羅・慶尚・忠清也、

〔嶋津氏文書〕

猶々又八郎殿一たんさかしく候、ことにくに元へきたく候やうにもなく、一しほうらくと（候てカ）おとなしくねんころにわたり候、色くのふみのおもむき、またはいけんめきたる事共申越され候あひた、心元のう存候つれ共、このたひ又八郎殿こゝろのうちをくわしくうけたまはりとゞけ候へハ、たゞわきより人の申むねによつて、こゝろならさることにてや候つらんと存候、心の底にていさゝかもこの仰にあひかへらす見え候、やうたいにおひてハ、こゝろやすかるへく候、あはれく御はたらきせめて初秋にもひ候へかし、又八郎殿すこしの間成共歸朝させ申

度候、乍重言そもしさそく又八郎殿へけんさん有度候らん、心の内おしはかり申候、伏見の様躰、たよりの時くハしくうけ給たく候、自是もおなし事成共たよりをすこし候ハす可申候、又其方よりも承度候、よろつゝかさね申可越候、

そののちハ御をとつれうけ給す、御ゆかしく候ところに、たよりをえ申のほせ候、さてもくかのほとは、おひてのかせも候へて、とちうに日かすをおくり、やうくさる月のミそかに、なにことなく、船共かたく鳴へ乗つけ候、老の浪のたちかさなるしに候哉、舟によひ候てさんくなるていにて、そもそも伏見へ此比は定而つき候へんと存候、船こゝちもいか計候哉と、自是そんしやるのミにて候、然ハ又八郎殿歸朝候へとしきりに申候へ共、あか國の御はたらきときこし候間、今よりきちう候てハ、此たひの御働ハあひかたかるへきあひた、寺澤忠戸守殿此くにあつかひの儀申上られへきため、しやうらくさせられ候、さいわい近日爰元へ御つきと聞へ候間、其をうけたまはり合、すこし御はたらきものひ候様ニ聞へ候ハ、たとへ五日十日成共歸朝あるへきよし候て、先く此たひハとゞまられ候、我等はけんさん申候てよろ

『嶋津家文書』

こひ候事、すもしあるへく候、そもしはやくとけんさ
ん有度候てと心の内をしはかり候、將又肱枕夫婦男女共
いつれへもしんめう候由、自其可有御心得候、めてたく

く重て可申候、く、
〔慶長二年〕
五月五日

／＼
より
宰相殿 義ひろ

此表在陣之大名衆江今度被成 御朱印、赤國御働之次第
御人數備等被入御念被 仰下候、然者當手之軍役可爲老
萬人由、被仰出候付而、人數立増之儀申遣候、就中鹿兒
島方格之儀〔イニ角〕、爲兩三人入精、七月中必參陳候様ニ可申渡
候、簡要候、別而乘馬衆於無人ハ、外聞不可然儀候間、
其才覚題目候旨幸侃江申遣候間、定瀨之市方・帖佐方・
鹿兒嶋方銘ニ可被相觸候、其地方格之人數并馬早々渡
海此時ニ候、縦人數等丈夫ニ雖申調候、於遲陣者不可有
其詮候間、早速出船候やうに可申付候、惣別其地之儀遠
慮而已ニ在之候而、何篇於事延者、三人曲事ニ可相究候、

猶三原諸右衛門へ申合候間、熟談尤ニ候、謹言、

〔慶二款〕
五月十一日 忠恒御判

桂太郎兵衛尉殿
〔忠愍〕
〔正愍〕
本田六右衛門尉殿
〔長愍〕
相良新右衛門尉殿

〔家久公御譜中ニハ此三人ノ御宛ハナシ、參考ノ爲メ記置也、案文在
本田助之丞親長ト御譜ニアリ〕

〔御文庫拾六番箱八卷中〕〔義弘公御譜中ニ在リ〕

敬白
起請文之事

一 雖不新、奉對 義弘様、向後無別心一方ニ可致御奉公
事、
一 乍重言 義弘様へ御奉公申上者、他之主人を頼ミ申間
敷事、
一 奉仰 忠恒様御事、 義弘様御同前、相應之御奉公、
不可存疎略之事、
一 圖書頭殿を始、御一家衆・御老中其外諸傍輩中僧俗ニ
至而誓紙取替、致入魂人無之候、此跡も如此候、於自
今以後茂可爲同前事、

一伊集院幸侃へ誓紙取替、某致入魂候由、物沙汰御座候
通承付候、誠以覚悟之外に候、誓紙仕候而幸侃へ進之
たる儀も無之候、又幸侃より預たる事も無御座候、就
中書狀にても使者にても直談にても、惣而内儀めきた
る事共、努々幸侃へ申さず候、然處加治木御藏所之儀、
地を帖佐へ被相付度之旨、於京都 義弘様被成御懇望
候之条、幸侃前より進上申され候て可然之由、京都より

幸侃へ某内儀を申下したると被聞食付之由候、某少も
不存候、縦加治木之事被成御懇望たる子細御座候共、
他言仕間敷儀に候、况御懇望候共何共不承事に候条、
似よりたる儀をもとかく不申下候、此跡も如此に候間、
以來之儀も可爲同前候、抑今度加治木之儀無御腹藏被
仰聞、殊更連々某身上ニ付而被聞食付儀共、条々被仰
聞候、忝次第共中々可申上様無御座候、盡未來際忘却
仕間敷事、

一御書共調申ニ付而、自然者御隱密之儀共被仰聞候、此
跡少も他言不仕候、於自今以後茂勿論可爲同前事、
一御前へ物沙汰洩候而可惡儀、此跡も他言不仕候、於自
今以後茂可爲同前事、

一雖爲連々遺恨深重之人、於 御前有様之外讒言仕間敷

事、付雖爲縁者親類、有様之外最眞之沙汰申上間敷事、
一世上如何躰之轉變雖在之、一向宗には罷成間敷事、
右条々若於僞申上者、

▽奉始上者

奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、惣而日本國

中六十餘州大小神祇、別而薩州擁護新田八幡大菩薩 開
門正一位 鹿兒嶋諏訪上下大明神 大隅正八幡大菩薩
霧嶋六所大權現 帖佐新正八幡大菩薩 日州妻萬五社大
明神 白鳥六所大權現 九州鎮守彦三所大權現、殊者愛
宕大權現并太郎房 大天狗 小天狗 九万八千軍神 天
滿大自在天神御部類眷屬、神爵冥爵可罷蒙某身上者也、
仍起請如件、△

慶長貳丁年

五月十六日

相良五郎左衛門尉

家長(花押)

本(親商)田源右衛門尉殿

229 『嶋津家文書』

先度三原諸右衛門尉差遣候刻、細々申越候間、定可得其
意候、奥入弥治定之由候間、人數馬等之儀、早々渡海さ
せへきため、八木民部左衛門尉・関帖右衛門尉江申含遣
候、若幸侃於上洛者、爲兩三人兩人江口柄聞届、折角可

入精候、少も於油断ハ國家之滅亡ニ可相究、具御狀ニ達候間不書載候、謹言、

〔慶長二年〕

五月廿三日

忠恒御判

桂太郎兵衛殿

本田六右衛門尉殿

相良新右衛門尉殿

230 「御文庫ニ番箱家久公七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

雖未申通呈一翰、抑幕下於朝鮮國御在番之由、承及候之處ニ、無事ニ御歸國之由珍重々々、於自今已後御兩殿同前ニ可申承外無他、從此邦不腆之方物進獻、載于別紙、恐惶不宣、

〔慶長二年ニ當ル〕
萬曆廿五年仲夏廿有七日

進上 嶋津又八郎殿



231 「家久公御譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

猶々御上洛候て參會申、馬共懸御目御物語申度候、乍好便令申候、扱々永々御在陳御苦勞可申様無之候、弥

其表無別儀候欵、目出度被任御存分、早々御歸陳待入候、

可然馬共在之由承及候、御慰被存候、龍伯節々參會申、

馬共責申候、龍伯ニハ馬數多候、早馬共候、猶期後音候、

以上、

〔朱カキ〕
〔慶長二年欵〕五月廿七日

又八郎殿

232 「家久公御譜中」

「正文」

返々たるしまで御きてう候共、又御かへり候へく候、以上、

其方御事御朱印ニまかせられ候て、たとい中とまで御出舟候共、又御かへり候て御さいはん候へく候、返々重而被遣候御朱印のむねニまかせられ候て、御さいはんかん用候へく候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕五月廿八日

(花押)

五月廿八日

石田治部少

〔土書〕
嶋津又八郎殿

三成

人々中

義久公
義弘公 慶長二年 自六月
家久公 至八月

後編 舊記雜錄 卷三十九

233 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

永々其表へ御辛勞之儀、自是察存計候、

一御歸朝可有之由承候間、令祝着相待候之處ニ、于今延引無心元存候、さてハ此節之歸陳難成候する歎と心遣に候事、

一あつらへ候武具之事、存松別而精を入候之故、皆々出來候儘、今度令進之候事、

一馬之儀、安三州頼之由候間、別而彼才覚を以、鹿毛・槽毛被相求候間、今度差渡候、此馬之儀、故実可入様

ニ見及候、委曲ハ岩切三郎二郎へ申合候、

一宰相殿無吳儀此比上着候、可御心安候事、

一御茶壺壺并道ふく式ッ令進入候、猶期後喜之時候、恐

々謹言、

〔朱カキ〕
「慶長二年」六月二日
〔義久〕
龍伯（花押）

〔家久〕
又八郎殿

234 「雜抄」

一慶長二年六月二日、龍伯様〔同年三月十一日帖在御打立、御上落ニ而候云々〕又八郎様江之御狀之内

ニ、宰相殿無吳儀此比上着候、可御心安事と相見得候事、

235 「全」

一同年六月六日、友枕齋伊勢弥九郎江之狀ニ、宰相様一昨日被成御上洛候と有り、

236 「正文在本田助之丞」

一作

薩州入來院裏名之内知行方目錄

一川床之門

小園 下田 參段五睦六步 四石式斗式舛四合 六郎左衛門尉
名字

長中 宍段三畦拾歩 老石八斗六舛六合七夕 對馬允

同所 八歩 三舛貳合 九郎左衛門尉

同所 下田 宍段 老石貳斗 同人

長田 下田 九畦拾六歩 老石一斗四舛四合 對馬

通 下田 四畝廿歩 五斗六舛 甚左衛門尉

はじノ木の本 下田 七段四畦廿四分八石九斗七舛六合 九郎左衛門尉

同所 下田 八段八畦 拾石五斗六舛 同人

前田 上田 五段八畝廿八分九石四斗貳舛九合三夕 同人

田方貳町九段四畦廿貳歩

分米三拾七石九斗九舛貳合

島

舟越 下島 貳畦廿歩 貳斗老舛三合三夕 九郎左衛門尉

同所 下島 貳段五畝十歩 貳石貳舛六合七夕 同人

同所 下島 三畦 貳斗四舛 同人

同所 下島 貳段五畝廿歩 老石貳斗五舛六合三夕 同人

島方四段六畦廿歩

大豆參石七斗三舛六合三夕

名頭 九郎左衛門

屋敷 六畦 六斗 同人

桑老綿三匁米老舛五合 貳斗老舛三合三夕 甚左衛門先

屋敷 貳畦 貳斗 六郎左衛門先

屋敷 老畝廿歩 老斗六舛六合七夕 加藤 先

屋敷 三畦六歩 參斗貳舛 次郎左衛門尉先

田島やしき 合參町五段九畦六歩 桑之米籠

分米大豆四拾三石貳斗四舛三夕

一 湯ノ木丸 助四郎屋敷 貳斗老舛六合 九郎左衛門

同所 下田 老畦拾貳分 貳斗八舛八合 同人

同所 下田 老畦拾貳分 貳斗八舛八合 同人

同所 下田 老段七畝十分 貳石八舛 同人

通 下田 一段七畦拾歩 貳石八舛 同人

前田 下田 老反六畝十六歩老石九斗八舛四合 同人

同所 下田 三段八歩 三斗九舛貳合 同人

前田ノ水口 下田 老畦 老斗貳舛 同人

上田 五段八畝廿八分九石四斗九合三夕 同人

とをう山 中木楊門之内 下田 老段四畝廿歩 老石七斗六舛 弥八左衛門尉

同所 下田 八畝 九斗六舛 同人

同所 下田 老畦廿六歩 貳斗貳舛四合 同人

舟こえ 同所 下田 貳畝廿四分 三斗三舛六合 同人

前田 下田 八畝 九斗六舛 九郎左衛門尉

上田 老段廿四歩 老石七斗貳舛八合 出雲介

田方卷町七段三畝拾四步

分米式拾式石六斗五舛式合三夕

島方

舟こえ 上島 五畝拾八步 六斗七舛式合 九郎左衛門尉

同所 下島 九畝十步 七斗四舛六合七夕 同人

山添 下島 二畝十式步 卷斗九舛式合 次郎兵衛尉

舟こえ 下島 二畝 卷斗六舛 川床ノ内 九郎左衛門尉

小島 下島 式畝四步 卷斗七舛六夕 六郎左衛門尉

蒲生原ノ前島 下島 七畝六步 五斗七舛六合 孫左衛門尉

桑卷本綿五匁米式舛五合 同人

河床わたせ 下島 式畝四步 卷斗七舛六夕 太郎兵衛尉

宮田か原 上島 八畝 九斗六舛 千兵衛尉

舟越 二反ノ内川床門ノ内 三斗四舛三合七夕 九郎左衛門尉

下島 四畝拾步 四斗式舛八合七夕 八兵衛尉

天神ノハき 下島 五畝拾步 四斗式舛八合七夕 八兵衛尉

四百野 上島 卷段五畝六步 卷石八斗式舛四合 右近

桑四本綿十五匁米七舛五合 同人

島方六段三畝廿步

大豆六石三斗四舛四合三夕 助四郎

屋敷二畦廿四步 式斗八舛 同人

田島屋敷 合式町參段九畦拾四步

分米大豆廿九石參斗式舛六合六夕

都合五町九段八畦廿步

分米大豆七拾式石五斗六舛九合九夕 此内式升五合一夕不足也、

已上

慶長二年六月二日 上井神五郎 里兼

長壽

盛淳

本田助丞殿

237

『寺文書雜抄』

尚々其元衆徒中も當時之立柄察存候処、切々御祈念 付て精を入られ候由、誠々感入計候、以別紙可申候 へ共、可預御心得候、

好便之条令啓入候、仍此表無吳儀、又八郎一段勇健在陳 候、誠以御祈念之驗と大慶此事ニ候、弥被抽丹精御祈禱

之儀頼存候、急候間不能一二候、恐々謹言、

〔朱力字〕 慶長二年六月三日 義弘(花押)

一乘院

御同宿中

「義弘公御譜中、正文在坊津」乘院トアリ

238 「御文庫二番箱義弘公四卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

態申候、今度御働以後、かとか之儀者破却候て、こもか
いを可被仰付候、然者歸陳之時、其有付所へ直ニ御移候
て、尤旨ニ候間、小攝可被仰談候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長二年款」

六月三日

寺志

正成(花押)

嶋津兵庫頭殿

同又八郎殿

御陳所

239 「御文庫拾七番箱十三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々其表之御様躰如何御座候哉、早々先御歸朝奉待
候、

幸便間令啓上候、其以來者久不申入候、其表御無事ニ御
座候哉、此比可有御歸朝由候間奉待候處、于今無其儀無
御心元奉存候、武庫様無吳儀被成御着船候哉、次宰相殿
様一昨日被成御上洛候、於此方進分似相申御奉公不可存
油断候、爲御見舞伏見ニ逗留内、御便宜之由候間如此候、
猶追而可申入旨、可被仰入候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長二年六月六日」

「伊勢貞知」
如貴(花押)

240 「御文庫四拾九番箱二卷中」

伊勢弥九郎殿

友枕齋

如貴

息女公領

日州もろかた郡之内

やつしろ之村

高三千九百七拾石五斗七升四合貳夕

ふかとしの村

惣高千四百五十石五斗六升三合六夕之内

高千貳拾九石四斗二升五合八夕

以上

惣合五千石やくなし之地進之候、抑幼少已來いまに在京、
誠以御苦勞之段、併當家之奉公何事如之乎、然上へいか
やう之儀雖有之、右知行無吳儀可被成格護儀尤候、向後
相違有ましく候、仍狀如件、

慶長二年六月九日

りう伯(花押)

「此本在御文書方」

住吉大明神に立願あり、近衛殿を奉頼、和歌の會をなす、

慶長二年六月二十一日、

松下納涼

龍伯

山かせのをときく庭の松かけは

なつを外なる住ぬなりけり

むすひてハさをなさらても松陰の

岩ねの水に夏そなかるゝ

〔同〕

當座

雲間初鷹

ほと遠く雲間に聞し初鷹の

こゑも門田に鳴落るかな

社頭祝

ゆふたすきかけて千とせを祈る哉

代々に引へきためしおもへは

242 「御文庫三番箱宝鑑中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

御上國之由、御勞煩令推察候、此地へへいつころ可有御

越候哉、久敷不懸御目御床敷候、委曲筑後守可申候間、

令省略候、かしこ、

〔朱カキ〕
「慶長二年秋二月日ナシ」

！

〔義久〕
修理大夫入道殿

〔近衛信輔公也〕
信輔

243

ものゝぶの高き名をえて故郷に

花のにしきやきてかへるらん

さく花の枝をつらねてこの春ハ

いつのとしにもまざる色哉

いまよりは猶もさかへん花衣

はたはりひろく國ハなりつゝ

右之愚詠ハ、龍伯歸國之節遣之、舍弟兵庫頭父子従高

麗歸朝之処ニ、薩州之内御藏入被返進、（歌）觀喜之由聞之、

同兩三首短冊之小書ニ書加之、

244 「義弘公御譜中」

慶長二年五月、清正・行長遣柳川調信于京師、六月、調

信到京師謁 秀吉、秀吉曰、朝鮮不聽我言者、依全羅・忠清二道猶完也、諸軍進入全羅、多聚糧米屠拔諸城、長驅大進事若難成、則先歸慶尚而經固城入西生浦、屢進兵于敵地竭力、而戰我兵雖多死、而不顧必可建大功矣、若不從我言、則汝等妻子皆在日本、我磔裂之耳、清正・行長聞而大驚、又使調信白于 秀吉曰、近日大明大兵既到全羅、其勢固難敵矣、 秀吉大怒曰、往年李如松屯于開城之時、我兵一警之間攻屠晉州城、今又何懼之有、秀家等者自宜寧・晉州向全羅、秀元等者自慶州經密陽大丘向全羅、夾擊而可也、清正・行長何孱乎、聞明兵之來而生恐怖之志、噫有蓬之心夫、調信歸而言之、清正・行長敬聽命、

沈惟敬シムキョウ朝鮮僧惟政・松雲、裁書贈清正曰、邢玠率七十万兵既赴朝鮮、公等諸將速徵兵而可也、清正時在西生浦、卽寄書曰、松雲告我以明兵之來進、是我所願也、夫朝鮮兵士者懦弱、而不能彎弓列楯於我兵、故我心鬱塞固憐之矣、而今與明兵相逢快戰急擊、則朝鮮者置而不論、進旗于明京悉焚燒之、不可食言、我身之怡幸何加於此哉、唯恨明兵來之晚矣、我聚兵而竦焉、惟敬及明兵・朝鮮人共見之、駭駭ハヤハヤ彌不安其心、惟敬又密遣僧于清正臣金大夫、

而求和親、辭氣尤懇、然金大夫不從、其回翰與清正之意相同、由是惟敬術盡力窮、

245 「朝鮮日々記」

一然ル処ニ慶長二年酉年之七月比、唐嶋倚瀬戸内ニ番船八十艘程懸り、答ニ加徳島近ク水取りニ二三艘程ツ、打廻る、其仕合ニ日本ヨリ渡る舟ヲ見懸ケ追詰る程に、加徳ノクヒレ箆々はニ追上、陸カト舟との鉄放取合ニ柄主水正・長野久次郎アマリ進ミテ手負被成候、其時加徳ニ乗り付參いられたる人ニハ、堪増十石褒美として給ル、諸國ノ舟ハ方々ニ追ツチラシテ、水手ニ廻る処ヲ陳ヨリ敗、野伏タクミテ久富膳兵衛敵ヲ討申候、其後川上六郎兵衛安郷良ニ御坐候て歸り被成ル、ヲ、番船十二三艘ニ而追ツ掛ル程ニ、唐嶋と加徳ノ間ノ小島上リツマリヲ見テ候之処ニ、番船もおり立て責寄ルニ、加徳ヨリツ、キ早くして、廿め三十匁ノ鉄放ヲ盛、舟ニ乗り唐嶋之陸ツ、ク程ニ、はん船も打立候へとも舟ニ乗りこきのく処、大スニテ射詰ル程ニ、舟ノ内かへ打破り、舟内も皆手負ニ成、乗リヲクレタル唐人も十四五人討申候、其時小スヲ以テ小嶋六左衛門舟ニ

乗ルヲ、其日ノ下知奉行白坂七右衛門下知ヲ被成ル、ニ、六左衛門ハこす成とも一人役仕候、七右衛門殿ケ様成事ハ中々しり有間敷候と戰申候、其遺恨として御前ニ而何程ニ御申候哉、御法度ヲソムキタル科ヲ被仰出成敗被成候、又鎌田寛柄(通)ヨリスリヤカ成ルヲ以て内松殿、後ニハ渡邊治部左衛門と申者何ニ程ノ科ニて候哉、是も成敗被成候、七右衛門殿申事として、此兩人ハ下ニハおしミ申候、然ル処ニ番船懸ケ廻るよし名護屋ニ聞得、関白様之鐵舟大河多テ二艘、七八端之せき合六七十艘參り、大將ニハ藤堂佐渡守・加藤左馬守・生駒讚岐守、安郷良ヨリ伊東・秋月・高橋・嶋津又七殿、加徳よりハ一はんニ渡り陸地ヲサス程ニ、番船より嶋ニ下りて居たる者トモ起舟乗ル、討るゝ者モ有り、番船ハ皆々逃ル処ヲ方々ニ追ツ散シ、せき舟ニて乗廻し、大スニテ打懸クル程ニ、舟ノ構ノ板モ打ワレ天ニ上り、中ニテ一モミ、テ海ニ入ル、舟ノ内皆々手負ニ成ル、大舟ニテハ有り、乗前もふたメク処ヲ釜山浦ヨリ鐵テ包ミタル舟二艘、其外ノ舟トモ漕附、なげ火ヲ入ル、程ニ、はん舟三十艘焼わつて唐人過分ニ相取り、此よし釜山浦名護屋ニ注進被

成候へハ、赤國入と被仰出てより、四國・中國・九州衆ハ申ニ不及、東國より伊勢・伊賀・近江・五畿内ノ衆少々立重ミトシテ、名護屋ヨリ渡ル程ニ、沓岐と對馬之間ニテ上リ風ニ吹散されて、石見金山ニ付モ有り、或ハ若狹ノ浦ニ付舟モアリ、少々ハ對馬ニ取付も有り、打道具ヲ捨、はたかニ成ル鉢ニテ、其日けんニもあわすして、正月名護屋ニ被參候、しかれハ高麗在陳ノ大名四十三人、備前中納言大將軍ニシテ、前々番舟追散したるを寄ヲイテ上下進ム程ニ、釜山浦ヲ打立テ、慶長二年丁酉七月十八日より赤國入として五十万騎ノ御出馬にて、全羅道・忠清道・慶尙道ヲ發向シ、破滿・有念木・泗川・椿条・丹錢・古女安・破煩川口ニ付テ陳取り兵儀ヲ被成ル、処ニ、敵ハ立テ猶シ南門ノ城ニテさゝゆる処ヲ、日本衆押寄テ其屋鉄炮責ニシテ、其夜ハ我々ノ備ニ引テ陳取ル、敵ハ手なミを見て臆シテ、其夜ノ子ノ尅計、敵ハ夜崩レニ引処ヲ陳より聞付て、取切、打程ニ、其ノ鼻ヲソキスツニシテ出セトノ御下知ニ而ハ候得共、其後ハ漢南ニ追ツ懸リ、赤國ノ都天頂ウニ入ル、夫ヨリ青イ國ノ堺勢云処ヨリ手分ヲ以テ打廻ル、嶋津殿ハ其より奥八日程と發

向して、灰南と申勉ニ打入て御番也、其ヨリ唐人相付テ納ノ由被仰候へハ、上白米廿日卅日ノ内ニ盛りなく納置申候、長陳之やうニシテ五十日程ノ逗留(マド) 引被成候、其ヨリ陳盛り成ツテ、順天ハ小西・松浦法印、虎元ハ高橋殿兄弟、南無灰ハ對馬殿・五嶋殿、賣山ハ加藤殿、竹嶋鍋島殿、泗川・椿条・古女安ハ嶋津殿、五畿内・四國・中國・豊後・豊前・筑前衆ハ釜山浦大將ノ御陳内也、

〔征韓偉略〕

一六月

十八日、行長遣調信至海邊云々、我將師宇喜多秀家管四國九州諸將營于釜山、鍋島直茂營于竹島、毛利吉成・毛利豊前守・島津忠恒・秋月種長・高橋直次・相良長安營于安骨浦、加藤清正營于蔚山、島津義弘營于加德島、小西行長・有馬政純・大村嘉前・松浦鎮信・安國寺惠瓊・五島盛勝營于順天、宗義智營于南普拜島、島津家記、此月小早川隆景以病歿、毛利家記、隆景在朝鮮、所在嚴警日夜巡營、雖步卒不許散出、其行兵一日不過三里、人或疑其怯、而至明大兵如潮湧、諸將或謀無所出、而

〔全二〕

一七月

隆景從容運籌決然機斷、諸將遂服其老鍊云、淺川聞書、十五日、夜古簡雜纂・秀吉書・藤堂家記・三大征考、○按、懋愨錄爲八月七日者傳聞之訛也、宗氏家記亦爲八月七日、而宗氏家記率湊合懋愨錄而爲文者也、故月日雖懋愨錄不可信焉、脇坂記爲七月七日、島津家記爲此月十二日、十三日兩日戰、皆誤、○又按、源君美管疑豊臣家譜、以此戰保春、此說未精密、今讀豊臣譜、春及七月兩家記之、而春所記據戸田肥後守說、而頗詳細、七月所記據平攘錄、而平攘錄関山之戰文尤略、故藤堂高虎・脇坂安治・島津忠恒引爲二事也、非全係春而已、等襲元均舟師、高虎先遣人覘其巢窟、夜參半號砲三響、快舸急赴、其兵箕浦忠光等獲敵船、藤堂家記、脇坂安治據秀吉譜、義弘欲自陸路攻之、與諸將期率兵三千屯唐嶋、聞舟師喊聲同發喊、放大砲水陸合勢攻之、忠恒跳乘一敵船勇戰、悉殺其兵遂奪船、征韓錄、均至絶影島督諸軍進戰、夜深風盛、舟分漂、均還至加德島、軍士下船取水、懋愨錄、高橋直次・筑紫廣澄突出掩之、斬將士四百餘人、宗氏家記、十六日、黎明均率數百艘引退據巨濟泰川島、○巨濟泰川島、據懋愨錄、高虎兵競擊、高虎甥高刑等各有斬獲、藤堂家記、高虎臨發馳使告加藤嘉明、嘉明稍後而至戰既酣、嘉明見一巨艦列戈砲而待、兆雖而上舟手斬數人、敵欲擊嘉明、嘉明甥權七郎等奮戰而遂奪舟、嘉明又欲跳上敵別船蹶而落海、

抱舢而跳苦戰又奪一船、安治亦奪敵船十六艘、從兵多戰死、秀吉譜、十六艘據脇坂記、藩翰譜、高虎部下佐伯惟定、家兵杉谷惟之、長田惟氏等亦將奪敵巨艦、單舢挺進以鐵塔勾之騰

上直斬其將、餘兵匿艙底、盡屠之、藤堂家記、敵兵遂敗績奔船上陸、義弘豫謀分布手下兵二千于十五六里間、悉

殺逃兵、征韓錄、時鍋島勝茂在竹島、聞此戰馳舟至而戰將終、猶見嘉明乘敵艦奮擊、勝茂憾不及戰酣、其臣中野

某偶見敵船猶在岸畔、言之勝茂、勝茂大喜、速擊之奪其船、勝茂歸後數言、予幼而從太閤殿下覽芳野櫻、滿

山白雪爛熳奪目、謂天下壯觀、後閑山役觀嘉明舟戰、

芳野壯觀殆不如也、鍋島家記、勝茂分遣其臣成富茂安援高虎、茂安奮戰斬首七百餘、九州記、此役藤堂高虎獲船卒餘

艘、斬獲數千、瀨海者不可知、義弘父子亦得哨船百六十餘艘、共高虎焚弃沿海諸浦船、令敵不得梗海路、取參

古簡雜纂、秀吉與高虎書及與義弘父子書、元均走免、或言所害、全羅石水使李億祺投水死、慶尚右水使金應瑞走免、懲懲錄、諸將相會論

功、嘉明與高虎爭功奮怒、諸將和解焉、松浦鎮信判曰、藤堂將士夜間先衆奪哨船、又獲大艦斬其將功爲最、監

軍言之秀吉、併言諸將功、秀吉皆賜狀賞之、藤堂家記參取秀吉譜、東照宮亦賜書于安治賞之云々、

慶長二年丁酉、日本諸將再渡朝鮮國、各屯海口之際、朝

鮮軍兵調戰舢數百艘於巨濟、日唐人、而欲拒日本兵也、時水路之將藤堂佐渡守高虎、脇坂中務少輔安治欲擊破之、

乃相共議遣使于加藤左馬助嘉明曰、我輩欲擊取唐島之戰舢、卿亦先可來此、而嘉明未至之間、高虎、安治既遣其

兵於唐島矣、嘉明未知之往而相議、時有告者、嘉明驚慍急進、其從兵漸相逐而行、高虎、安治已下諸將亦同解纜

也、當此之時、義弘父子守加德島之營、依當攻擊唐島陸地敵之有衆議、七月十四日、西一申時率三千餘兵解纜於加德島、

著船於巨濟稱碁石濱之地、無一足之有休息、進十有七八里之險路、諸將悉以進舟船、同十五日之夜半、自海陸逼

番船揚鬨擊大戰、高虎之臣東堂新七郎夜中取一敵船、島津又七郎豐久辰時又取一船、挑戰移時、已迄未時、敵大

船數百艘連鱸飛羽箭者宛如雨、安治之從兵戰死者不少、嘉明進來見一大鱸艦列弓矢舉干戈待我兵、而飛入獨身力

戰手所斬殺數人、敵欲擊嘉明、嘉明甥權七郎及從兵亦攻入、遂取其舟、於是敵船多退、我兵遂擊之、嘉明怒彼輩

之欺己、且欲誇其武勇、故又向一戰船、時嘉明蹶而落海、抱舢而躍上苦戰又取其舟、箭中嘉明之股、血流太甚、而

不顧、鍋島信濃守勝茂來見而勞之、嘉明曰、我又取舟、

其意氣凜凜焉、諸將取敵纜纜、共燒一百六十餘艘、陸地

之敵義弘父子使從兵斬之、海陸共斬首者數千人、殘兵悉

以追入海中、不知其數也、且復十五六里之間、津津浦浦

敵船悉燒捨之、而各歸陣將裁書告于日本、時記其軍功、

高虎曰、今日先登之功者在我耳、嘉明進出按劍腕視曰、

佐渡何言哉、今若出一言、則我必一刀急試以決之而已、

舟師之捷不在我乎、其忿眼如炬、高虎亦怒、座中皆和解

之、左右翼蔽令高虎不敢言、故無事而止、戸川肥後守側

聞焉、肥後守者浮田秀家之重臣也、爲人有武勇、先是文祿元年朝鮮征

伐之時、肥後守屯于一營、士民逃竄、肥後守論曰、非殺汝也

其勿恐焉、乃出木標六百分與之曰、持之則其無害傷焉、士民大喜以油紙

裹之、係于頸以安其心、於是四民雜商皆來聚于肥後守營、故米粟豐矣、

材木滿矣、炭薪積矣、魚、其翌十六日、裁捷書獻日本也、

「義弘公御譜中」
「正文在伊集院衆本田吉藏」

差出目錄之事

御稻荷御神領

大田名之内
楠木園門

一田方貳町貳反七畝四步

分米卅三斛四斗六升貳夕

一畠方貳反三畝八步

分米壹石八斗五升壹合三夕

一畠方九畝拾八步

分米壹石五升貳合

一居屋敷壹段貳畝六步斗代壹石貳斗貳升

一坊地壹反貳畝拾四分斗代壹石貳斗四升六合

柒二本六匁 桑壹本綿三匁

合田畠居屋敷貳町八段四畝廿步

右之分米卅八斛九斗貳升九合四夕

一彼知行御稻荷江御付有之事、

文ノ四霜月拾六日、馬之尅ニ鹿兒嶋へ於御假屋一着仕

候事、

武庫様 爲御意御使者衆

本田半兵衛尉殿
「本マ、」彼以兩使一着候、

本田源右衛尉殿

本田豊前坊

慶長貳年丁酉七月二日

親信(花押)

上井神五郎殿

參

250 其表へ永々軍勞不及是非候、殊更赤國入之儀、重疊心遣

たるへく候、然者 又八郎殿若輩ニ御座候間、軍法之儀

ニ入魂頼入候、定而義弘、可被仰付候へ共、涯分頼入候、

仍任見來鞆沓懸茶色進之候、猶期後音之時候、恐、謹言、

〔慶長二年〕七月三日

竜伯(花押)

(伊集院久造) 抱節

〔此御書、抱節譜中に在リ〕

251 〔御文庫ニ番箱義久公ニ卷中〕「義弘公御譜中正文在卷本トアリ」

尚以遠路被入御心御音札、忝存知候、以上、

去五月廿三日之御狀、今月九日於伏見ニ來着、具拜見申

候、殊爲御音信沈香沓斤被懸御意候、遠路御志之段不淺

候、隨而到高麗賀徳嶋ニ御在陣之由、御苦勞致推量候、

如仰赤國表御働之儀、石治少無渡海ニ付、御手前御心遣

之由、無余儀存知候、併治少々定而指圖可在之候間、其

通無御油断被仰付尤存候、寔遠方故、以書狀も申入儀無

之、如在之様ニ罷成候、將亦爰元珎敷儀無御座候、伏見

・京都御普請半候、猶追々可申入候間閣筆候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕大谷刑部少輔「墨印」

〔慶長二年〕七月九日

吉繼

羽柴兵庫頭殿 御報

252 『嶋津氏文書』

將亦帷子ニ道服一被遣之也、

今度渡海之儀、炎天之時分辛勞思食候、赤國動事、最前

如被仰付候、先々見計入精、弥以無由断可申付候、尚松

井藤介・竹中貞右衛門尉可申候也、

〔朱カキ〕〔慶長二年〕七月十日

〔御朱印〕薩摩侍従とのへ

253 〔又七郎豊久譜中〕

〔正文在島津安藝守久雄〕

將又帷子一・道服一被下候也、

今度渡海之儀、炎天之時分辛勞思食候、赤國動事、最前

如被仰付候、先々見計入精、弥以無由断可申付候、尚松

井藤介・竹中貞右衛門尉可申候也、

〔朱カキ〕〔慶長二年〕七月十日

〔御朱印〕嶋津又七郎とのへ

254 〔御文庫四拾八番箱中〕「義弘公御譜中に在リ」

猶々軍衆加増之儀、追々ニ稠敷申下候間、定此比者

其表へ着揃候らん存事に候、

五月廿三日之書翰、今月三日ニ令披見候、先以御朱印之請相届候間、即治少老へ進上申候、兼又御目見得之事承候、五月十八日ニ相濟候、同廿日ニ於御城御能被遊候、見物可仕由承候て致出頭、度々仕合事能候て令満足候、爰元之儀可御心安候事、

一又八郎殿歸朝之事、御働近々ニ罷成候故、此節ハ延引之由候通治少老へ申入候へは、可然分別にて候由御褒美候事、

一肥後勝兵衛尉用段之儀ニ付被差上候、追付諸道具所持之儀申付候、今度惣別於相濟候者可爲遅々候間、急用之儀計相調、先々渡海可仕由申付候、餘ハ次第々々可差渡候事、

一渡海衆無人之由承候、笑止ニ存、追々國元へ申下候、治少老よりも節々承候間無油断候、每篇其地々直ニ國元へ被仰渡候て專要ニ候、爰元へ承候て申下候へは、重々事延候、爲御心得候、恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長二年秋」七月十一日
竜伯(花押)

羽兵庫頭殿

參

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

五月廿三日之書面、今月三日ニ到着、令披見候、然者肥後勝兵衛尉被差上候、御用之道具等即申付候、皆々今度於相調者可爲遅陳候間、先々急用之儀計相濟、渡海可仕之由申付候、其餘者追々ニ可差渡候事、

一其表御働之儀、可爲八月之由申散候、然者近々ニ罷成候故、歸朝此節ハ延引之由、治少老被聞召、可然分別にて候とて、御氣色能候、每篇賢慮尤候事、

一渡海衆無人之由笑止ニ候、爰元よりハ追々國元ニ申下候、治少老よりも節々承候間無油断候、其元々直ニ可被仰渡候、此地へ承候て申下候へは、遠路相重事延々候、爲御心得候事、

一爲當年祝儀、猿渡新介差渡候、委曲申届候哉、千秋万歳ニ候、御働之時分候間暫在陳仕、一行見申候て歸朝可仕處ニ、早々罷歸候哉、曲事ニ存候、猶期後喜候、恐々謹言、

「朱力キ」
「慶長三年」七月十一日
龍伯(花押)

又八郎殿

「御文庫二番箱家久公七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以高麗以後ハ不懸御目、別て御床敷存候、其以後
以使者成とも可申入を、手前取亂、乍存無沙汰之様

ニ罷成候、何も御歸朝之節、以面可得尊意候、以上、

竹中貞右・松井藤介此兩人爲御使被罷渡候間、一書申入

候、御渡海以後、以書狀も不申入、本意之外候、隨而其

表定而早速可被仰付儀安中ニ候、次ニ御前珍敷御沙汰

も無御座候、大閣様・秀頼様弥御息災ニ御機嫌能御座

候間、可御心易候、於此地拙者ニ似相たる御用於被仰付

者、可爲本望候、此便急申入候間不具候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長二年〕

七月十一日

福嶋左衛門太輔
正則(花押)

鳴津又八様

人々中

257
〔義弘公御譜中〕

〔正文有之〕

猶以 竜伯様諸篇御指南被成忝事候、便宜次第御礼

御申可被成候、忠恒様・御かミ様切々御申請候、宰

相殿も折々御參候へと御座候而御參候、内外御仕合

無殘所候、以上、

五月廿三日之御書、七月四日於伏見拜見、忝奉存候、先

々貴殿様無吳儀高麗へ御着陳、千秋萬歲候、宰相殿も五
月廿七日大坂へ御着、爰元御仕合一段よく相調候、此巨

細者數根忠兵衛尉便ニ以細書申候、定可相届候、石治少

様も切々御音信候、安宅三州も使者にて御見廻共候、

公儀之御つくろひも事濟申候、乍去 北之御政所様へ御

礼儀被申候而者、いか可有御座哉之由、安宅殿へ尋申

候へハ、左様之子細者治少様可被成御存知事ニ候之間、

時分可被仰儀も可有之由候、御内儀無御座候間者心遣不

可申之由、三州被仰候条、任御指南候、其外 義弘様被

仰合候、御攝家・聖門様其外連々御見廻申候、京衆就中

馳走仕候衆などへも相應ニ一礼仕候、爰元無油断申調候、

聖門様もハ一段御馳走之御音信共候、御使へ向庵にて御

座候、爲御心得候、兼又爰元御供衆御書めい、拜見仕

候、上意之旨後日さて奉存其旨之由候、各今迄者何様

貞心之覚悟無其紛候、万一不届子細候者、不寄誰無用捨

可申地躰候、此儀無首尾候者、後日可聞召事ニ候之間、

不及是非候、猶追々可申上候、此由宜預御披露候、恐惶

謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長二年〕

七月十一日

川上(忠智)
三河入道

肱枕(花押)

桃山權左衛門尉殿

258 「家久公御譜中」

「正文」

以上

從 又八様御書被成下候、忝奉拜見候、抑赤國 御出馬
 弥必定^ニ候之^{本ノ}、就夫^{立重ノ}人數無由断可被申付候旨被
 仰付候、此比者不殘出船仕候由聞得候、於其地隱有^{マコ}數候
 之条不及申候、乍去在京之人衆、其外軍役御免之人衆、
 右之斛過分之儀候、御藏入廿萬石を以被召次候之条、難
 成儀可爲御察候、小給人衆之斛^ニ千人程不足由、談合衆
 被申候、具之儀者三方之御留守居衆より言上可被申候条、
 不能重筆候、此等之趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長二年カ〕

七月十三日

伊勢^(貞島)弥九郎殿

伊右衛門入道

幸侃(花押)

259 「家久公御譜中」

慶長二年丁酉、日本諸將再渡朝鮮國、各屯海口之際、大
 明・朝鮮之軍調戰舸數百艘於巨濟、^{日本人稱}而欲拒日本
 之於唐島、

兵也、時水路之將藤堂佐渡守高虎・脇坂中務少輔安治欲
 擊破之、乃相共遣使於加藤左馬助嘉明曰、我輩欲擊取巨
 濟戰舸、卿亦先來于此、嘉明未至之間、高虎・安治既遣
 衆兵於巨濟、而已相戰、嘉明未知之往而相議、時有告者、
 於茲嘉明驚愠急進、其從兵漸相逐而行、高虎・安治亦皆
 既到唐島、塵衆大戰、安治之從兵戰死者不少、嘉明急到
 見一大艘幢列弓舉戈以待我兵、而飛入獨身力戰手所斬殺
 數人、敵兵欲擊嘉明、嘉明之甥權七郎及從兵亦攻入遂捕
 其舟、由是敵船多退、我兵遂以擊之、嘉明怒彼輩之欺己、
 且欲其顯武勇、故又向一戰船、時嘉明蹶而落海、抱舳而
 躍上苦戰再捕其船、羽箭中嘉明之股血流太甚、然而不顧、
 于時鍋島信濃守勝茂進來見之勞焉、嘉明意氣凜凜曰、我
 又取舟、義弘父子向陸地敵、使從兵斬之、今日捕敵艘幢
 燒之者、共一百六十餘艘、海陸斬敵數千、殘兵悉以追入
 海水、不知幾百千也、且復十五六里之間、津津浦浦敵船
 無一隻之不燒、實七月十五日也、其翌十六日裁捷書獻日
 本也、其案文以下記義弘譜中者細密也、

定陣所於巨濟經之營之、義弘主直在彼地、忠恒歸加德
 島也、

經略邢珍素惡沈惟敬深矣、故欲執之、而恐渠之奔日本告

大明之密事、由是先贈書以安惟敬之心、然惟敬疑之以欲奔釜山浦也、邢玠使揚元率三千兵赴南原、謀于吳惟忠·麻賁及朝鮮將元均、防惟敬之逃于釜山、惟敬猶有從兵二百人、故邢玠恐其乘夜而遁、遣別兵二百人、而強代之、

惟敬銜之、即遣婁國安·張龍二人於釜山、說行長以歸降之事、行長同之、逾日柳川調信率五百人遣人于宜寧、而召惟敬、時朝鮮斥埃扣留之、張龍自間路進見惟敬、而勸其行、揚元聞之曰、事已急矣、馳覲到宜寧、見惟敬馱狐貂而進行問曰、日本如何、惟敬曰、和親其不可成矣、揚元曰、不可成、則吾子何不明言于邢玠乎、惟敬曰、我往慶州與清正交話月餘而歸、時惟敬顏色甚變、揚元察其逃走、即聚其兵、回惟敬馬相圍而歸丹城、邢玠即奏于明帝、以下惟敬於シキヤロ圍、

慶長二年丁酉七月、沈惟敬恨揚元之捕己、而使婁國安告于行長曰、南原城者揚元及全羅道兵馬節度使李福男所守也、城中兵士不多、足下與諸將俱攻之、則城必陷矣、南原東有雲峯鳥嶺、南有三浪大江、路通于金海竹島、是朝鮮要害之地也、足下須置騎兵於此、其右有閑山島、邢玠使遼兵三千守之、陳愚衷以二千兵在全州、朝鮮將金應瑞·李元翼在雲峯、權慄·元均在閑山島邊、皆爲南原之援

勢、足下若分兵當之、而後攻南原、則彈指之間可立拔屠之功矣、行長亦素欲取南原而受秀吉之感賞、故聞之大喜、於安骨浦即與諸將相議、將攻南原城、評議畢、則忠恒歸加德島矣、

260 「又七郎豊久譜中」

朝鮮國之軍兵調戰舸數百艘於巨濟、日本人曰唐島、而欲拒日本兵、時水路諸將共爲群議、將以擊破戰舸、慶長二年七月十四日、晡時解纜渡彼島、從夜半逼鐵幢、藤堂佐渡守高虎之親族藤堂新七郎夜中捕一艘、豊久辰半捕一艘、加藤左馬助嘉明午後捕一艘、而後諸將衝入敵船中、敵船不得防禦將退已亂、乘其變各爭先直前切捕百六十餘艘矣、得勝利畢、而後諸將會聚、今日戰功評遲速輕重曰、新七郎雖爲所捕第一、比之於步卒之抽衆兵獲一首、念所易切捕也、嘉明雖爲所捕第三、數百鐵幢之進先登、尤所難切捕也、是爲第一、新七郎之船爲第二也、此時豊久之臣樺山分助·山口彌五助遂戰死、被傷者不遑記之、右之軍功達秀吉台耳、三輩賜朱印之感牘矣、

261 「豊州家庶士平山氏系圖」

〔對馬守久清譜中〕

文祿元年壬辰之季春、義弘主渡楫于朝鮮國、久清不離膝下扈從者也、

慶長二年丁酉七月十五日、大明國之軍艦數十艘救朝鮮國來在于唐島、日本之諸將欲破卻之、各爭先挑戰、以悉破卻去、而唐島焦土矣、于時久清斬首敵一人矣、

262 『嶋津家文書』「享有之」

急度奉致言上候、

一番船唐島を居所ニ仕、日々罷出、日本之通船渡海一切不罷成ニ付て、五人之もの共申合、唐島江押寄、明昨日十五日夜半より明未之刻迄相戦、番船百六十余艘切取、其外津々浦々十五六里之間、ふね共不殘燒棄申、唐人數千人海江追はめ切捨申候、猶此表之様子、從御奉行衆可被遂言上之条、不及申上候、右宜御披露所仰候、恐々謹言、

〔カキ入ニテ正文ニハナン〕
「慶長二年七月十六日」

小西攝津守
(行長)

藤堂佐渡守
(高虎)

脇坂中務少輔
(安治)

加藤左馬助
(嘉明)

263

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

嶋津又八郎
羽柴兵庫頭

徳善院
(玄以)

増田右衛門尉殿
(長盛)

石田治部少輔殿
(三成)

長束大藏少輔殿
(正家)

〔此御案文、御文庫二番箱義弘公二卷中ニ在リ、糺合ス〕
〔義弘公御譜中ニ在リ〕

猶々公儀之舟にて人數くり渡し之事、急度調候へハ無申事候、萬一船賃など御城米にて可被調儀者有間敷儀ニ候、不及申候哉、隨而貴所陳所爰元あまりせはく候間、別所ニなをし候、普請いそぎ候間、道具衆を早々さしこされへく候、以上、

あむかうらにおいて御談合之儀相濟、早々歸宅之由珍重候、仍加徳より唐嶋陳所迄人數くり渡し之事、如何調候哉、公儀舟數も無之候間、無心元存候、たとい調候共、急々可被練渡儀者、首尾有間敷候欵、さやうに候へハ、當陣普請已下諸事外聞実儀不可然候間、國元より自舟に

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

て罷渡候程之人數者、其元よりから嶋陣所までも自船にて罷渡候様ニ可被仰付候、さやうに候者、私ノの分別にて荷漕船など多々可在之候間、急ニ可罷渡候と存候、此等之趣圖書頭へ可有内談儀肝要ニ候、存より候分爲御心得申候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年カ七月廿二日

又八郎殿

義弘(花押)

猶以乍重言、當手之人數爰許へハ、已上人數百人之上ハ在之間敷候、左候へハ、加徳之人數多々可在之候、拙者先日申候様ニ、人數之くり渡し大方ニ候てハ、致首尾間敷之由申候キ、乍案中候、人數急ニくり渡不調候てハ奥入之管ニ可難相欵と、自是心遣千萬ニ候、兼又此度之御働ニ留守番仕候人數ハ、貴所加徳ニ着岸候ハ、翌日ニ可被差渡之由申候ツ、于今其人數不參候、是又いかゝ候之哉と存候、

備前中納言殿并小攝、今日申剋此浦ニ着津被成候、然處貴所事渡置たる城ニへんとして御座候へハ、外聞実共不可然候間、兔角明後日者必々可有越着候、定而其元ニも

「家久公御譜中ニ在リ」

可相知候へ共、爲御心得注進申候、其方之人衆者今少見合候へなと、可被申事覚悟之前候、左様ニ候て 公儀ニ懸合可申候へん哉、能々分別可在之候、我等存寄之分申越候、當陣之事も無人にて陳所之普請等不調、旁外聞悪事候、其方ニ罷居人數治定國かたきニ候之間、皆片かけニ引入居可申候条、早々追立可被差渡候、將亦先書ニ見え申候貴所道具之者、のほりさしなと不參之由候、國ならひとハ有なから、さて、笑止之儀可申様無之候、なを胃口上候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
慶長二年カ七月廿四日

又八郎殿

義弘(花押)

只今攝州へ御見廻として罷出候へハ、三日中可被打立之由面談承候、然者明日より道筋を見させらるへきよしにて、攝州可被打出之由候、明日がさき衆者可打立模様と見及候、其上中嶋ニ陣取候人衆者、今日よりはや地嶋之様ニくり渡され候、こゝもとの様躰爲御心得令注進候、其元之人數於今分者、とても今度出張之節にはあひ候ましく候、笑止共中々可申様無之候、とかく貴所事者、片

時も急候て、此方へ御越候へく候、不可有御由断候、恐
く謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年七月廿五日戌刻〕

義弘(花押)

又八郎殿

266

〔御文庫二番箱家久公三巻中〕「家久公御譜ニミヘス」

尚以此書狀到着次第、早く御出待申候、以上、

態申入候、在陣衆可申渡候旨、被成 御朱印候、各相談
可有之候之間、到釜山浦可有御出候、急申候之条早く申
入候、恐く謹言、

七月廿六日

寺志广守

正成(花押)

小攝津守

行長(花押)

嶋津又八郎殿

御陣所

267

〔袈裟菊丸 後下 常久譜中〕
〔総守〕

家臣有宇多與右衛門尉者、慶長二年發於薩摩上京師、而
捧訴狀於安宅三河守殿、故既及糺督、于時三河守招五代
右京亮・有河助兵衛尉・帖佐彦左衛門尉、令之聞與右衛

268

門尉之所言、而後三士寫訴狀與口狀以獻 龍伯尊君、
龍伯法印通之於義弘主、義弘主在朝鮮國勞軍務之際、封
答書贈京師、其寫本共記末者也、且 太守兄弟所賜之書
亦悉記左地矣、

一晴衰相終候より袈裟菊さんてう寔迷惑候之間、幽齋様
龍伯様へ御談合被成、堪忍分として三百石餘被下候へ
共、中く此分ニ而ハ難成候間、於鹿兒嶋度く龍伯様
へ御佗共申上候へ共、御意者無御別儀、忝被仰下候へ
共、當時者彼袈裟菊事ハ天下ニかくれ罷居候間、知行
共被下候する事者、先此一節者難成之由被仰下候、承
者是又御尤ニ奉存候處、幸侃老上洛被成候、承付候而
幸侃老を以三州様へ袈裟菊加門ミやうしきの事、向後
奉頼由申上候へハ、其御返事ニ一段忝被仰下候間、其
筋を以去々年袈裟菊むは母之使として拙者令上洛候、
子細者去年京都ニ而龍伯様・武庫様御配當共候由を承
及、我上被申候、其時分者武庫様者御下向被成候而、
舟中にて我等も參ちかい御佗之儀不申上候、然者京都
にて武藏入道取成以、龍伯様へハ税越入道を以御佗之
条申上、御返事承候而先年之筋にて候間、安宅様へ

可罷出候欵、いかゞ候する哉と武藏入道へ尋申候へハ、可然よし承候而、それより罷出候而、先年幸侃老にて申上候筋目、御存之様ニ袈裟菊事向後奉頼由申、別而御念を入られ、知行共おもひの外に案堵共申候事候、然者是を袈裟菊家中之者共内より、何分ニ武庫様へ悪様ニ被申候哉、我罷下候てゝ、鹿兒嶋にて武庫様御使として相良五郎左衛門被申候御意趣に、我等事安宅様へ懸御目候事、何様以曲事ニ候、其いわれハ國元ニ申分、三州様へ御使之外ニ者、直ニ罷出事有間敷と候之處ニ、拙者罷上候而安宅殿へ參あひ候事、野心同前にて候、乍去野心共ハ銀子五百目三百目共にてハ中々成間敷候、ケ様之私成事、後日三州様などへ直ニ袈裟菊前々音信共相構有ましく候と、武庫様御意として相良五郎左衛門申され候間、其後とかく御方様へ袈裟菊御無沙汰ニ候事、公儀ニ相はつれ候へ共不及是非候、我等事ハ此儀ニより候て、袈裟菊之母へ武庫様御書狀を被仰やうハ、我等事氣まかせ物にて此度も罷登、三州様などへ御内意共申承候、曲者ニ候間、後日御ために成間敷候間、親子共ニ腹きらせ可有由、条々被仰候へ共、拙者事ハ祇管院落城以後、大概人ニすくれ奉公

申候間、とかなきよし大かた被仰上、先其一節を身上のかれ申候へ共、右之行通を以、知行をも人同前ニも不下、中々諸人よりハ物おかしくおもはれ、奉公かとかに罷成、又々うつろの老名中共我等事を武庫様へ条書以申様、拙者申きり候、公役も無公役ニ罷居候など悪様ニ被申、相良五郎左衛門へ内談被申由承付候而、彼是身上難有候而、當時者袈裟菊纒のすまい不罷成候てつふれはて申候間、せめて爰迄御無沙汰被申候事、袈裟菊の無沙汰ニてもなく候、又我等使申候一儀も、我等ハ申閉目候、只家中下かちの故、色々有事もなき様ニ、又なき事も有様ニ武庫様へ申上候や、何時も御使として相良五郎左衛門尉申分ニより、如此成はて候間、爰迄無沙汰之儀、袈裟菊又我等か無沙汰なきよし爲可申如此候、乍恐巨細者以御面可申上候、右之内御不審候ハ、御糺明可有候、以上、

慶長二

七月廿九日

宇多与右衛門尉在判

安宅三河守殿様

(秀安)
參人々御中

一 加徳之嶋之前ニ番船三度參候、始者加徳嶋ハ大田吉兵衛殿・右馬頭殿衆川上六郎兵衛殿兩人、安川原江御使ニ被參被罷歸候ニ、番船此船を見付追掛、海上老里半御坐候處ニ、半道茂被參候時分、加徳嶋ハ海上を被見候得者、番船味方之船ニ押掛取合躰ニ相見得候間、何レ茂船ニ乗り追々續被申候、然ハ敵ハ急ニ追掛候得共、大田殿頓而加徳之嶋江着被申候、川上殿ハ加徳之北ニ小嶋之有之候ニ着被申候、加徳嶋ハ何レ茂續被申候、頓テ敵引退申候、次之度者加徳之南之嶋崎ニ番船水取ニ參候処ニ、何方ハ申上候哉、御陣ニ相知、何茂續被申候、然者唐人俄ニ驚申、船々皆々馳乗候ニ、餘リ急ニ相乗候哉、一兩人海ニ落入相果申候、其時分敵近被參候衆、中野甚兵衛殿・山路殿兩人相果被申候、忠恒公茂御續被遊候得共、最早敵引退申候、頓而其日者夜入候故、忠恒公并御供衆、其許江野宿被遊候、次日 義弘様茂小船ニ而被遊御差出、水主ニ洲入被仰付海ニ落入候唐人皆引上ケ申候、亦山ヲ御狩せ被成候得者、唐人老人狩出、則召列如御陳被遊 御歸館候、其次之度者番船加徳之前ヲ押廻、頓而罷歸候、其時分爲何儀無御坐候、

270 「朝鮮日々記」

一番船破之儀、酉七月十三日ニ而候、唐嶋与加徳嶋之瀬戸之出口を番船五十餘艘ニ而、海上を関塞キ罷居候付、十二日ニ藤堂和泉守殿船大將ニ而、備前中納言殿其外何茂諸大將番船破ニ被成御立、同十三日之夜内ニ被召掛、番船悉被成御燒捨候、惟新様・又八郎様茂十二日ニ唐嶋江被成御渡、四五里陸路被成御續、陸江上り候敵餘多御討捕ニ而候、其後番船不殘相亡候故、何茂三日御滞留ニ而、皆々御歸陳被遊候、其時陣場より直ニ赤國江者御立ニ而無御坐候、

271 慶長二年丁酉

七月十五日、樺山分助豊久の臣にて諸將と哨舟を破に從ひ、奮戦して死之、年十九、分或作文、山口彌五助亦同上

八月十五日、有馬龍右衛門亦豊久の臣にて、此月十三日諸將陥さるの時先登して死之、下も長倉傳左衛門・一見八助、皆同し、敵首十三級を斬れり、阿波侯の士と刃傷ニて死す、年廿四、戦亡板ニあり

二十八日、村尾與五郎重良阿波侯の士と刃傷ニて死す、年廿四、戦亡板ニあり

十一月十八日、石原助五郎朝鮮に戦死すとあ
 此年、中野甚兵衛加徳島に哨舟來て水、山路某上と同し、疑榎并六郎左衛門入來院重時の家臣也、加徳、今村玄蕃
鳴に戦死とあり、下皆同し、

左衛門孫十郎・中間喜兵衛以上重時、小者竹藏喜入忠政に死、弥兵衛同上、白濱孫右衛門重辰月日詳かならず、朝鮮戰死、

〔朝鮮日々記〕

一 赤國入之儀〔七月也〕同廿五日、惟新様・又八郎様其外諸大名

衆、又赤國江御立ニ而候、其日者何茂唐嶋江被成御渡、

翌日唐嶋御出船ニ而、七月八日〔廿八日欵〕ニ赤國之内波頓与申所

江御着被成、此波頓へ大川有之候付、其河を御船ニ而

御登被成、波頓之在所江御着ニ而候、其夜者何茂此河

江〔本、〕添ニ而御陳被遊候、薩摩之御陳者河ノ北ニ大谷御坐

候ニ被遊野陣候、其後此所江五十日御滞留ニ而、又南

門与申所江日數七日ニ御着被成候、但御着之日者八月

十三日ニ而候、此南門江朝鮮人大勢籠城候間、何茂押

寄城之四方ニ皆々御陣被付候、薩摩之御陣者、敵之城

ノ北之方四五町引除キ、加藤主計頭殿与奥海道ニ中ニ

置、兩陣ニ被成御取候、彼御兩陣之儀者敵之城ニ御掛

被成、只奥方ノ若敵ニ加勢茂可有之与御用心ニ如此之

由候、敵之城者廣キ田之中ニ、瓦之類ニ而四方ニ土手

を築キ上ケ、外ニ大堀ヲ掘り、其下ニ乱杭ヲ振立、大

城ニ構申候、爰許江三日御滞留ニ而、八月十五日之夜、

城涯江押寄、弓・鉄炮を散々ニ打立、鎗・長刀ニ而被

責入候間、頓テ其夜之〔落款〕〇半時ニ無吳儀落城候、遂行敵

五百餘人、薩摩之御陳前ヲ馳通候間、其敵四百廿餘人、

薩摩之手より御討捕被成候、敵老人木ニ馳登候間、

惟新様鉄炮ニ而御討落被遊候、然ハ其夜者八月十五夜、

如何ニ茂明月ニ而候処、薩摩之御手敵ニ茂御掛不被成

緩々御陳ニ并居、何茂他國之衆被致軍□御見物ニ而

候、殊ニ薩摩之御陣者如何ニ茂高キ所ニ而候間、敵之

城を目下ニ見、何茂諸人之働具ニ相見得申候、然ハ此

城四五町方之大城ニ而候処ニ、敵漸四五百人ニ不相過

候事、爲何儀ニテ如此無勢ニ候哉与、諸人沙汰ニ而御

坐候、後日ニ承候へハ、三日前ニ大雨之降候夜、竊ニ

夜ニ紛レ小西殿之前ノ過半爲落行之由候、

一 同十六日、右南門落城之旨、義弘公・忠恒公ノ使札

日本江御注進被仰上、大閤秀吉公及上覽、則御返札

高麗江參候覺、〔略此〕

273

〔朝鮮日々記〕

一 其後此南門江皆々十日餘御逗留ニ而、夫ノ又何茂道を

分ケ、各御請取之道筋を御通被成、頓而南門より奥天

〔朝鮮日々記〕

条与申所江御着被成候、同ク 惟新様・忠恒公茂御受取之道筋より、日數二日ニ天条江御着被成候、然者南門ノ天条江御越之時、道ニ而薩摩衆与他國之衆与七八人被致喧嘩、村尾与五郎殿并他國衆等兩人相果被申候、其後天条江五三日御滞留ニ而、亦天条より奥拜南与申所江二日三被遊御着候、然者拜南之者何茂妻子曳列、近邊之山江城登り仕候間、長五六寸之手札ニ嶋津之人与書付使ニ持せ、山々江御遣候得者、何茂御手ニ相附、其所之米上納仕候、其後拜南へ廿日計御滞留候得者、諸大名御歸陣、同敷 御兩殿様茂拜南ノ泗川之古館江被遊御着候、但拜南ノ泗川過之日數者覺不申候、比者霜月欵与存候、

一 泗川之新城江御移之事、右 御兩殿様自赤國泗川之古館へ御參着之時分、此泗川之内ニ新城与申て、古丸ノ一里半程有之候所ニ、爲薩摩之御陣御普請有之候、御普請之御大名長曾我部土佐守殿・伊東修理太夫殿・嶋津又七殿・秋月三郎殿・垣見和泉守殿・高橋主膳正殿・池田伊豫守殿・中川修理太夫殿ニ而御坐候、直ニ

〔征韓傳略〕

惟新様・又八郎様赤國ノ新城江御參着之筈ニ候得共、御普請未相調候故、先古丸江被成御着候、其後古丸一ヶ月程被遊御坐候得者、頓而御普請相調候故、十二月廿日比ニ古館ノ新城江御移被成候、則 忠恒公者御本丸江被成御坐候、義弘様者二之御丸江被成御坐候、此泗川之新城者此中薩ノ御陳之有之候、加徳之島ノ二日路西之奥ニ而御坐候、其後御普請之諸大名者各如御陣被成御歸候、

一 八月朔○脇坂記

係九月誤

始發兵分三道向南原一隊、宇喜多秀家

爲將、行長爲先鋒、島津義弘・蜂須賀家政・長曾我部元親・加藤嘉明・生駒一政等屬焉、兵凡五萬、傍慶尚略雲峰而向南原一隊、毛利秀元爲將、清正爲先鋒、黒田長政・淺野幸長・鍋島直茂等屬焉、兵凡五萬、發慶州過密陽大丘出全義館、王城明兵出師將一戰而後向南原、豊臣秀秋在釜山、遣山口正弘等將自密陽玄風入於忠清道云々、秀家等將攻南原、惟敬既告行長曰、陳患衷在全州將援南原、於是令義弘・清正遮援路、愚衷遂不能出兵、參取征伐記・島津家記、○按征伐記清正作嘉明、今從島津家記、

〔全〕

十五日、夜發矢砲圍城、黎明將拔城時月色如晝、高虎
 与安治議謂、至曉敵必堅守、不如乘月明先襲之、安治
 可之俄發喊薄陣、城兵投石防之、高虎梯城而突入苦戰
 遂破外郭云、太田一吉亦率其勇兵大井何右衛門毀南
 門斬敵百餘、武家盛秀家・行長等斬首三千餘級、秀吉義
 弘遠陣北山頭月色如晝、縱觀戰爭、城兵逃過山下、義
 弘出兵掩擊斬四百二十餘人、一人有攀木而匿者、義弘
 親發銃斃之、島津傳鹹于名護屋、秀吉贈書賞焉、古簡
 安治獲首二千餘、後秀吉賞其功加祿三千石云、雜纂

〔全〕

一〔九月也〕此月以拔南原全州、慶尚・全羅二道平定、諸將相議、
 慶尚道義弘統管之、全羅道行長統管之、揭榜於二道、
 令逃民還其鄉里務農事、逃匿不出者處之刑、我兵害人
 民爲凶暴者許訴之、征韓
錄

〔義弘公御譜中〕

大明諸臣相議曰、是度日本再起大兵者是石星之罪也、石
 星聞之責沈惟敬、惟敬曰、日本揚帆者唯讓朝鮮之失禮耳、

非背大明之命也、徐成楚難之曰、與師十數万、〔本マ、〕浮海數千
 里、豈爲失禮而已哉、於是諸臣皆歸其罪于石星、〔下上城〕遂下獄、
其後万曆二十
七年夏遂死

朝鮮乞援兵甚急、然大明以比年兵戈屢起、故無應其召募
 者、大明大擾、

〔御文庫四拾八番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

此比者可爲奧入候、御軍勞之段察存事候、餘々心遣千万
 候之間、就其賴直坊法印賴存候て致祈念候、札大小七
 ツ・守式ツ・卷數令進入候、然者彼札守之内、義弘へ茂
 可被進事尤ニ候、其元万端賢慮肝要ニ候、猶期後音候、
 恐々謹言、
〔朱力キ〕
〔慶長二年款〕八月朔日 竜伯(花押)

又八郎殿

『永吉領主藏』

尚以御歸朝之刻、可被加御褒美旨候、以上、

七月十六日御注進狀、今日九日於伏見披露申候処、各御
 手柄無比類儀、御感不斜候、依之名ニ被成、御朱印候、

誠番船之根切、大慶不過之候、弥陸地へ御動、各被相談、無御越度様御行肝要候、恐々謹言、

〔カキ入也〕
〔慶長二年〕

八月九日

長大
正家(花押)
増右
長盛(花押)

嶋津又八郎殿

御報

〔家久公御譜中ニ在リ〕

〔此正文、御文庫ニ番箱家久公三卷中ニ被載置候〕

281 今度於唐島表、番船百六拾餘艘伐捕刻、其方自身碎手切

乗、三番目船唐人不殘切捨由、手柄之段無比類候、殊更不燒其船日本江差渡儀、御感不斜候、何茂歸朝之刻、可被加御褒美候、猶徳善院・増田右衛門尉・石田治部少輔・長東大藏太輔可申候也、

八月九日 御朱印

嶋津又七郎とのへ
(兼久)

282 〔正文在文庫〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

七月十六日注進狀、今日九日到來、加披見候、今度番舟

唐嶋ニ有之而、釜山海表へ切々取出、日本通路相支候處、去十五日之夜相動、彼番舟百六十餘艘伐捕、唐人數千人伐捨、其外海へ追はめ、并先々津々浦々十五六里之間之舟共悉燒捨之由、手柄之段無比類候、以來迄番舟根切仕候事、御感不斜候、何も歸朝刻可被加御褒美候、猶徳善院・増田右衛門尉・石田治部少輔・長東大藏大輔可申候也、

〔朱カキ〕
〔慶長二年か〕八月九日 ○ ○ 〔大關朱印〕

嶋津又八郎とのへ

〔外ニ同案薩摩侍從との一名ノ宛アリ〕

283 〔義弘公御譜中〕

〔正文〕

七月十六日注進狀、今日九日到來、加披見候、今度番船唐嶋ニ有之而、釜山海表へ切々取出、日本通路相支候處、去十五日夜相動、番船百六十餘艘伐捕、唐人數千人伐捨、其外海へ追はめ、并先々津々浦々十五六里之間之船共悉燒捨由、手柄之段無比類候、以來迄番舟根切仕候事、御感不斜候、何も歸朝之刻可被加御褒美候、猶徳善院・増田右衛門尉・石田治部少輔・長東大藏大輔可申候也、

〔朱カキ〕
慶長二年八月九日 ○ 〔朱印〕

羽柴薩摩侍従とのへ

〔上包〕
羽柴薩摩侍従とのへ

284 〔義弘公御譜中〕

〔正文〕

追而被仰遣候、大明之人數自朝鮮都五日路も六日路も、
此方へ罷出、於陣取者、懸留則對陳を取、急度可令注進
候、此方御留守之儀者、秀頼ニ江戸内府・加賀大納言・
越後中納言兩三人を被付置、其外之御人數者、自御跡追
こ可相越之旨被仰付候、御自身廿騎三十騎にて被懸付、
被成御渡海、即時可被討果候条、其中者聊余之動不可仕
候、先年可被成御渡海と思食、既御馬迄釜山海へ雖被遣
候、各依相留無其儀、于今御無念思食候、此度之儀者注
進次第、富士・白山・愛宕・八幡も照覽候へ、可被成御
渡海候、然者各船ハ有次第爲御迎、右注進之御返事不相
待、至于名護屋可指越候、早速爲可被懸付、自大坂名護
屋迄之間、浦々泊々ニ早船・次舟・次馬早被立置候条、
海陸共ニ不移時日可爲御着座之間、可得其意候也、

〔慶長二年〕

八月十日

○ 〔朱印〕

羽柴薩摩侍従とのへ

嶋津又八郎とのへ

〔既ニ昔年之写アリテ重復ナレトモ、参照ノ爲更ニ写置也〕

285

〔嶋津氏文書〕

〔自伏見御返簡〕

〔本文書ハ二八二・二八三号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔カキ入〕

慶長二年八月九日 大関御朱印

羽柴薩摩侍従とのへ

嶋津又八郎とのへ

286

〔全〕

〔自伏見〕

〔本文書ハ二八四号文書ト同文ニツキ省略ス〕

287

〔嶋津氏文書〕

今度以 御朱印如被 仰出候、自然大明人朝鮮之都を過、
五日六日路此方へ罷出、於居陳者各も對陣候て被懸留、
可有御注進候、其次第ニ御人數者、跡々追々可罷越旨
被 仰付、先御自身廿騎三十騎にて被成御渡海、可被討

果之旨 御旋候、御留守等之儀も、如 御朱印被 仰付候、然者名護屋迄之間、浦々御泊々ニも早舟・次馬等被爲立置候条、則時ニ可爲 御着座旨候、何も 御朱印之面、日本神、富士・白山・愛岩も御照覽、少も非御僞候条、不可有御油断候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長二年〕

八月十日

長束大藏

正家(花押)

増田右衛門尉

長盛(花押)

(備山)
羽柴下総守

雄利(花押)

淺野彈正

長政(花押)

薩广侍從殿

嶋津又八郎殿

人々御中

〔此一通モ義弘公御譜中ニ在リ、乱合ス〕

〔義弘公御譜中〕

邢玠素惡惟敬深矣、故欲執之、而恐彼奔日本告大明之情事、由是先贈書以安惟敬之心、然惟敬猶疑之、欲奔釜山浦而無便、邢玠使楊元率三千兵赴南原、謀具惟忠・麻貴

及朝鮮將元均、防惟敬之逃于釜山、惟敬猶有從兵二百人、故邢玠恐其乘夜而遁、遣別兵二百人而強代之、惟敬銜之、即遣婁國安・張龍二人於釜山、說行長以歸降之事、行長同之、逾日柳川調信率五百人遣人于宜寧、而召惟敬、時朝鮮斥塚抑留之、張龍自間路進見惟敬而勸其行、楊元聞之曰事已急矣、馳馭到宜寧、見惟敬馱狐貂而進行問曰、日本如何、惟敬曰、和親其不可成矣、楊元曰、不可成則吾子何不明言于邢玠乎、惟敬曰、我往慶州與清正交話月餘而歸、時惟敬顔色甚變、楊元察其逃走、即聚其兵、回惟敬馬相圍而歸丹城、邢玠即奏于明帝、以下惟敬於圍圍、是年明主万曆二十五年也、同二十七年九月二十四日、惟敬遂伏誅

慶長二年七月、沈惟敬恨楊元之捕己、而使婁國安告于行長曰、南原城者楊元及全羅道兵馬節度使李福男所守也、城中兵士不多、足下與諸將合攻之、則城必陷矣、南原東有雲峯鳥嶺、南有三浪大江、路通于金海・竹島、是朝鮮要害之地也、足下須置騎兵於此、其右有閑山島、邢玠使遼兵三千守之、陳愚衷以二千兵在全州、朝鮮將金應瑞・李元翼在雲峯、權慄・元均在閑山島邊、皆爲南原之援勢、足下若分兵當之、而後攻南原、則彈指之間可立拔屠之功矣、行長亦素欲取南原、而受 秀吉之感賞、故聞之大喜、

即與諸將相議將攻南原城、

元均與明兵相約欲攻釜山浦城、行長聞之率兵襲破元均水軍、進取閑山島、依是舟師之便最善矣、日本舟師既亂入于光陽豆耻津、

慶長二年七月、破所據于慶尚道巨濟之戰艦去、陣彼地之際、沈惟敬有爲內通之事、諸將聞之熟致群議、將發向全羅道、或曰以故不歸于加德本營、同月廿八日、解纜於巨濟、經三十餘里海程、著船於河東岸爲左軍之列、以宇喜多秀家爲大將、而小西行長爲先陣、島津兵庫頭義弘·同又八郎忠恒·蜂須賀阿波守家政·長曾我部土佐守元親·加藤左馬助嘉明·生駒讚岐守一正等五萬兵從焉、右軍以毛利秀元爲大將、加藤清正爲前鋒、黑田長政·淺野幸長等五萬人屬焉、發慶州過密陽大丘入全義館、欲與王城明兵相戰也、中納言秀秋在釜山城、遣山口玄番允·伊藤雅樂助·南部無右衛門等八千人、與秀元·清正相共進兵于忠清道、權慄·李元翼雖屯于雲峯、而不及防戰、皆逃于東境去矣、左右軍衆共十萬兵、八月十二日、到于南原城邊、秀家·行長等同十三日、整軍列將攻南原城、時拈鬪欲向全州而絕南原之後援、義弘·喜明得鬪、因是定陣所向其地、以毛利民部大輔·竹中源介一輪、其書記左、

289

「御文庫二番箱義弘四卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

態申入候、御陣所之儀、先刻各如御相談、松原之大山へ御上候而可然存候、爲其得御意候、恐・謹言、

〔朱力牛〕

慶長二年力

八月十三日

毛利民部大輔

高政(花押)

竹中源介

隆重(花押)

羽兵庫樣

御陳所

290

「義弘公御譜中」

依右之得鬪、加藤左馬助嘉明與義弘父子者、南原城北嶺陣于松原之大山、警衛不敢慢也、故陳愚衷不能救南原城、既而秀家·行長四萬餘兵均進攻南原、楊元及李福男固守焉、鳥銃·半弓亂發不已、攻之城尤固矣、於是行長等不暫攻之、各先退陣而遠攻焉、城中見之爲忘累日之困羸、故各解甲胄而安臥、十五日夜半、行長麾兵急進攻破南門而入、秀家·家政·元親·生駒·藤堂高虎亦各爭進入城、楊元在帳中、驚遽不及著衣、盤礴跣足而逃出、李福男戰死、秀家·行長亂入于城中、丁此之時、有所逃散之敵兵、

義弘父子之從兵橫攻之、而得敵首者四百二十一、其中三級義弘手自斬焉、其首劓之裁捷書獻日本矣、今夜斬敵首者凡三千餘級、生口亦不少、馳捷書於日本、行長兵威大振、

291 「家久公御譜中」

就全羅道或云赤國、發向、慶長二年丁酉七月二十八日、解纜於慶尚道巨濟、渡三十餘里海程著船於河東岸、從左軍列以宇喜多秀家爲大將、以小西行長爲先陣、諸將共五萬兵從焉、右軍以毛利秀元爲大將、以加藤清正爲先陣、諸將共五萬兵從焉、左軍過密陽大丘入全義館、欲與王城明兵相戰也、各赴忠清道、權慄・李元翼雖屯于雲峯、而不及防戰、皆逃于東境去矣、左右軍衆共十萬兵、八月十二日、到于南原城邊、秀家・行長等同十三日、整軍列將攻南原城、時拈鬪欲向全州、而絕南原後援、島津義弘父子・加藤嘉明得鬪、因是定陣所向其地也、詳記義弘譜中矣、依拈鬪得之、加藤左馬助嘉明與義弘父子者、南原城之北嶺有多松之大山陣之、警衛不敢怠慢、是以絕全州之通路、陳愚衷不得援來也、秀家・行長等四萬餘兵均進攻南原城、楊元及李福男固守焉、烏銃・半弓亂發不止、城尤固矣、

於是行長等不暫攻之、各先退陣而遠攻焉、城中見之爲志累日困羸、各解甲胄而安卧、十五日夜半、行長麾兵急進攻破南門而入、秀家・家政・元親・高虎・生駒亦各爭進入城、楊元卧帳中、驚遽不及著衣、盤礴跣足而逃出、李福男戰死、丁此之時、有所逃散之敵兵、義弘・忠恒橫攻之、而得敵首者四百二十一、今夜諸將斬敵首者凡三千餘級、生口亦不少、悉劓之裁捷書獻日本者也、

292 「右馬頭以久譜中初征久」

慶長二年丁酉、義久主賜種子島於以久、同年八月、以久從義弘主而在于朝鮮國、同月十三日、日本諸將胥議欲攻楊元及李福男之所守之南原城、時拈鬪定守攻之方所、義弘主得陣南原城北嶺之鬪、因主父子陣于茲、以久亦從備焉、

293 「又七郎豐久譜中」

慶長二年八月、日本諸將赴全羅道、和人謂之赤國、而同月十三日、圍南原城、同十五夜丁攻責之時、豐久魁于諸將獲于敵首者十三級也、諸將次以攻入、明兵失防禦道、大敗以潰者也、此時豐久之臣有馬龍右衛門・長倉傳左衛門・二

296 「義弘公御譜中」

陳愚衷在全州、聞義弘・嘉明之遮通路、而不得救南原、時有告者、南原已拔矣、全州士民驚迷、愚衷制之、士民等大起急攻全州、燒倉粟而逃散于四方、愚衷大驚、聞日本兵既到任實、遽驩弃城而遁逃、日本兵即取全州、聚蓄米穀・鐵炮・弓矢而暫休焉、

297 「北郷三久譜中 弟忠虎」

慶長二年丁酉春、義弘公再依 秀吉公之命航朝鮮國、三久爲長千代丸之軍代、率庄内兵在旅于加德島、同年八月十五夜、義弘公與諸將共、陷全羅道南原城之時、三久有戰功、

298 『伊地知助太郎藏書』

谷山ふく本村之内重返地目錄
前田 上島二段九せ十分 みる門之内
楠本 上島六せ 同 新左衛門尉
追はたけ 上島七せ廿四分三反三せ之内 對馬
うきめん 上島一せ十二分うき免 隼人佑
彦四郎

已上

慶長二年 八月十六日

伊地知千世菊殿
〔後勘解由左衛門重信〕

299 「御文庫四拾八番箱中」〔家久公御譜中ニ在リ〕

御書面之趣具令披見候、仍野村五郎二郎儀ニ付承子細候、爰元ニ者左様之儀不相知候、國元へ歴々罷居候間可糺承由申下候、定而様子聞候する、追而可申談候、隨而其境唐仁か相絡由、切々其聞候哉、弥御賢慮肝心候、乍去頃者和平之御慶可有之由候、左候者、急度一途可相聞候、先々目出との申事候、將又町縫殿助へ御鎧被仰付候、未相調候へとも、彼是急用之儀候故、不圖渡海させ候、自是出來次第指遣可申候、此元之様躰、武庫へ進候書狀ニ細々申候、可被聞召候、猶委曲含口狀候条、不詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕 慶長二年カ八月十四日 龍伯(花押)

又八郎殿

300 「袈裟菊丸常久譜中」

袈裟菊殿内宇多与右衛門尉至安宅殿ニ申狀を出し候、

然者彼与右衛門尉口から今日廿二日可被聞召置之由、三州より使を以被仰候而、存松・平田太郎左衛門尉・福崎新兵衛尉、我ら三人も罷出可承之由、三州御さし圖にて、依之存松より肱枕へ以捻被仰候之間、可罷出之由被申付候条、さし出承候、勿論申状ニ巨細御座候、此外ニ申分段ニ在之事、

一 幽齋様御下知を以袈裟殿へ三百石被遣候、其配當を彼与右衛門尉仕、さま／＼不届事共在之由、義弘様も龍伯様へ御申之通、竜伯様より安宅殿へ被仰候を、三州より彼与右衛門尉へ被仰聞候、宇多申候へ、其時知行御給候使へ仕候、其配當者曾而不存候處、袈裟菊殿家中之者如此之虚言申かけ候、其時与右衛門尉親へ配當衆之内にて候由申候事、

一去々年袈裟菊殿へ從幸侃書状を以被仰候者、知行案堵之御礼、安宅殿迄可有御申之由候間、相良五郎左衛門尉を頼、義弘様へ言上候へ、可爲無用之由御意通候之間、即幸侃へ阿多大炊助參候而此由申候へ、義弘様御下知次第可然之通候之間、御礼相延候、又去々年之冬、武庫様御上洛前かと栗野へ御在宅中ニ、瀬之口名字之者・鬼塚兩使を以、右御礼のため一人御

供させのほせ可申之由、本田源左衛門、又今一人名失念候、兩人迄申候へ、其分ニ候而者可惡之由、源右衛門尉被申候て披露もなく、右之兩使罷歸之由宇多申候事、

一 袈裟菊殿へ此跡より別而御奉公申候者ニも、知行等者衆なミに被下、御奉公不申者之内ニも、結句御加増共有一之事候、其内に珠算計ニハ五十石御差圖を以被下由、相良五郎左衛門尉被申候事、

一去々年配當之儀ニ付、阿多大炊助・彼宇多其外四人、かこしまへ被召寄、様子被仰聞候之間配當仕候最中ニ、阿多大炊助帖佐へ被召寄、相良五郎左衛門尉手跡にて人數等被書立、加増之分量も御下知候間、又配當仕なをし候之事、

一 武庫様御書を以、袈裟菊殿母儀へ被仰候者、彼宇多事不届者ニ候之間、親子共ニ腹きらせられへき由候て、御書三通有之、御ミせあるへきよし母儀様被仰聞候へ共、御書ハ拜見申ニ不及由申候通被申候へ共、自然御書を隨身も仕候哉、しかと不承候事、

一 相良五郎左衛門・宇多間御糺明被成可被聞食候、萬一御糺明にても不相果候者、鉄火を取可申之通、宇多被

申居候事、

慶長二

八月廿二日

帖佐彦左衛門

宗光在判

有川助兵衛尉

貞豊在判

五代右京入道

友喜在判

川上四郎兵衛尉殿

(忠兄)

桃山權左衛門尉殿

(久高)

参

301 「御文庫廿二番箱八卷中」

從 大閣様被成下 御書候、忝令頂戴候、然者就所勞之儀、度々 尊慮恐悅餘身候、頃得快氣候之候、到大坂致出頭候、爰許隙明次第頓而令上洛、彼是可申伸候、仍乍輕塵沈香二斤令進上之候、寔補書面計候、此旨宜預御披露候、恐々、

八月廿三日

伊勢因幡入道殿

(真知)

「御譜中慶長二年ニアリ」

「義久公御案文也、御譜中ニ在リ」